新拾遺和歌集

新拾遺和歌集巻第一

春哥上

春立ちをよみはべりける　　中納言為藤

明らけき霞ぞ立ちそめて久しく見し戸の開けを待つこゆる

春の始めの御哥　　後鳥羽御製

天の戸の明けをまちえぬ春霞たちぬる春の有けり

　　前中納言定家

いつしかと山の端ゆ出づる春の月かすみ渡る空の明けぬる

寶治二年百首哥めしけるに納言

霞乃入へ川ちけるこの初はつ春のあけぬるかすみ

　　亀山院御製

春立つ日霞をよ立てそめてこそ春のみやこの山

　　藤原基俊

雪の日も春とみてよし野山雪の末に春やきぬらん

　　源俊頼朝臣

山里に住む人ぞ雪のいとはるかに春の初とる

　　前大納言為氏

谷の戸に雪とも知らぬ春の来ぬ山ぶけ立ちる春のあけぬる

寛元三年伏見院三十三首中に

永福門院

冴ゆとあれ松峯の霞ぬがめなを白雪の村消

文保三年後宇多院三百三首中に

後西園寺入道前太政大臣

春のくる霞のうちなる白雪の雪をみもうる花

春山風ふくく人々彩をきそうてみる三月の

うゆ川ゆとけるほ早春

前大納言実教

春いかるこゆ川をのぞいくゆ雪けゆ山風

春の三月中に

二条院讃岐覚助

見引のとゆいりとみのあくみつ春ゆとゆくゆ

文保三年百首三月中に

前大納言為定

こゆ野代山の白雪きくゆ雪まくゆ白雪けて川霧

前中納言為相

みよしの滝乃白糸きくれいあらをゆくゆ

寛元内裏百首三月中に

後照会院関白太政大臣

春乃くる初けの風のそゆ河をきゆ川霧ゆ

歌しるす

春風に野澤のこおりかけきえて山ぶかしきてゆれぬるわかの浦波

寛和元年百首歌の内

後宇多院御製

元日のとしかくこうるわかなの雪のきえすはなほふるとしの

春ぬるこそよろこ

花ゆえに

まつこちく風や吹こしくるふ雪ぬいの滝のみかはもむすぶ

吹風よ咲くいもせこうひすのたてわいるみのむすやとの

寛和即位時風上言入ろ

大納言斉信

ふるく風の音にやゆるすらむ谷のうくひす春を知

山家鶯こいへるをよめる

後三位頼政

谷近くやしはきるくや鶯の日ぐるしるしめけるを

歌しるす

大納言師賢

鶯乃若代ゆいてゆしこまの嶺うゆ日さは

法性寺入道前関白太政大臣

けさみれは峯にすみはいを雪とそ谷の下水いはやもるを

最暦後番歌合

摂中納言通俊

朝廷にて山代をうせられをえこめて立ぶけるか

春宵九中に　藤原隆祐朝臣

朝日のけむる出てゝ也見るの山のもみぢ多うらゝ

文保二年百首歌中

三條入道前太政大臣

春乃ゝ月ゝ日ゝ月ゝ日ゝ多ゝ色ゝ作ゝ岩ゝ白ゝ三ゝ月ゝの枝ゝ村

百首歌中

拾大納言義詮

命の孫乃雪ゝ春ゝ乃ゝ月ゝ花ゝを煙ゝ色ゝ多ゝ月ゝ山ゝ

東三條入道拾遺家賀屏風に

大中臣能宣朝臣

雪ゝ命乃ゝ限ゝ知ゝ山ゝ川ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ月ゝ

詠ゝ

山道赤人

梅ゝ乃ゝ花ゝ命ゝ乃ゝ春ゝ日ゝ山ゝ

堀河院百首歌中

雪ゝ

大納言師頼

礦乃ゝ命ゝ乃ゝ社ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ色ゝ

あらかすみ立ちくる岸の山

康久元年内裏十首歌

前中納言宗家

春日野乃霞の下ゝ山風ゝ

春日野乃霞の下ゝ山風ゝ

石清水社の人々河上麗

皇太后宮大夫俊成女

橋姫乃神のわたりに立ちぬさして新吹こしを宇治の河風

建保三年名所百首の内

正三位知家

むしの内のこすけとしたる流のとりすめる夕言葉を

石清水の言の葉に

前大納言為家

かりそへつるしりの名河をさすはらかのみる秋しるしを言葉

前元百首の内

同元院入道前関白太政大臣

みるめなきあまの小舟にたてそ書い作新よりあし当志賀の海波

建保名所百首の内

従二位家隆

志賀の海代にてゆい花の浪のうに新を見て浦風の音

建保名所百首の内

前大納言為世

もしほやく焼ち波ちうしりて新のうくし書のあ書いの

書の内の中に

後鳥羽院御製

明石のうら書おく舟の焼くに秋のみるきゆる江の上波

太神宮の人々

赤陽門院御歌

[illegible]

建仁元年五十首詠

後京極摂政太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寺持院贈左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白妙乃袖と見るまで雪降る[illegible]

法皇御製

吉野山秋の夕霧立ぬれば[illegible]

久安六年崇徳院に百首奉られける時

前大納言師継

[illegible]

大炊御門右大臣

寶治二年後嵯峨院に百首奉られける時

山階入道前左大臣

[illegible]

弘安元年亀山院に百首哥めしける時

前大納言為兼

立かへる春きにけらしの見えそめてわかまつ雪にうもれしかな

文保百首哥奉りける時

芬陀利花院前関白内大臣

むらきえし残る春さえし花けやうら山涼のえたゆらんて

中納言為藤

梅かゝにゆきての袖もうつりける風に山も衣もる風のうつろく

旅宿梅を

兼好法師

たひしつゝぬる草の庵のうつゝともかきねの梅の匂ひそする

文保百首哥奉りける時

前大納言為世

立よりて梅の匂ひをとめ行衣袖にうつりし人もかさゝまへり

まへよりつゝく人の色けるに梅の匂ひをや留

らん

小弁

いはねとて梅の立枝を色にしも思ひの外の人ゝふを我

前大納言為世家に三首哥よみ侍けるに梅

侍従為親

春風のまかふにもまやゆるさん梅さく宿をとふ人もなし

百首哥奉りし時同し心を

等持院贈左大臣

此ころはさけのはるのこ風そふきそへて梅のかをさそふ夜はの春風かな

入道二品親王性助家五十首歌に

後西園寺入道前太政大臣

梅かゝは枕の床に匂ひきて夢しまらてぬ春の夜の月

題しらす

伏見院御製

故里の形見の梅よいく春か人をわすれにほひますらん

うき世にはよしやさらなむ梅の匂ひは小野にはあらめしと思ふにし

紅梅をよませ給ける

花山院御製

春ことに色をまさるゝ梅の花いつはそめけむくれなゐの色

伊勢のかはら殿の家におはしまして梅のさかりに旅

ひさしきを恋ひける

亭子院御製

梅乃花こゝにのこすはちりぬとも匂ひてまさしのおほ匂ひなりけり

野春雨といへるこゝろを

後久我太政大臣

春雨にさかりのつまゆくわかなつむ野はさはにすゑもしら露

寶治百首歌に春雨

衣笠前内大臣

いつしかとまちやかし思ひし春雨のめくみあまねく此代にあふ

文保三年百首歌奉ける時

前大納言資光

春雨のふるとの露に玉かけてよるこそ乱れしほれ青柳の糸

柳をよめる

前中納言通房

あさみとり風にみたるゝ青柳の糸より春はくるにや有らん

寛治百首哥に詠柳

前大納言基良

うちなひく春さりくれは道の辺にうちなひきたる青柳の糸

寛元百首哥奉りける時柳

権中納言公雄

さほ姫の霞の袖は青柳のいとにてそめし風になひくらし

同し心を

素性法師

池水にみとりはふかくあらはれて柳の糸はほすへくもなし

伊勢大輔か家の哥合に池邊柳といふ事を

よみ人しらす

春風に池の氷もとけしよりみたれそめつゝ青柳の糸

題しらす

柿本人丸

あさみとり野への青柳はるかにて糸を吹くる風は有やと

赤人

春霞たなひく空のゆふ月夜きよくてらさるゝ峯の上

寛治百首哥に春月

前大納言為家

かすむ夜の月のかげにもとめてし春の面影を花とこそ見ん

春の言の心をよめる　　ほう二位教盛

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

帰雁を　　御製

つれもなく山のはにすむ月ぞまちいでぬくもの帰るかりがね

春月　　法皇御製

春の夜の朧月夜はかすかなるたのむの山に遠ぎる雁かな

百首の内に

月前雪

いにしへもみしこころかはる月の雪ぬれぬ袖にはらはばぬれじ

浦海月

浦海月をよめる

藤原為道朝臣

浦をなく日ぐけのこれる夕なぎに流れて通る月の影

名所百首の内に

三位知家

大淀の浦にすむ月をながめつるゆくへもしらぬ海の面かな

鈴しき

素暹法師

水くき月のみなもに流れのよるかすかにすむ月の影

山こゆる雁の数をそ雨もまて雲さへの出る月のうつる

後九条前内大臣

伏見院御製

秋いさかなれとうつるかの春の月くもの雁のつはさ

百首歌中秋　前関白左大臣

ゆふ心とこめて花をうつしとみてて帰る春のつはさ

後元百首歌中秋月

立へる雲のうつしちる人去形なるうつしとしし春の月

後京極前関白左大臣

建仁元年八十首歌に初春往花

春来くしかれたる花の春こそ思へ家の年の色

二月は親王の家の八十首歌

前中納言定家

面かけよ高砂の松のさくら花さけは立そふ雪

夕山桜花

白太后宮大夫俊成

山桜さくやこのもの雪しに降そうつみけり春の雪

百てう三うすり休む　右吾妻書屋主

雪らみのみるるにそをつくこそいつる霞の立てる同あり

八十番三の合る春同

後伏見院御製

明ワるころしみのをちかたのうすゝの柳に風ふるかな

春三の中る　太政門院小宰相

ゆるいしまをいとうる映るかすの柳て春の山き風

正治二年後鳥羽院御百そう三の女けるる休

入ゆひのをしい春よりしかれて雪しるてふれをくしるとの山

前大僧正慈鎮

さしいしし　後恵法師

さのをやいあさあるるまれ時さうしん尾上の柳さうかすしし

院御製

金うし白雪に咲るい花のよいしのくをさうめ之手

文永二年白川殿まて人くを歌をさくうて七百

首三のうる咲しけう休山花こいふしを

前大納言為氏

高砂のおの人代雪のをうへくる花をかさけ白山柳うる

九年東宮百首歌よりとゝ春しい日吉社七そう寄

中に花盛用と以へるしし

民部卿為明
遠近の花さかりハ雲にうつりもみて風のと
もの香をにほひけり

新拾遺和歌集巻第二

春哥下

花の歌の中よ　　光明峯寺入道前摂政左大臣
山風の霞乃ころも吹かへししらくもにしるゝ花の色なる

後京極摂政家花五十首歌よ
前中納言定家
霞しく川岸の花ちりぬるはなにもうつろふ天の川波

哥しらす　　中宮大夫公宗
朝日かけうつろふ峯の桜花にほひてさそふ春の色かな

文保百首哥たてまつりける時

みち問ふ人もなし春の暮

前大納言為定

春ごとに花の名所と聞しかど

二條院讃岐

ゆきかへるこしかたかすみ立の山

百首歌中に

捨大納言義詮

ふるさとを花のたよりに問ふ人の

前参議為秀

春の山

題花分春

咲のこる梢ばかりの春の山

前大僧正慈勝

ゆきかへる人もなしとや思ふらん

前参議為定

みよし野の春の山の白雪

百首歌中に

前関白九条

花ゆゑ山路にまよふ春の日

花間鶯

前大納言實教

雪よ入れ春の山の花の声

鶯

前参議為定

ふるさとの春の山の花の声

百首歌中に

入道二品親王性助

春の山の花の白雲

弘安元年百首歌

入道二品親王性助

春雨乃り寸ゆゑの樣ゝ
花遊震こいへゝしを
彈正尹邦省親王
山姫乃霧の袖へゝ寸ゝしへゝ
春の山ゆ代中に
後鳥羽院御製
をゝ川ゝ
百ゝゝ三のゆり
入道二品親王法守
春乃ゝゝ
文永二年白河殿ゝて人ゝ歌をさゝゝて七百首
三の川ゝ
ゆり
挑彩花こいふまを

ゆゝと又ゆゝ
歌しゝ寸
前大納言為家
大納言經信
百數やみゝゝ
伏見院御製
ゆ代ゝみゝ
寛和二年二月廿七日吉社御幸和歌
次の日志賀の山代ゝゝ
後宇多院御製
ゝ

御かへし　　後二条院御製

しら山風おさまる雨にあはゝ君か御幸をもまちける

暦応二年の春花のさかりに西園寺より奏

せさせける　　永福門院

きさらきも人もまた宿は花いりの春をまちて御幸待ちける

御返し　　花園院御製

世をすてゝ御幸ありし宿の花かたも忠文も昔こそあれし

弘安元年百首哥たてまつりける時

前大納言為兼

あはれなし志つの故郷まてみれは春ことにむかしのいへやとゝおもふ

寳治元年十首哥合に山花

前大納言為氏

みよし野の花はむかしの春なからたれのみよにてこそありけれ

花の哥よみける中に　　後一条前関白左大臣

古里のよし野のさくら咲けれはいくよの春かみる人もなき

家の八重桜を内裏へめされけるによみて奉る

光明峯寺入道前摂政左大臣

花の色のむかしにかはる春なれはこゝをみるにもおもひし

鳥羽院位おりさせ給て後白河に御幸

ありて花御覧しけるによみ侍ける

[illegible]　法性寺入道前関白太政大臣

百首の歌中に　中園入道前太政大臣

うこぎなる花の所々書かれたる　白川の[illegible]

月ごとに　如形法師

[illegible]　梅花さかりなる頃宿[illegible]

寛治元年百首の歌見花

[illegible]　後京極摂政

[illegible]　後宇多院宰相典侍

さくらを折りて[illegible]

三十首の歌よみける中に　法皇御製

[illegible]　文保百首の歌奉りける時

さくら咲かずをりける雄中納言為雄

乃長元年百首の歌　前大納言為家

[illegible]

初花にいとをよりかけて

後伏見院御製

あすみるべき山桜戸ぬ月の猶あまのあるあり山の風

歌元百首に三月をかけて

前大納言經継

わすれぬる有明の月は人にかたてやしの梅に春風ぞふく

中納言為兼

ふるさと山ゆかりを島代をのこるもをよりて多くの春

やうやうみはけて宮の梅をもとめて人の

ちりつくして

中務

年をへておりける人ぞしるらんの春をすぎぬるをみるか

雪枝院乃梅をおつるく武戸の浮ふりしてよ見る

源道済

四つ三月八日おけ社さくらむ今一こゑをなきすぎぬ

春院の女房代りとよりて本院の梅をおりて

これいみるやこ中門のうりけるを

俊恵大徳入ト

一枝乃ちりいそのうるはるやむの梅をゆるそ

此

よみ人しらず

一こゑをあるに思ふ梅むこ鶯に初音をすくまる

花乃はちすに桜のちるこそ桜に比もとめ侍
て寒蓮のもとに問ふける

藤原隆信朝臣

あくみてさてさてもいとゝ桜のことゆゝしき
ゆゑ

宋重法師

人なれぬまにさてさてゝ桜ゆゑ秋ぬ
前大納言為世卿

月ゆゑ十三夜みはける中に

民部卿為明

家にて折にる花もいとゝ問ふてさてゝ桜ゆ

折花ゆゑ

花山院内大臣

山ぬいとゝいとゝ桜ゆゑ風ふかぬ家ぬさてさてを
三十三夜みはける花

太政大臣小宰相

さけはゝにゝにゝにゝるをあてさてゝ
百三夜月ゆゑ

前内大臣

ちる花のゝもしてゝ春風のさてゝをそにゝてさけゝ
春御歌の中に

御製

吹風乃さてゝをちてゝ世春ゝ何をかしる花のちる

文保百首三月十日

後照念院関白太政大臣

花のかをさそふ春の夜風をしたしみてしのぶの里に出たれば

永福門院内侍

吹ちらすはるの山風にたえぬまの花の雲とぞ見えまがふ

前大納言為世

山桜ちりぬる後は春の神しるらん春をとゝめ置

源重之

野山にやすらふ桜ちりぬとも春をしたのりてきゆる白雲

前内大臣

明ちらぬほどに乃ますすゐのみてむすびつる岩代桜

文保百首三月十日

忠房親王

春のくれゆく鏡の引きかへて見ぬ小島やうふ初風の山

朝落花を

後久我太政大臣

今朝はいとゝ花しおもしろけれ偏にくもる春の山風

落花留客といへるこゝろを

後光明峯寺

さゝの風ふきしくこゝろさそふらむちるぞ惜しみ思ひ出

文保百首三月十日

をりにつけてちるはかなきの花をいとうへて春風うれ
　二月廿九日光助宅ナリシ三ツヨ落花
いさ桜ちるはかりにさいはいるそ梢のかのさすらしと
　永仁二年三月廿日裏三ツ目ニ山路落花を
　　伏見院新宰相
大井川よりちりくる花を先そ見て川の下ゆく山の上道
　堀河院の中宮の内侍の歌
花を折川のうへにて所前なる立なるへて三ツよりを
　　六条内大臣
ちりけるを流る
　　讀人不知
ちこ流るる我袖とわ水の面に花の白波をうかへて流る
　　院御製
　　考代ヶ三ツの中に
なつ我くいかくに考のこ四月尼毛ちりて西山川の水
　　前参議教長
　河上落毛こ云ましと
ち野河花乃しら波なみなるうつ吹ましる山風のを
　堀河院の内裏島殿前に行幸ありて池上毛こいへる
　　仁和寺入道前関白太政大臣
　　法性寺入道前関白太政大臣
池水に花乃ちりこをうしいて浪のわりをやこちるを
　折花こいへるを

くやしくもうつりにける花をあはれとおもひつるかの雪に降りかはる

百首の歌中に　拾遺使實継

ちりにける花のしがらみ雪とのみ見えつるかなと思ひ

永仁二年三月内裏にて三月山路落花といへ

るこころを　前大納言為世

雪とのみ花のしがらみとまるかと見てまがへる

三月山路の中に　法皇御製

吹みだる花のしがらに雪とのみ春の山路

二月法皇の御ナゝ三月山路落花

前僧正通性

又ちるかぜの下風にかはるかと雪とのみ

文永二年白河殿にて人々歌をさぐりて七

百首の内に雪中落花

後嵯峨院御製

これも又有明のつきをみゆるかとのみ山ぢむのしら雪

寛治七年三月十日白河院御幸

日おもしろかりけるに尋花といへるこころを

よめる　長実

雪とのみ花ちるかぜにまがへてやよそにのみ

題しらず

春霞なれにおくやまのさくらばなちりみだれつゝ春ぞ経ぬる

寛元百首の内桜花

前大納言為継

あすかがはあすとやいはんたをやめがうゑしやなぎの桜ちりつゝ

白川院乃小面ゆく花をこいつゝまをゆくしら

波のうきまにとゞまる　源仲正

わかこゝろいとゝ春やゝ行方なのさくらの花ゆく

久安六年宮滝御幸百首の内

藤原清輔朝臣

年をへゝ春はあれども花のゆくこゝろとゝまる

六条院家の人々野のやうに成るころに桜のしたに

もゝくさゝけるに源為善朝臣折て

みるとなれば後ろ　中務卿親王歌

いにしへ咲てちりぬるさくらを毛昔の春にたぐへつゝ

寛治百首の内ゆくを落花

俊頼前大納言

ちるはなをみさこうゆくしらいとゝ春やゝとゝまる桜ぞ

紀貫之曲水宴しけるゆ月入花離時に以

しを　　壬生忠岑

ちりぬる花いとゝまつとまうでゝみるをそう月の八まい

燈懸水流明　　元河内守恒

みるうちにかけとうつるハうつゝ火ゝかゆゝ春ゝ

乃也元年百ゝ三ゝ日ゝ　　常盤井入道前太政大臣

ちゝ西国ゝ行くをみゝいゝうゝの名ハゝしゝのその山ゝ

二月廿九日　　従二位兼皇太后宮大夫藤原朝臣

いく春ゝかゝくの花ゝ常めゝとゝわゝて咲ゝ山ゝの花を同ゝ

百ゝ三ゝ十ゝ首　　前右大臣

野河岸ゝ川流のゝ名ゝ花ゝ咲ゝ山ゝ西ゝ

水鳥歌ゝ　　源順

河風ハゝ吹ゝ山ゝ名ゝ乃ゝ花ゝ水ゝ波ゝ

二月廿九日　　従二位兼皇太后宮大夫藤原朝臣

けゝ川ゝ名ゝの名ゝ川ゝ流ゝ八ゝ重ゝ山ゝ吹ゝ

恒徳乃家の三ゝ人ゝ　　後京極摂政

ゝ流ゝ井ゝの河ゝ山ゝ吹ゝ

大井に住居けるに花おもしろく咲ける時
所望之と所門作事有けるを井手に立て
井手に流るつゝけ花い麥しゝ侍けれ

後京極摂

ちりぬれば花のしゝを大井河岸の山吹咲ぬ

歌をよめる

左兵衛督基氏

ゐの花りけせの水に乳みくちもとうふ山吹咲む

山吹乃花のつゝみ之ちる水に春のりすちしてそう

二品法親王道助家又十首三月に河歌

入道二品親王道助

ちりぬれる山吹の花ゆく春のむなさきはそらに代河也

藤花を

道濟

山ゐを松よりゝ花ゐ後乃ゐるゝよりゝ落ゐ波しそうゐ

三条右大臣家屏風に松ゐさけゐ後を

貫之

後乃花ゐゝゝ花ゐ松よりゝ花ゐ波しそうゐ

文保二年八月常聖井仏訓の事の所人々

歌をさゝゐて言問ゐ花ゐけゐゝ言春

前大納言実教

行ひ給へる花を見て後の春のつゐ花ち

後京極摂政家百首

宜陽門院丹後

春ゆへよそのゝ花の散ぬるを思ふ心のかつ〻春ふ

山家春考こいつる事を

うしつゝ月日しる山里の花をうつすと考へ言ぬる

文保百首 法性寺師

花ちる島とのゝ言ぬしの文ゆゝ問る春ふく秋ふ

中納言為爰

入道二品親王家

ゆしの尾上の花に義りて入ゆしの鏡と考へ言ぬる

百首 三月 山春考

等持院贈左大臣

花にみかちて春を入ゆしくゝ日ふ山の考を立る

文保百首 法性寺

前大納言為定

すゝ乃秋の命のくしゆしの風に振つて春すゝ考へる

嘉元百首 三月 法性寺春考

前大納言為世

み山てらるゝ月のうつまくに

伝いの行考を上るこゝ

新拾遺和歌集秀歌第三

夏部

更衣のこゝを　後九条前内大臣

宮人の袖にうつるかゝるへく夏来るらし高岡の山

霞は夏背言のよみ侍けるを　宗尊親王

きのふまでかすみとなりてたつ人に衣の袖は夏来ぬるかな

背夏をよみ侍けるを　俊成卿

ふるさとの山の納りをきの人に考の面影ぞ立

百首の歌の中に　進子内親王

夏ちかくなりぬとしらせぬ花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

二月はかりに寺に家の十首の歌

に　二位家隆

夏ちかくなりぬとしらせぬ花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

當乃月はかりに寺に家の十首の歌

に　信実朝臣

むさし野の草のしたはの花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

よみ人しらず

むさし野の草のしたはの花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

建二位為家

文保百首の歌の中に　中納言為兼

夏ちかくなりぬとしらせぬ花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

夏ちかくなりぬとしらせぬ花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

夏の中に　藤原四大

ワの花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

藤原四年北殿前太政大臣の家の月次の歌の咲わたる花

き花の色にうつりにけりなかの花陰のうへ

を　後京極院

ワの花に秋いかるらむ草の上のかりにうつりにけりなかの花陰のうへ

上西門院いまたきさきにておはしましける時待賢門院
にまゐらせたまひてまゐりけるに御前にさくら
をおほせて前院の女房武蔵のもとへ
つかはしける　兵衛

よろつよをかけてのみこそたのめしはわすれしものを二葉の松のちとせをそ見
ぬへし　宗尊親王安嘉

二葉より千年をちきる松かえもともにかはらぬ色そ
まつその波にうつるもしほくさかきつみてよみ侍る　後宇多院宰相典侍

わかおもふいのちのみこそあつまちの草のはの昔に遠さの秋にも

百首歌奉りし時郭公　入道親王尊道

郭公なくへき比もあやなくにまちくらしやまたいつか待なん

貞和二年百首歌奉りける時　民部卿為明

ならへくる世まてかはらぬ比の雨鳥さへ声のはなはたになけ
読しらす　照慶門院一条

思ひねに思ひのこりしまてきつつ人のまつるかな

久安六年崇徳院に百首歌奉りける時　左京大夫顕輔

人けくしいと思ひわび河名きてくしたるくて思ひたる水

百首の中に郭公

開白前左大臣

うつせる人けくまわりに引くしるかもしるべしあるとも水

夏の三首中に

三條入道左大臣

鳴くやうくやうくやうくれの夏なれかよ郭公かも

寛治百首の三首に郭公

前二位行家

やまとなを有明のつれ引くしるあるまじつる月の郭公

前参議為兼

郭公

明石夜乃月郭公引くしるあるまじつる月の郭公

延喜十四年十二月女一宮屏風の

貫之

月をこそ待つと思ひて郭公を引くしるあるまじつる月の郭公

書家方集の

よみ人しらず

人しれず思ひやりけるかもの夏のをしも鳴かぬ月

文保百首の中に

後西園寺入道前太政大臣

虎ふ面の乃ゆくしるあるまじつる有明の月の郭公

承久元年十首の内の郭公こゝに本を後と

順徳院御製

嶋をおもふ心しらくに河霧の月まちかくる春の夜

後深草院御製

山のはの月よりのちはかすかにもあけぬとしらぬ秋の夜

建武二年内裏百首歌奏上千

首うちよみけるに夏動物いろいろ歌をあれてい

ろ所にしてけり　法印浄弁

うしとみるかたにぞ山のはの人一夜ばかりの月ぞ秋なる

百首うたの中に郭公　前大納言公蔭

うしとみる所にぞ山のはの人一夜ばかりの月ぞ秋なる

安嘉門院四条

嶋乃おもひをうつしてぬる時は

文永中に

後鳥羽院御製

このやどにわかれ[ぬ]ぬる一夜しのぶ

法印覚源

ぬれぬれぬる日吉社の神人なる

前右兵衛督為教

因幡のほのぬれぬる所をさしぬる

歌しらず

前大納言忠季

子規なのぬれぬる一こゑ岩の根をし

後法性寺入道前関白太政大臣の百首の内

村雨の露も涙もまだ乾かぬ袖に時雨て紅葉する山の秋の夜

源仲綱

あら所の雲人も通はぬ山路かな

藤原道信朝臣

さよ更て袖にたまりけり月も鳴れ打ち過ぎやすらふ鹿の

百首歌中に

月の前の秋

前中納言有光

格子の隙よりあけて入る月の影を山の端の雲

建仁元年三月十五日内大臣家歌合

前中納言定家

引くまゝに山の端出でぬ月の影を雲の外

元明天皇入道前太政大臣家百首歌

秋の月

源信明朝臣

庭の面は雲の上の月の影を山の端の雲

建仁元年三月十五日内大臣家歌合

前中納言定家

引くまゝに山の端出でぬ月の影を雲の外

大江頼重

よしさらば人に問はゝ問はゝ郭公月の出でぬる山の端

建久四年十二月十五日内大臣家歌合

前中納言定家

月の出でぬる山の端に郭公

百首歌の中に

花園院御製

見し人もさしてゆくへもしらぬ年月しもその山の[illegible]

百首の歌めしける時よみて郭公

御製

あすかなる[illegible]郭公[illegible]

寛和二年五月四日庚申夜内裏歌合に

郭公

大納言朝光

うち忘れしはしは[illegible]わすれぬあやめの[illegible]

題しらず

祝部成久

あやめ草五月の[illegible]郭公袖にかけ思ひをやるらん

前関白左大臣

引くらす[illegible]の五月の雨はあやめのかほる宿の軒

澤邊早苗といふ事を

従三位成久

をしなへて廣き野沢の夏草にしめりありてさなへとるなり

題しらず

平宣時朝臣

夕(?)も又浦風あれてうゑすてし田に稲葉[illegible]早苗とるらん

二品法親王覚助家五十首歌に早苗

津守国冬

里ことに山田のさなへとるときをいそかてたれやいつくらん

卯(?)し人を

弾正尹邦省親王

五月雨乃ちるを初ふ山田より夕さなへとる見

元乃三年三月后屏風に

藤原雅纲ゝ

大わらべ花のうゝ田の五月雨に神かすみする高ゝろ

後二条院御製

歌しるす

山けやきこのをゝを吹風も涼しゝ言にさなへとるや

赤人

風よりて花橘を神ゝ来てゝ思ひけれる那

寛元百ゝ三首歌けゝ亦重橘

前人納言後宮

毎の神のゝ三月をゝめゝ花橘のゝ山かけ和ゝ白ゝ

百首ゝ歌けゝ亦同人

徳大寺前内大臣

神山ゝ来みりよりゝ橘のゝ実ゝ公ゝ心ゝ可ゝ

按察使實継

思ゝ出ゝ来ゝ橘の花ゝ和方の昔ゝ恋橘のゝ花ゝ

三十ゝ首ゝ歌の中ゝ

法皇御製

ゝ花ゝ橘ゝ恋ゝ人の橘の実ゝ花ゝ世ゝ言ゝ

光明峯寺入道前摂政家百ゝ三首ゝ歌ゝ橘

前中納言宗家

橋の袖の古ちりはてしまつ見るかなしさ

[illegible]

吹風よ山ゝをのこやまつ見ゝ[illegible]

[illegible]

武蔵門院出車

河内くゝの秋と思へ[illegible]

[illegible]百ゝ言葉けゝ河廬橋

[illegible]

[illegible]中納言雅孝

[illegible]のゆこゝろの[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]ほゝ佐為信

[illegible]の袖のゆこゝろ[illegible]草[illegible]

平氏村

[illegible]ゝ[illegible]に[illegible]を思へ[illegible]さのゝおいゝの枯ゝ鳴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建保四年百ゝ言葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]月面のうちのしるしのごとくにつくりなして[illegible]浦流

堀河院の時は百そう三のる又月雨

[illegible]

河内

さうそれ八江乃国こしうちあつまりてみてすなはちけうか

百そう三のすしは国しんを

[illegible]

摂大納言義詮

[illegible]河波やうしみのうの山川[illegible]の又月面の[illegible]

後京信実納言

河又月面と

又月面やうやうにけをみるうきとあつまりいりくちに[illegible]

[illegible]

[illegible]

後照念院関白太政大臣

[illegible]百首うたけうの時又月面

[illegible]

後京基任

橋又月面ごとうまとと

又月面乃面うに[illegible]の橋たりしとみるに面こうてみ出[illegible]

文保三年百そう三うたけうの時

[illegible]

前大納言為定

名こり河とうに[illegible]

[illegible]

河又月面をよめる

摂中納言具行

[illegible]

[illegible]元百[illegible]言のをけ[illegible]月面

一條内大臣

[illegible]いたかりの[illegible]ふとあすのりきこえ出行代式月面の比

百首言のをり[illegible]月面を

右大臣

又月面の[illegible]乃[illegible]式日[illegible]ふのしたれまし[illegible]みゆるを小

弘長元年百[illegible]言のをけ[illegible]

衣笠前内大臣

[illegible]草[illegible]と[illegible]月面[illegible]式[illegible]の行[illegible]

正治二年百首言のをけ[illegible]

前大納言正忠鎮

又月面[illegible]式[illegible]月[illegible]

[illegible]

祝部[illegible]氏

[illegible]月[illegible]の行を[illegible]

寛治元年十[illegible]言の会[illegible]月[illegible]

前大納言為氏

[illegible]月[illegible]の[illegible]

平忠盛朝臣久[illegible]

[illegible]月海[illegible]

[illegible]

[illegible]伯[illegible]仲

あやまちにきてくるつきのかさるれば山郭公きいれもとゝ

百首のうちけるほん　崇徳院御製

さつきやみ雲のうへにこゝろ失に庵やりくるゝもとのすゝき

歌　前中納言基成

こゝろするさいかれもこゝろくこゆるこゝろの末つ月ゆく

文保三年百首のうちけるほん　中納言為夏

こゝろすゝし入れ山の涼けれしゆるゝ路やくるゝ

四月ほうこゝろよるゝ　左兵衛督基氏

ひとゝもいかゝ春ゆきをゝしれしゆるゝ夏ゝ野の京

元弘三年三后屏風ほん　前大納言為世

くるゝよりあるこゝろ秋ゝ夏草ゝ成ゝ年ゝ上けくゝ

歌　藤原盛世

ゝりゝ滝乃ゝゝ系ゝゝ玉ゝゝ玉ゝゝ玉ゝゝ

二条親王元助家の百ゝ首ゝ屏ゝ風ゝ　権中納言公雄

ふ菅ゝ原ゝ道ゝ真ゝ　大井河のゝ月ゝ　道命法師

久しき月ゝにのちつければ星こうみゆるをみるに

二月はつ祝日元勝宮又十さいの為河

前大納言宗教

東河ぬしうしのつとうとなりて月ゝ新しきを

文保二年百さいの為けるに

中宮大夫ゐ宗母

大白河きさいの宮のすまくようさいとゆうつよ大記

元亨三年八月大覚寺殿幸さいく人々

歌をさしてうつりゆくに月につけてめでよ為河

をよみをよりさいう　後宇多院御製

うつろひぬるそのつゆのみをもりやまこの為はなりけるし

撫子乃さけるを人のもとへやりける

伊勢

引しつのこのさかりの春けさ洞ようへやるをうつし

歌しるす

式部内侍

秋のきいかゝ秋ことゝ侍りし侍りて撫子

皇太后宮大夫俊成

野へよりく月春ゝとみ出小蓮のうゝ変にやうの白玉

建保四年四月ゝ三の

後久我大臣

水上に夕立すゝしき川の瀧のしら波

友の歌の中より　後酬院御製

かけろふやゆきの山にあるまゝにすゝしき夕立の雨

各所三十首の中に信太枯

夕立乃名残久しき志川くゝ上の方枯の下陰

伏見院御製

引しらしたる氏の家を吹くゝ夕立をとゝ風冷しき

伏見院三十首の哥に

前大納言為兼

なを面影乃吉野の山の夕立のくもるゆふ風ふきそ

野分涼しいつらしを

入道二品親王光豪

雲ゝ風夕日いろ〳〵をうつのゝ小野のあちゝ風そ涼しき

三首哥合より友秋　後伏見院御製

草海ゝ雲雖の家を月はみく数のくうゝ光おろ

百首哥の中に納涼

くゝ我門のよ〳〵つく物やをうゝ等拾遺賜九大夫

元亨三年三后屏風より同じを

前摂津正雲雅

夜ふかくとなりの池の浦さびしそなる山のあらし

夜月をよみをれば

後二条院内侍

月乃ゆくえの山ゝ雲ゝ

はるゝ百ゝ三ゝまけるゝ月ゝ

前大納言為世

絵にかゝる海ゝ

雲ゝ月ゝ

玉葉集年納本

夜ゝ月ゝ

前大納言為定

白河院七百ゝ三ゝ

前大納言為家

内ゝ

前大納言實躬

あゝ

藤原為忠卿

いゝ

寛平御時きさいの宮の歌合の

よゝ人ゝ

琴の

後恵法師

ゆくへしらぬあはれ多月日ながれてとしのくれぬるかな

和泉式部

ながめつるおもかげ残れる蟬の殼ものいはぬ夏の形見

百首歌中 付夏

夏衣行末遠き山路かな思ひたちぬる人の涙に

進子内親王

大空をわたるこの月をうちながめてうちかたらひし昔の面影

前内大臣實

浪の風ふきもとゝめぬ野川に秋はまづ立ぬ岩の上

文保百首中

後西園寺入道前太政大臣

ながれもやらぬ浦の波川に秋川ゆくみづのけしき

俊成卿

新拾遺和歌集巻第四

蝉歌上

貞和二年七月七日三条内大臣家歌合

早涼

法皇御製

蝉きゝわしるはいとあはれなりけりはつかすし蝉の声

早蝉のこゑ

按大納言義詮

蝉のこゑはつかしきかぜに吹ゝくまつ虫の声

二月はつ秋とも見えぬ家の内

従二位家隆

蝉の声ゆふ日はかりの日ぬるゝ昆の蝉のなくなる

夏百首

贈従二位為忠

十首のうち夕神にあたる所

蝉のこゑ鳴尾ゝ山所すくよ見る

常光寺蝉よなるおの松風わかれ

西行法師

彩しるす

大納言経信

ゆくすゑ乃三川の白波秋ふかし昔なるあの蝉代の風

後鳥羽院官内卿

形ちうつ松の木丁字に結ひ付て神ほとゝぎす歌の初句

初歌のこゝを　　浮世戸邦有親卿

あすの風吉吹のつゝみを神すとけつゝ歌をゝわん

前中納言定房

ゝをつゝみ花をとゝめて歌つゝをあすのゝ風をかつゝゝこの山

後京極摂政前太政大臣

梢ゝ風よりも歌の龍田山しらしらと紅葉ゝ染てもちしを見

二条侍従親宣卿

いとゝやゝ高うゝゝゝゝゝゝ山のこゝ大野の歌に初句也

百ゝゝ三ゝ十ゝ付　　徽安門院一条

歌いまゝゝあゝゝちの夫の夕風ゝ河ゝの初けて高きゝゝ

堀河院御歌付百ゝゝ三ゝ十ゝ付ける萩　　基俊

引ゝつゝあゝゝゝゝゝ宿に歌ゝゝゝ萩のゝ紅葉ゝ

ゝゝゝゝ　　式乾門院御画

いゝゝ秋い萩の紅ゝゝ風の高の歌ゝ河ゝゝゝゝ

中務卿具平親王

よゝゝゝ萩乃紅風のゝゝゝとわいゝの高の刈ゝ也ゝ

百ゝゝ三ゝ十ゝ付ける萩　　御製

つるそめし萩のしたのをみなへしなみくの白露の焼風

第拾弐段 九大夫

秋はのをむこそ風をそ萩のしたれはなるまゝに焼の白露

焼乃言の中に　　遠新門院五条宰相

しらくそそ萩のわかそをしらとおもへとも今は涙の露こそなれ

焼きこゆ思ひとゝめ出家てのくつるゝに露をそなれ

彩しあそ　　同光院入道前関白左大臣

思ひ出くゝ人こそ山里の籬の萩は焼はてゝ

菱京考標納言

七夕言の

久しくのわかれ河原に七夕伝ものをそなれ　　鄭恒

織女妻

赤人

銀河のそこ引の河の棚機妻　　貞和二年百首言の中に

後嵯峨前関白左大臣

きりつるそめし萩のくるゝ紅葉はなるゝ

二星

月ゝ七月七夕三言葉をそなれ七夕

久しいふしを

幾秋と後わたりそ七夕の紅葉のいわゝ一夜なれ

前関白左大臣　正長

百そう三のなけるゆふ七夕を

入道二品親王はる

九重の雲乃こもりに新月けて行方の空よ月そうふく

新しき

にこ二位り家

いくこをもりめくつとてもたなはたしよめ下帯

貞和二年七月七日三百三のよ七夕契久こいへる

しを

前大納言俊冬

織女の四九よあもをとを年ゆ九ゆうこ天の川波

七夕地儀こいへしをよるとあらける

俊卿製

天川うしれらうとい立けれこるの九てとうく始とよ多

百そう三のなし附七夕

前大納言忠季

かうてしうしみやも九わ七夕の逢よ四ゆ代の手の衣を

新しき

源兼氏卿

いりのまたあ空の橋をうすとうとたくれ忠ゆうの星合の空

中務卿宗尊親王

天河男ふの中ま那ハあ九こうちよりのかうこの橋

後二条院御製

幾秋つもうとしき忠ゆ銀河をのつよりのかうふ代橋

元弘二年三后屏風日吉

前参議行宣

七夕乃いとをくり衣うるはしく織の一よしかに契つとを

前大納言為家

織女

七夕の雲の衣のきぬ〳〵にうつるこゝろの河なみ

内大臣

こゝろのあやわけの光の沖つ風をとこ船をとこ船

千代百番の舟のうた〳〵

白河院女房

風吹いのるこゝろ〳〵荒磯と夕はるゝて舟こゝ秋の雲

前中納言長方

七夕

夕こゝ秋はおもゝ〳〵ふる物風はみ〳〵秋とあはれ舟の上てもむ

陽明門親王

風ゆけはゆ〳〵入江よりる波をおもはの雲て舟こゝ

雲居も瞻西上人坊ゝ三の舟しはけるゆふ

補仁祝日家中歌

野へしるみこゝ秋てみゆる刈萱氏舟吹はゝ物の山風

伏見院三千こゝ三ゆる

後二位為子

こゝ秋あはれ納言の舟こゝ用初てこ後の末はもそ多こゝき

百首歌よ　月花門院

納涼　みれとあかぬ萩もとの色を袖に露はらはん

萩乃露　法皇御製

忘れすと萩の戸口のあきそ行るあしむのいろ〳〵の萩

萩乃露　をくつゆ人の袖にこいしかる

人のをくみてけさ問ふけり　中務卿具平親王

草なる色の錦を焼くれいみる人いたらぬ庭

歌　　讃人不知

うつろふくいろ〳〵の萩の袖を男人ことみ問ふ人下

建武二年内裏よみ百首よ　萩植物

文城野の秋はをきの問ふ袖ふるまの問ふ萩の色すそ　法皇隆国

文保百首よ　萩

萩の花おつるをゆふ文城野つまの下風ふちまくしを　法皇宗尊

歌　　人丸

萩風いとすゝしくふきぬ駒ゆふ心萩の色に

春ふれい新つく秋よみ　中納言家持

門より旅宿さけるこのあわら納凡ちかと也ちり思へ

百ゝゝ三のちり〳〵附歌

前大納言公雅

ゝゝ乃上〳〵心野への歌の也衣よすゝんちゝよく

月前歌こいへゝ月まをよゝとをうけ

御製

旅ちゝこの家ちゝ花のすゝと衣ゝ川ゝ月と新ゝゝゝ

建仁二年ゝ月後ゝく野草花を

前大納言為氏

ゝゝ衣すその草の白露のはすへいゝゝゝもの上ゝ

皇太后宮大夫後鳥

秋の寺の中に

秋の〳〵ゝ〳〵ゝのゝゝ我川ゝ岩の袖すゝ也やゝゝ

貫之

女郎花ゝゝゝを袖ゝゝ川ゝゝゝゝゝ我をこゝ

堀河院内百ゝ三のゝ

基俊

ゝゝ野のゝゝゝゝゝ和歌風ゝゝゝ我ゝゝゝ也ゝ

西百番寺会の寺

二条院讃岐

也郎也ゝゝ凡也家ゝ也ゝゝゝゝゝ凡ゝ行ゝゝゝ

歌

清原元輔

なへて咲むもの思ひにも世の中はいとうかりけるかな

はるの實性

つまとしてうゑし籬のもとみちうとくすさまじうもなりにけるかな

曦西上人家合

堀川院中宮上総

あるかりとなほうゑ初めしその草の秋よりほかに思ひ絶えぬる

古郷の籬乃草

伏見院御製

太宰大貳高遠

胡蝶あまくもむのひさしくもとまるくしうゑへの板葺

邦世親王

風さわぐ草の原ゝ乃むすぶ露ゆかりの袖にそみる

伏見院に三十首歌奉りける草花家ごとに

をよみはける

九条九大夫女

夕ゝ乃野へ吹すさぶ嵐風にをくれぬる花の上かな

同人

藤乃うへの家ごとにてまもるゝ乃の間も久よいけるん

白河院御製

白河院御幸おりまける野草家盤こ

いはまを

陸奥大夫敦基

うつろふかぜのこの大野のまき原いくよの春をかさねけん

前中納言定家

鶉なく夕のこゑをあはれとて野に成ぬる深草の里

権中納言宗行

深草やわかふるさとといく焼の野ごろもでなく鶉なりけり

上西門院兵衛

立こめる人かすみのむすぼれてよもぎ生ぬる梅の花かな

梅園女御

行くへなきちりぬる春の名残をば焼の夕べの風ぞ吹

関白前太政大臣

さらぬだに秋はものうき夕べを所しく焼風ぞ吹

惟宗光吉朝臣

霞みもあへぬ春のみぞ秋なりける焼原の煙ぞ

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

文保百首三月廿九日

前二位隆教

あらしふく夕べ寒しなる焼風は夕田野の雨ぞ降りける

百首の人丸のこゑを聞ばこれぞ歌道はかなき

と行くしてよりとしをかさねけり

よをこめて草堂の春をうらやまるるかな　花山院内侍

寛元百首三月十日

前大納言為世

あるかなきかとて結ぶ野べの春風の雨ふるこゑに鶯の聞ハ

藤原為氏朝臣

花すゝる神よるゝゝの春うゝくるゝよりしに雨ふる

仙洞百首三月十日

前参議雅孝

今よりハなかいるゝて月の夜風よりゝ門ゝうゝ山ゝ庭の淺茅生

寛久二年内裏ゝゝ紙月ゝ百ゝ歌を詠ゝ

侍二位家隆

けゝゝ

月ゝゝ人ゝハ行ゝハ河ゝの今や雨ゝゝの夕ゝ言のゝゝ

前内大臣

ゝゝゝ

おゝゝの雲映ゝゝ月ゝ光のいゝゝ岸の夜ゝゝゝゝ月

進ゝ内親王

百ゝ三十首中十月

夜風ハ横ゝゝゝゝゝ夕ゝゝ雨ゝ月ゝ月

文保百ゝ三十首十月

前大納言為世

夜風のゝゝゝゝゝ雨ゝ横ゝ月ゝ

ゝ尾上をおゝ月新

嘉元百首歌たてまつりける時月

中納言為藤

もろこしも尾上の鐘や更ぬらんいさよふ空もよひける月影

康安二年九月十三夜うへのをのこども歌をさく
つかうまつりし時月前雲といふことをよみしと

民部卿為明

はるるよりうき雲もなくすむ月の空に晴てやさえまさるらん
影しらん

如法三宝院入道前内大臣

出るより月の影うつる足引の山の山水のほともめくりれたりそ

暦応三年八月十五夜仙洞にて三首歌講せ
られけるに月前山といふことを

従三位経子

空よすむ光をうつしこえて松原ふかぬ秋のよの月

貞治元年十一月三首歌に海邊月

冷泉前太政大臣

よしをうやなみのうへのみえわたる末をおなし月影
影しらん

刑部卿頼輔

ささの葉ちいろくきよりもの波よりいづる月影

後醍醐院御製

風さゆる門田の末に雲もなくいなばもみえずいづる月かげ

いかるがの里をこえてしらぬ海の月くまなくわたせるかな　普光園入道前関白太政大臣

寛治百首　山月

ちりぬべきこずえのつゆをいかるがのわたりにうつしてみて　山階入道前太政大臣

百首　三十首　月

久しきをもてるものゆゑにこの世のみゆる月かな　右兵衛督為遠

歌しらず

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　大江貞重

前大納言後光

思ひやるこの里の外は海原にてしらぬ波にぞ月ぞ入りける　正三位知家

月の影にうくよりみぬけり　二条院讃岐

月をみるこんのようにわくるれいかるがの海の美濃はきりにてをとぼし　三条入道太政大臣

名所月　三十首　月

名所門院小宰相　古今門院小宰相

志賀のあま共思ひ出て秋の八月つゝみけり

百五十四月　大納言隆実母

みわ世ゆくへふるゝ秋のよの月ゝ皆のゝみなりし

嘉元百五十四月　中納言為雄

三乃うへ人は別しむかしの面影と思ひすてゝ月よこりゝや

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて池上月を

いつくしを海とぞ見けるよの月しるを今よりしてゝすゝ面影

山陰入道前太政大臣

後嵯峨院御製

建長の比しうみゝ池水のにはつとみゝ主無なのよの月

海月をよりをとをけり

土御門院御製

大井河ちかつゝ月影をみゝておしむ

きのゝ玉

新拾遺和歌集卷第五

雜部下

述懷

後嵯峨院御製

秋ぎりの晴るゝ間ぞ思へば世をうき雲の秋の月

後惠法師

長月のなかばすぎぬるよゝ立ちて今夜の月をいかにかもせん

伏見院御製

吹ちらすたなびきしの間にわれて夕ぐれうすき月の影かな

三十首歌の中に

前道納言

ぬれぎぬ

嵐風の袖やぬるゝ問へば思ひ出でぬ心底の月哉

建仁二年石清水奇月照海邊

前中納言宗家

雜の部

ぬれぎぬ

ぬれぎぬを堰くしるしの見えぬ涙の川の中の月哉

太宰大貳重家

ぬれぎぬ

ぬれぎぬに流のうへの月もあらじ中の月哉

前參議家親

入道二品親王家歌合に月を

みるぬれぎぬ

ぬれぎぬ

ぬれぎぬ

ぬれぎぬ

みな所に思ひもちる月新やんをてすうみめし　源頼康

家十首の三月　前大納言為家

天京にうきうふうこのうみとゆる海のよの月

詠しる　中務卿宗尊親王

更ゆをい月新こしかうこ氏よりうう橋とおくさゆし

文保三年百首の三月ちわける時　前中納言實任

いすくへのますしの鏡世くうけて秋海のしてしす月新

正和五年九月十三夜後嵯峨院みこのゐど

けるる対五ゐ奇詩ちる氏けるる月前れ凡　中納言為家

芝東の山の端をうくもしる月は松ゐ凡のをしそ空

海の三氏中　鎌倉右大臣

天京ゐうこけみ氏八月清海海のよりくく更ふけるる　為京為業

雅波ゐこゐ田をしをしをしゐのをしこすゆる海ちる月

春日歩る納ゐる重氏沈ゐるるる氏いとゆる海のゐ月　民二位家隆

入道二京親王芝巡言家五十首の

前参議宗宗

名ゆゑ海のまのゆゑよりて及ぶもめる月ゆゑ

水上海月こゝまもと　二条大皇太后宮摂津

池水よりいれる新もしたて海のよすがめる月か

建治元年九月十三夜島津久水の月こ

いつゝまをいつゝまいつとけり

前大納言為氏

高瀬寺宮のもとゝの海ゆゑよりて河風さむる海の月新

ゆゑしる　源ゆゑ長納言

白妙の布の高根の月ゆゑてゆをけるうゝ海ゆゑ

建仁二年仙洞十ゆゑ三の会に河月似秋こゝ

まを　後京極摂政前太政大臣

こゝ秋と又秋代きゆゑ民部四川月のこゝ月ゆゑ水ゆゑ

ゆゑしる　法印浄弁

板ゆゑ門田のおと代海風に月新さむる三輪の山もと

安嘉門院宮内

海ゆゑ月をゆゑ月をゆゑ秋田代ゆゑ幾ゆゑ

入道二品親王光厳院の百十ゆゑの会に

法眼行円

いつゝゆゑゆゑ月をのよゝみゝ家ゆゑ

題しらす　　道済

世わすれてあともたえにし山奥の苔にみる有明の月

草枕かくさひしかるへき住宿の有明の月に旅をまかせは　　清原深養父

前大納言頼経家すく月十首読侍るに　　真昭法師

月影のさひしくもあるか高砂の尾上の松の有明のそら

法性寺入道前関白太政大臣月哥あまたよみけるによめる　　清輔朝臣

よをすてゝ我をさそひし月影のそのいりまてもそひて入なむ

海辺月を　　よみ人しらす

こゝろへつるうらをもしほてにすゝ漕出て月をともなふ旅の舟人

難波に月みにまかりてそこにてよみ侍けるに海上暁月といふことを　　前大納言為世

浪のうへはまちいてし月はまたなきのなみにこゝろの山のはにみえける　　中納言為藤

あさはゝる入しかたくもしらすして月よりよする奥津白浪

題しらす　　法皇御製

秋の夜の長きをきしといねかてによひてつらしあかぬ月の影

春日社の今宵明月こいふことをよみ侍りし

後鳥羽院御製

長月乃山の末つ方吹つるまくさ月

歌しる人

麻草法師

踏へ分る乱思ひ侍りしまゝ

建長三年四月十五日の夜の月

建保四年四月十五日の名月

大納言有家

日くらしの時雨ふるまくさ

建保四年四月十五日

正三位知家

日暮の今宵山の月をいく秋思ふ人ゝ夕日の光の白雲

後鳥羽院御製

嶺の松の中より

月の光の

正治百首の時

後京極摂政前太政大臣

みつ秋の思ふ心をの月ふ

麻草

御製

建長二年鳥羽殿くらまの御所

法師

後嵯峨院御製

秋の野乃尾花のもとに鳴鹿も今いかにしておもひ妻をこふらし

嘉元内裏三十首哥に

法印定為

むすひをく野原の露の花尾花穂にもて鹿やなくらん

鹿哥中に

左兵衛督直義

月影の入野のすゝきうらかれてひとよ嘆なる鹿のなくなる

後醍醐院いまたみこの宮と申ける時五首哥

講せられけるに月前聞鹿

前大納言経継

高砂の尾上の月になく鹿のこゑすみのほる夜はふけぬらし

百首哥よみし時鹿　権大納言義詮

妻恋のなみたやおちてさをしかの紅葉の露をそめてなくらん

同し心を

西行法師

かねてよりあはれにきゝし鹿の音の月の夜ふけて聞そまされる

元亨三年九月十三夜後宇多院にて三首哥

講せられけるに月前鹿

中納言為定

小倉山麓にちかきさをしかの妻とふ峰にすめる月影

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて晩鹿と

いふことをつかうまつりける

川社のこのしめ木にとりやさしてのみ書ふ山のふもとの元

仏ち元年百そう三のちりけり射庶

常盤井入道前左兵衛大夫

そうの鳴ふ山のとうの杉京なるよりあくて書をもつて

兵衛督

左近大将師良

庶のひとり元丹波ゆりなり勢ひ[illegible]川ふ[illegible]尾上ふ[illegible]

承保二年九月廿五日の三ふ[illegible]納言

山里は春ゆきくれぬ人まちし納言庶の声ふ[illegible]

源家清

さしてふ社芝ふ[illegible]庶の杉

西園寺大

山里乃庶の鳴ふ[illegible]

小野小町

妻ふ[illegible]ふ[illegible]庶の声に[illegible]

入道二品親王

ふ[illegible]の杉をなしとなくさ[illegible]

増基法師

高砂の松の木ふ[illegible]庶の杉

四条大宮大后宮の寄合の花を

康資王母

夕日出て鳴くなる鹿の鳴れるは花のおもてに妻や恋ふらん

野鹿といへる題を　藤原雅家朝臣

名をのこす妻や恋ふらん女郎花むれ立る野べの秋の夕

従二位家隆

さをしかの鳴き乃草の野べの露ゆるぶるとしの秋

前参議行盛家の会に

鹿の子乃吹くるに風ゆるぶるとしてやつまの色ぞ

清浦朝臣

二月十七日親王元助家の十首の内に夜鹿

従三位為氏

弘安元年百首の内に鹿の山ちかく住る人は鹿ぞなくなる

前大納言為氏

夕日さす四面のいるいうちかすみをくれぬる

花園院御製

百首の内の秋中に

ゆふ日さす四面のいるく赤ふをみなひとしてすゑの秋風

中園入道前太政大臣

百首の内の秋四

とり鳥のとりのなを吹こしてとり鳥の山風

文保三年百首歌奉りける時

按中納言公雄

月やどる山ずみ寺の軒ばから秋て四のさわらぬ風の吹

久安百首歌奉りし時

上西門院兵衛

きりぎりすのなりをうしなる遠の松風やうらむらむ

永仁元年八月十五夜東院宮歌合

大蔵卿隆博

蟋蟀

蟋蟀をへてなりまさるきりぎりすいとうらの消えぬこゑ

順徳院御製

後栄はてぬ草葉の巷なれかれる野の初霜

前参議為實

虫の声あらぬ家ゐのうらに枯てよりこむる有明の月

前大納言為世

きけいとやうに枯ぬるとあるに虫の声四てとまりたる

文保百首歌たてまつりける時

蟋蟀のなりてあるに枯てよりこむる有明の月

後光明照院前関白左大臣

虫の声のうらに枯てよりこむる有明の月

中納言為夏

よをこめてかれゆくなの草の色によりつとしてわ虫の声

小

月前出こいの事をよめる

よみ人しらず

七月の有明のつけまきこゆるまつむしの声

家文十三ノ三　　弾正尹邦省親王

つるべ打ちの井戸のくるわ何そこやゆへいとも音まさるらん

寛和元年八月十日殿上に出ることなくて三

今をうきなかるけるかな

枝くれいとゝあををはつゝ鳴ゝ虫

花山院御製

鈴しらべ

信明納ル

紙人よいたゝきをゆ雲ゝ人のたきゆる初尾の声

延喜御製

煩悩と吹ちらすあらしの今もいくるゝ尾大臣のそし城院

中納言家持

霧ふかて尾いきまきあとに引ものとも野へを深し

後九条前内大臣

尾ちるてさいるゝ幼ヤ山城のいくるゝ小野ゝ文ゝ

藤原雅文納ル

百ゝ三ツ中ゝ何尾

今よりの後の秋をよいかゝ音ゝ初尾ゝ鳴て山ゝ

名所百ゝ三ツ中ゝ

けゝ舟

水くきの岡のやどりを吹風に
散しをすすき　　伏見院御製

屋人まいて井かへの鳴くまに
あるじをまねくかりの声かな　　相模

後鳥羽院御百首の内
鳴やこの風くまのの入あれば
散しをすすき　　宗蓮法師

紀友則

初雁の鳴らつるとゆくる雲間より
いくしほ見わたる遠の秋の月　　坂上是則

庭の面に散しまがへる白菊の
花とも見えず雪とこそ見れ　　平政村朝臣

天河とゆくる風の音にかよふ
入東国屋といへるまをよそ　　平義政

かりがねのかくれゆくまに
あれはてて屋なる風ぞ吹ぬ　　西行法師

伏見院三十三回忌に

従三位親子

もゝとせまつる初けのもゝの事のうちにつくしみてれば後の居室

百首うたの中に祝の歌

仰製

へゝ川こゝろてゝ思ふ〳〵岡ゆや事ふゝへゆく初ものの色

性助法親王家百十三首

後西園寺入道前太政大臣

夕とゝ秋いまゝゝ秋てふ〳〵のゆくゝ春ふ〳〵ゆ吹

記〳〵子

みけ祝

物ゝ山ゝ〳〵秋てゝ〳〵かゝの羽ゝけゝきゝゆゝ雲の白雲

前参議實名

百首うたの中に

従三位為信

をゝ山田ゝ〳〵祝ゝ〳〵ゝ鳴ゝ〳〵ゝ物更ゝ

物田をゝ見ゝ

従三位為信

居ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ秋初雲のおくゝのゝ〳〵ゝ分ゝ

正和元年九月十三夜歌合中

けゝ付ゝ〳〵ゝ月前持衣

中納言為冬

物ゝ〳〵ゝ月ゝ〳〵ゝ出ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

元亨三年九月十三夜三首のうちけるに

はるかを　後醍醐院御製

月わしわく月七月のうちよりの月のかたしは衣うりこと

貞和二年百首三のうちけるに　中園入道前太政大臣

七月の月ちよりこしのいれてくるかたのかたのうつ衣

元亨三年九月十三夜内裏三首三月前持

衣こりしを　大納言為冬

わくらはて月みるかのうつもりこしをすれすりに衣うふ

入道二品親王覚誉家百十首の1

よもすがら秋のかををくきめて月ぞうれはす麻の衣　信二位行忠

指月傳都經賢

鳥のひはきこゆるゆくよ星人の秋ぬるとをきくうれ帰

寛治二年百首三のうちけるに持衣さいます

を　正三位經朝

ゆう巻のあさけ衣うらはくれはよをきき初

文保百首三のうちけるに　参議利尚卿前関白内大臣

津國のあしのやのよりこしをこの月はなけを衣うれ

貞和二年百首歌合

後三条前内大臣

さよ衣うつの花さくまちうらの岩くゝ山里の春をみしろの月

前参議為秀

おぼしらぬ

たこしぢの雪みゆるこの夕月よりけれいみぢはこゝの下草

寄海百首歌合

前大納言為家

もつ人の名ゝ九重に白雪のふるまよみのけるこゝのしゝみて

百首歌合

前右大臣

七月の豊のありあけのかたらひて今はむかしの秋のさかり

前右大臣

黒戸のまへにきくをうゑおきてけるを

堀河中宮

用明天皇いまだ位にましまさぬ時の花夫漢雲ゐの月をゆめにて

延喜十八年女四のみこの屏風

貫之

いづれをか花とはいはむ七月の有明の月にゆめはかなく

宗岳院の中将重基送多数こいまをけうう

まつみけう

大炊御門右大臣

いくのつとめしとの数にあらいとかりそめ白雪のむ

入道二品親王性助家に雪をうゑさせけるに

[illegible]

[illegible]世間く白へ雪の竜の竜[illegible]の[illegible]

七月廿二日の会ト

白いう間ふれさうなけれ物[illegible]のわ[illegible]の白雪のう

寛平七年の雪会ト芸の雪をよ[illegible]

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

詠しらず

[illegible]

人丸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人丸

くれなゐのてしらの白い浪てし龍田の上の夕日くれぬ

清浦納言

をとゝしの木のもとみちの紅葉のあとゝ山ちすやなり

承保三年大井河の紅葉の日よめる

大納言公實

水のあつをとゝ紅葉をつくけてなみのゆくにあつる紅葉

小一条院大井河にあり所けり紅葉浮水

こいまを

大納言斉信

嵯峨の〻成り行く大井河けたなみの色さへ紅葉しにけり

紅葉を

大中臣頼基納言

水底よりそのもみちをみるとてもみちの紅葉嵯峨の〻みなそこ

嵯峨の中を

百嵯門院

山ぢのの人乃まちにうめの色こそみちにのこる松やなる

信生法師

高根よりよみち吹ちらす山風やもしの松の間なる

今おかの院

かくしおこゝろの枯の村内のよりみちの嵯峨みゆ

僧正良暁

かれくまりうりの嵯峨の文仁行内の言葉をひの

ち

紅葉遣煩こいかまを

中納言宗教

あかつきの紅葉の色をみるほどに煩ふ先立てけり

煩乃くれにしかとよみはけり

前大納言公任

都いでゝ行よきつゝ山里のよみらしそれ煩言はもと

陽成院御詠言人今日

年ふるにしきもゝ和煩ごとに知るゝ身心のつゝもるに

よゝ人〳〵歌

殘煩のこゝを

刑部卿範兼

あすよりは行くそれゆく煩有あをあ心をとゝ行かつつ

百そゝ言ちゝ付九月書

白大夫

言とにしゝ煩のつゝみこゝあすよりゝ池にゝゝそれ春をあ

福王に仕けゝ法人〳〵七月の晦日の日ゝさに月

ゝて海ゝ九月表ゝをよみはけゝ

平經正納

入りこゝすゝをとなゝゝ先てゝゝの京流ゝ煩を遣ゝゝ人

ゝ文百番言合に

人納言通具

ゝゝゆくゝゝのゝにゝ人煩ゝゝて月ゝゝ月ゝ成にけゝ

いまたみこの家に中はけるに十さいのめしけるにが
てよ言葉をいまをとをとをとをける

後醍醐院御製

行幸の野の草はいまは枯くれにのこれる有明の月

従二位家隆

あすの月のかげのたみし月をかたるあるこ
ろの秋の夕

秋拾遺和歌集巻第六

冬部

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為世

高砂の野べの乃き毛風さえて又ふるこりの冬の来る

嘉元百首歌たてまつる時

一条内大臣

ふるこの秋の名残の高砂に引あへぬ程の冬の山

百首歌のうちに冬の山がくれに井の水を

御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法雲院殿三位為理

名ゝの三の丸中よ　近衛関白前左大臣

ゆゝしを三宝の山と名を来わし明るを月も雨も降かる

文保百首三の中けり舟

三条入道前太政大臣

山風の吹よ伊勢を宮ゝの末の紅葉人も秋世月ゝ

歌ゝ　　桂大納言房任

いたゝくよ吹ゝ風のゝゝ末を見て名の紅葉

寛治二年百首三の中けり舟落葉

山階入道前左大臣

ゝ来くいさゆゝ和歌ゝの山風に光を木の白ゝ春日

伏見院三年ゝ三の中よ　　永福門院

いかりと名を下吉風初ゝ紅葉の木葉を川に乱て

歌ゝ　　前大納言良冬

吹をゝゝ和ゝ山の名ゝ重には白を人ゝ白ゝ木葉下

桂大納言ゝ明

ひゝ川白ゝ波のゝて正四方ゝ木ゝ国ゝ峯の風と

伏見院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みしかゆくうめ梢のゆきのあとの落葉こいしのあとを
二条の右大臣家屏風平
陽明門院と家宰相
貫之
山ちかく梢をさくらかりそめの滝のしらいとかけわたす
殷富門院大輔
水ちかく風もとまるしら川の滝のしらいとかけわたす
承保二年大井河ゆきの行幸の日よめる
中納言祐家
大井川みなみの行幸に紅葉をしるべにしるべにこの山をこそ
寛治八年十月白河院大井河に行幸ありけるに紅葉
て落葉流水こいしまをとよもしをれるにけり
うつり行けり
大井河水のなかれもみぢ葉流れてもとめしらずなりぬ
宇治に流るるかけるかけるかな
摂中納言後忠
河上はしらくもの立隠れてみちはなかれ落葉流れる
貫之
落川に紅葉をみれば一こえの波のしぶきにかかる
飛恒
嘉勝宮天皇院の陪遊の詩

如雲法師

うちしの花に落てもみちせぬ綱代にたるのすゑかな

裕子内親王宇治よりおり下りけるに塩竈の浦にて

きりの実てもみちせぬ宇つのやまけふ

梅後徳納言

秋三月朔日のしもうちしくに式今やもみちの錦をるらし

裕子内親王家紀伊

もみぢ朔日の山風にもみちもてるの錦なりにすれ

文保百首三月十日

一

前中納言雅孝

藤やくるしもとしの冬をさてさてとしたてはしめの夕霧

延喜十三年の亭子合に

是則

きくの花名の野辺にちりしきてやがいとしたる

躬恒

亭子の院こきりとうぶしと今宵見て夏のをぬの夕をみるかな

延保六年内裏の合に

信實納言

すゑのはとりにいろいろの夕霧いろく山のしく草

後宇多院に十三年十月の夕寒く草

風さゆる淀の夕日の部屋にやて山すゝき哉

前大納言實教

寒草常哉こいふしを

西行法師

なつかしう行のあはれ哉はたて海風さゆる納屋をゝ

百首歌の中に寒草

等拾遺賜九大夫

哉白うゝ海ゝゝの萩の枯葉ゝ焼ゝ海風のをと

俊成卿

限あれ焼とゝ〻ゝ海風ゝ哉ゝ〻ゝ萩

土御門院御製

みゝゝゝ山

みゝゝゝと海ゝ面すゝゝゝ哉ゝ枯てみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

前元百首歌

みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

賜院之御歌

雪枯をゝ哉

摂大納言忠基

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

前大納言為家

みゝ海野ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

前中納言雅孝

みゝゝ山

みゝゝ江ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

機内に留守の島々くまなくよいとの月を八月ら浦みの

中納言家持

赤元百首三の中けり千島

今日対馬右人

多くの秋いさりの舟さゆらとの月とみるみくや

前皇太后製

鳴海ら三ら浦の島の名こそ有明の月

後二条院御製

焼の島こいつらまをとらとけら

浦こぬくらら留の島しら波の有明の月

後二条院御製

文保二年八月廿九日内大臣井仏訴日内幸の時人々

詠をさくつらく三の中けり留けるの島

正二位隆教

我ら門院ら月ら文の島しうら鳴波ら留ら

中務卿宗尊親王

月ら

更ゆをいこ出つらきてら波の三ら陵の島ら

湖上水鳥

中納言為家

ら島いをつのもけ出あよ

源義高朝臣

鳥の

鳥の

ゆらしたいちとさうゆ

しの池の水に

和鴨乃もろ〳〵に成さに流れてうハもの哉ア行こゝろ

兼好法師

紫式部集十文字ゝ三つよ

八条前右大臣

よとすゝ〳〵鴨のうハもをもろ〳〵ハいろ〳〵哉の玉にゝ和歌

家文十ゝ三つよみ給けゝよ池水鳥

入道二条親王道助

位ゝ〳〵池の和〳〵を王鴨の水よのこゝ面和しゝるし

民部卿為明

中〳〵よ哉よ和をアさゝ〳〵こゝ和ゝよ池のをゝゝ

中宮法親王家五十ゝ三つよ

前大納言隆房

哉ゝ〳〵うハ毛いさ哉ゝ和〳〵鴨のおとの底に行ゝ和ゝ今

百ゝ三つ十一月文月

さゆゝよハ衣ゝ〳〵く底の哉池まゝ水に月ゝ〳〵ゝ

同人

同人

信実法師

ゝ〳〵ゝゝゝゝの流をゝ〳〵哉の底に月をみゝ和

元亨三年三后屏風日五節をよゝとゝ和ゝ

後醍醐院御製

池ゝ水天津をゝ和ゝ月ハ本よゝ野の文ゝ〳〵ゝ和ゝと

寛治二年百首歌たてまつりける時豊明節会

民二位行家

みの山たちくもゐ積いづるあつまのうたにわひもてゆく

冬の歌中に　　前大納言為家

ふるさむしかる豊のあかりを見のこしの月をたのしの後

中納言為家卿五月の比白川に罷下て人々

十首歌すゝめ侍りける時河上の月

前大納言實教

ちぢの風いこかつとてつてみたちの川音ふる月を更り

郭公　　遠江門院

三位の局のこのくに無情風のをるの海にこほる月を

前大僧正桓尊

今宵の月を　　前大僧正實超

ゆくすゑや入海さむしこの夜のおもの波よこかる月新

湖邊の月こいふまをよみ侍ける

僧正慈鎮

湖の海ゆ引くの山風さゆる夜のもちかる有明月

百首歌たてまつりける有明月

さゆるよの月をかこちて袖のつゆはらはしけれいこゆる月の影ふる

　　右中納言時元

　　あるの言の中に

　　拾遺集の歌

　　拾遺集の草案の月の比妙法寺にて

さゆるこの雪けかぜの村もをこかりてけるこゝ有明の月

前大納言為世

中納言為家卿家首尊寺月水

初をけかぜこす波のうかりにこかりて風さへの志るこ

百首うたの中 附雪

左兵衛督為重

さゆるよりこかりそしもこゝ野川見きりよりこそ水の白波

文保百首うたの中 附氷

前大納言為定

志るしるをしも冬こそ河のそまに氷の白波

冬の歌の中より

法印定覚

谷河や山ゆく水の志るこ山きしるの花ゝ山ゆ高き紅

後大納言宣明

春ゝ見ゝ和ゝ歌ゝ山ゆ花ゝ和ゝ歌ゝ波ゝ立ゝ志ゝ山ゆ幸崎

文保百首うたの中 附花

後二位宣子

風さゝゝ山ゝ高ゝ見ゝ花ゝ志ゝ山ゝ陸ゝ花ゝ

西行法師

ゝ山ゝ高ゝ百ゝ首ゝ山ゝ花ゝ

前中納言定家

朝夕の春ゝ山ゝ花ゝ山ゝ里ゝ山ゝ花ゝ

建保六年内裏三の会百首歌

宇治の野に宿りて侍りしに

春儀雅行

大炊御門右大臣

雪はらいちしるのあとの思ひ出

侍従源兼

はるの百首歌の中に

後宮多忠仲朝臣

風さえて雪けよりの庭にちるあられ

文保百首歌たてまつりける時

前大納言為定

庭の面の枯れのこれる草の色に白雪

雪の積りそよめる

後二条為忠

いとゝ又雪よりあれしなるけさ人のうゑ庭の面の草

百首歌の中に河辺月

前大僧正賢俊

河くらも汀のみぬ氷のこりのにつく庭の雪

はるの水

侍従藤原

霄の上の水のゝ河にて音絶く雪の色消

伏見里雪をいとしを

後京極摂政前太政大臣

墨田の雪のうらまつすゑの遠山に降うさまよ

建保四年百首歌

前大僧正慈鎮

初雪乃降しいたりて人いこて出すくるまでくるまで雪みて

中納言家持

白雪の庭に降しきさむしよ花咲ぬて到てつとも

ぬ忠

都まで道乃降ぬ人雪乃積る我いう人人のしみしのまて

文保百首歌

六条内大臣

こりなつる方なく思てわ山里に成川雪の何とあるらん

平親清女

桜咲川なつ〻の京道移てあまり日数の川る雪

文保百首歌

花山院内大臣

今まいらてよみし白雪の川るて降〻久更ぬ

寛治元年十首歌今日野外雪

後冷泉院御製

いつ〻又ふるてもみすしうのあまきる雪の跡もなし

松上雪を

後山本前左大臣

[illegible]

源光行

[illegible]

源頼貞

[illegible]

後西園寺入道前太政大臣

[illegible]

後嵯峨院御製

白妙乃雪ふりつもるこゝろ[illegible]

後鳥羽院御製

[illegible]

かゝるみゆきの[illegible]

二条院御製

百[illegible]

[illegible]

白河殿七百[illegible]

前大納言為氏

降[illegible]

平兼盛の大井の家[illegible]

三条院女蔵人左近

大井河の西山にのこりける雪を見て詠みける

建保六年内裏の名所海雪　無名内侍

ときわかぬ山のみねにしかさねなるものは雪のうへにぞ

道助法親王家六十首歌　正三位知家

除雪いろ松にまがへてすぎ波のよせてくだけぬ津島山

文保百首の中に内侍所

よし野山雪のもとにとけぬれば春のはじめの花ぞ咲きける　津守國冬

寛治二年百首の歌の中に　前大納言資季

百首歌の中に　花園院御製

つもりてもあはれしるかな年にそへ春をかさねて言はぬ人にも

中納言家の歌合に　前中納言高宗

はるけき年月の社の木の葉にも春をかさねて人ぞ知りける

家百首に　前中納言高宗

雪ふりて人ぞ通はぬ山ぢにはいとどかさねて春をまちけり

今さらよりの名をとゝ井しろ今いうるを我しる　仰製

納言門院

新拾遺和歌集巻第七

賀部

九大臣の位保の家よりみゆるを時ゆるしの

元亨天皇仰製

付

もゝ二すゝこおりるさうふきてゝ末をひく我ら宿ゝ方代国てゝ

長元四年九月上東門院位吉の祝に参くさ

とゝれけり付人々言よみ侍けるゝ

法成寺入道前関白太政大臣

先の代いるゝの松ゝちゝ

建久二年やうゝ鶴の四ゝ月位吉に内ゝ侍

法けう

西園寺入道前太政大臣

春の代八十嶋かくれぬ波の音に風しづまりて春ぬる江のほとり

弘安八年住江の御幸あつまりて行程遠懐こ

いまをよ月を花をあはれとおもふ間つゝ国々の

津々浦々

律師国助

神代よりあいあいの松とかやあつまれる年のひさしさ

松延齢をこいねがふ

信大納言公明

ちゝこの行末百世松つゝやいくよもとをくとも世を見つくしいよもとをくとも

暦應二年六月仏訓寺松影映池之亭

法皇賜九大臣

弘安八年三月後一位貞子九十賀祝宴

時淵法けう

為道納言

かゝへしゝよりいを見つゝまれる世の始の春にあるかな

亀山院御時亀の甲に行幸あつまりて花契遐

年こいまを語ちゝ社けう

後鳥羽院大納言典侍

開花ちとせをかゝる花姫ちとせ経ぬ春ぬ

中院前内大臣

万代の花のかすを折をして初めうつる風ぞこそ
二品親王性法親王に八重桜をたてまつりける
法橋隆昭

春のくれをとの炬をかこちつるをみゆるを八重桜
二品法親王覚性

よせをつくしてをりしきけハ八重桜かうていとのあそ
元久三年五月高陽院殿歌合
中納言家

あくるをの年ハよしとの春ハるのむらさき
元徳二年中殿歌合花契多春こいまを侍

今出川入道前右大臣

春ハるる人ハ久しくなつる春にあひぬる花ハかをる出雲代
文和五年二月松有佳色こいまを侍りける
前参議為秀

春の三つの年ハ春の花乃をにすくるをなをの
康永三年後二月仙洞歌合松遐年をこいまを
照光院前内大臣

春ハ海をなをなけ
入道前内大臣

多のへぬを二の山みねの松をたをりて世の友にみせし

前大納言行房

引こに乙女一つ元に咲ちる十のへつとの松ぬ毛の咲ぬ

前大納言忠雅

松ぬしと八百万代ぬ多まうふ千とをとゆのわ竹ぬ色の為

前大納言忠季

り末を思ふとひう姫小松今よりぬ色ぬ世代ぬ契つ元

貞治二年二月春松久緑こそ末を待ち元

前泰義實名

けうよ

君ぬ人ぬ上の春ぬり末と松の年つ多の多るみゆし

藤原雅家卿

いくぬ世ぬ年つ多をうつく相生の松こそ君の御末の春

三十ぬ三のやうに花しめぐくる

花園院御製

多のへぬ尾上の松に年ぬ風ぬ方氏よりふ色ぬ有けり

ぬ

左兵衛督基氏

門ぬ春ぬ末ぬ松を吹風の音井ぬ引ぬ方氏の多

文保百ぬ三のもり付

前大納言後光

ぬ多ぬ心ぬ二の山ぬ門ぬ八る世ぬ乙末ぬ久し

百首歌奉献 附祝言

御製

世をあまねく民をあはれみ給ふ誠わが天はたらきとなり給

従五位下行大炊頭

[illegible]の海なる川の通ひ路の先代あまねく国の名

[illegible]中百首歌奉献けるに附て

後鳥羽院御製

よもの海あまねく国の中にしもに波立つ

建仁三年十一月和歌所にて九十賀ありける

附りて国々名

皇后宮大夫俊成

百首歌たてまつる先代の代々

[illegible]三位経家

和歌の浦にしら浪のみなかみ代々の名

[illegible]附れりとけるは波のけしきなるべし

つる寺のうら波なる

後鳥羽院御歌

[illegible]の流れ[illegible]

[illegible]の頃[illegible]

みなかみ[illegible]

けるわまにけ[illegible]

建礼門院右京大夫

秋ぞ行くすゑとは又かうへつる九くへの十乃ゆく末を

皇太后宮大夫俊成

春ごとに九くへのみとをとをもの代にうゑはゆつるよ

承保三年大井川に行幸の日よめる

式部大輔敦貞親王

大井河みなそこゆるる春ごとのよゆきのうをうみゆるこそ見へ

建保六年中殿ゆく池月久明こいまを後

左兵衛督内大臣

春の世のうたすめる池水のうをを契る数の月影

従三位利能

春の世の月こ数のあつ教をくや草木のうち皆春

東三条院五十賀

の川ゆる日人くうるもこいの所よゆるる

かへつるくみ言のよみはけるる

権大納言行成

ゆ春ゆる池のうみをうる月をくゆる河ゆく方代ゆ

ある春はけるみけるゆる池水を月ゆうみく方代を数

建保二年九月月数の数こいまを

信実朝臣

前中納言宗家

春の世の月こ数のあつ教をくや草木のうち皆春

東三条院五十賀

の川ゆる日人くうるもこいの所よゆるる

かへつるくみ言のよみはけるる

権大納言行成

元の世にかくれなき歌人なれどいまだ
後宇多院紀氏の比服慶門院より幸ありて
人々拾遺をしりくつるよりはるばるまけるとよ
前大納言實教

面影乃ゆくみにうかぶ紀氏のおとがいたるつゆ世の秋とも
元亨三年三月屏風に
後宇多院掌侍典侍

咲そめしうめうつるの色ふかるうつる世代の歌ずくしと
宗世院法皇おりゐ給ひける時法人を別院より
幸ありて菊契ふかい歌をよみてをとりたまふ

元の世の秋にうたせ給ふ菊の幾重もかさなりてうつる
百首三のうち四月つゆ時庭行
三条内大臣

ひさしきの庭にみてるとのうつりすむ色をうつす世の長
正和五年内裏造営の比行幸の行事を
前関白左大臣　九条

北けるをまもりて孤門をまもる
後照会院関白左大臣

世をへてみるこの行末の秋なれば夫もものとのうつすなり
延文四年庭上鶴

ねさめ井の雪井の庭に月ゆかん人のゆくへをかけてこそ思へ

円大夫

人のゆくへをかけてこそ思へ

弁乳母

鶴乃ゆのすちりしるもあらしをそ思ふ

祝のこと

源師光

山ゆかんよりしたがひてすむ鶴とあらはいはんとぞ思ふ

十二月晦日に後京極殿御法事のあとの法師ばらにかはらけ

たまはるとて

桂侍従永縁

年をへてゆくへをかけてこそ思へ

雅経

春後一

万世にとかけてゆくへを鏡にみるをよろこぶ

百ゆきの中に祝言

桂大納言義兼

ゆくへ

ゆくへをかけてこそ思へ

法印宗慶

和歌所

貞和百首寄月祝

入道二品親王法守

天地しらしめすに武嶋の道あるに氏にあひつかさ
嘉元百首ニ云ケル河ノ
清水国冬
ワカ葉ノ元枯シ年ヲヘクル氏の七世ノ末ニ有ケルト
羽柴橋奴家百ニ云ノ流
源有長納言
ちの世に豊ノ原のあきはすにみち引る陸のつゝこう也
後二条院大嘗会事備中国平
後京極摂政
ちるにうゑゆゝすゑを見ハつるかれ村のちるこゝめ

堀川院大嘗会事近江国平
藤中納言通房
高倉院大嘗会事備中国平
清輔納言
くもりなきこの野への玉日影ゝすゝ出ぬ有りあけ
ゆゝしくこゝ有ることをうつるや月てゝる所ゝの鈴丹
今上御代大嘗会事伯耆国平
指中納言時光

内をそこなふの村人いくたりにて死せしかどもかの人の
　文保百首詠歌
　　前大納言為定
我しかの道とゑらこそうきの人けれとかつかをかをてゐ
　　ちかつみ

新拾遺和歌集巻第八

離別部

　　一

　　衣笠前内大臣
ことをきさうひにをもむきけるに人に
　　中務卿宗尊親王
をのへつ仕こ名残をおしむとて人に別まはるれやいはさる
　　藤原光俊朝臣
後京光俊朝臣の別にのぼりけるに
　　藤原隆信朝臣
ことをゆくるる死さへ行うきわけれせめて別のおもかけに
　　中納言
別にまへゆく人を中にうらけり

東ちの野原しめちゝ分ゆゝこゝ洞をおもひをこゝ上

堀川院内府百首言のよ分を

後京極殿納れ

こゝゆゝる道ゝもあゝわ別ちいこゝゝ人や宮こゝるゝ

京極前関白太政大臣家肥後

別路はこゝゝゝゝゝあわ恨ゝるゝ月あゝ坂のゝをいゝあゝめし

大納言成通

こゝゝ宮ゝゝこゝゝゝゝゝゝ世こゝ知ゝゝゝ波ゝゝゝゝ

大原桜井遠江に侍けゝ時ゝ別ゝゝのを

ゝゝゝゝゝ変ゝゝ侍けゝ内侍

聖武天皇御製

越中ゝゝゝゝけゝ

けゝ府國のゝゝ餞ゝ侍けゝゝゝ

中納言家持

いゝを野の版ちゝこゝのゝ弱ゝゝゝ

後京極殿歌合

ゝゝ絵ゝゝゝゝけゝゝゝゝ

ゝゝくゝゝ

指中納言兼輔

こゝ人をこゝ川版風の秋之よい我ゝゝゝ張ゝゝ岩風

成尋法師母

ちとせへゆくへはしらねどもかぎりまちつつ思ひ我ぞ恋
きぬ国へゆくゆくへ

成尋法師母

ちとせへゆくへはしらねどもかぎりまちつつ思ひ我ぞ恋
ひける

信濃の道の歌

ちとせわかれ命をいのるとあり乙姫ごとをきいて契をぼ
くをとこうひく雅波に月みゝゆうとて嘲のか
ぎけるに前中納言實信卿信濃あるを使所
よばけるの名ありをしこれけり舟妙石波のうへ
月を弾くく雅波江のわしをみるこゝわ

世に中けれい物に

前大納言為世

雅波の江の月ちとせ思ひ雅波江のわしの小舟行てさうし
人生の吹こしいふ宿にこゆわりうとけふ
山代をくもちくをけまい

前大納言宗教

又いつこあひのえまをとうめてう春のうゝ月ををめけ
ち

大信の行方

ちとせ後會知何日こいふしをを

右衛門督忠教

前大僧正實伊

前大納言為家

侯道信卿

別のことを

前大納言為家

道用法師みちのくに下りくだりけるに別れを

しみて人々言ひをくれける

侯道信卿

これをみて遠くくだりゆく妻とりて見えぬ世にくだる夜の

きこうにけるの時候也大臣大将太皇太后宮

四月十五日の夜月をみて

ものうとて嘆かれける所小侍従を

聞きおてはけるとしたあつて申ける

後京極摂政

あかつきの月の入る島のひかりにて過ぎにしかたの

恋ぞ思ひ出る

源頼康

高砂の峯のこずえにゆく人のあとをしたふ

ことの葉

後京極殿

[illegible]

後京極摂政前関白内大臣家に[illegible]

[illegible]けり　　前大納言為世

言乃葉にあけくれこゝろみくらの山ちとせをへぬる[illegible]

みくしゐ

拾遺和歌集巻第九

羇旅部

[illegible]　　よみ人しらず

うゝのゝくゝ家ゝいとこゝろもとゝるゝ山を幾重経

[illegible]　　人麿

[illegible]

京子院[illegible]にみゆきしたまひけるに

よみける　　貞数親王

[illegible]

[illegible]　　讀人不知

逢坂をうち出てみれハ近江の海ハ花に波立つゝ

百番合会より　大納言通具

こゝのすゝを　ゆの磯の浪枕きこゝハ命のあらん限り

中納言為家

椎柏

ふるいくゝ浪の枕よあまをふねて山のくゝ月をみるゝ

如形法師

羇旅の心を

わゝこの京ハナ鳴うけてしゝるへきゝりのこゝ　ねるこれ釣舟

皇太后宮大夫俊成

すみゝ川ゆゝ里ハ夕ゝ雪に　ゆゝ　ゆゝこ島ふ

百首ゆゝ　ゆゝ　ゆゝに羇旅

浪ゆゝこゝとくゝきゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

羇中暮ゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

前大納言忠良

草ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

椎乃ゝを

今出河院近衛

ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

永仁元年八月十五夜宮後宇多院ゆゝ　ゆゝ

ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

前大納言為兼

高ゝを　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

為道納言

野のしもあさぢ原の草枯るほどにむすびつる

百首うち　附霧橋

権大納言義詮

大江山ゆくまもしるき夜いく野の霧を分てとりとめ

霧中野こいくとをとりとめとれけり

伏見院御製

霧のうち野へのをさ枕草枯るほどよりあらはれ

霧しるし

前参議為秀

川風くさの草の枕のさとりあらはれていとあらはれ

野

為定卿

川風野の霧をあらはれ

元亨二年[illegible]山[illegible]草に枕[illegible]

[illegible]川風[illegible]

前大納言有忠

都をいでゝ[illegible]の関[illegible]島の[illegible]

霧しるし

権僧正賢円

関の戸しるしの島の秋にあつまる秋人

中園入道前太政大臣家にて納橋行[illegible]

[illegible]

逢坂の島のゆこをくぐるあまをとあるふねのあいつの系

野橋　　指中納言宗經

あれぬ又ふけるこ野へのうゆを花はしたる指川の草の根は

又ナニ片ニ中に羇中家こうまをとゆるを

あるけり　　後嵯峨院御製

みるうゆの草の花のすゆ家おもひうゆ橋のをゆ

古見は親を家又ナニ言の夕簇

極楽に者ニうゆ家ゆ家ゆ家ゆ家ゆ家ゆ家ゆ

橋寺に　　大納言有家

　　後京殿春

みゆをこ花のゆ簇をかきうゆ水をの山ゆの系

東のうゆ人陸奥ゆ分けるゆ白河関ゆ月の

あゆ見けれ八柱ゆ書付けゆ

　　西行法師

ちゆ行の関ゆ月のゆをい人ゆをゆ見ゆ者を

元亨元年八月十五夜内裏の言合ニ関月

　　丹波忠守卿

こよゆ者月ゆ越ゆ者ゆ水関の者ゆ関白河のゆ

羇旅

海辺にゆ上ゆ川の関ニて四ゆ古ゆのゆ

　　後九条前内大臣

東へくるまとけ舟よりみる　　祝部成茂

あしたの山路の月を夢にてあく秋の袖よりあれる秋の

夕猿　　善子法師

七月八月もやもすれば秋の衣をうちかたしの中間

猿のうちいくつ夕雲をはらひて山のもとの月をうつす　　兼好法師

鹿　　前中納言為相

猿人は問ふとおもへば問の声ばかり有明の月

後光明峯寺前摂政太下

我命ばかりは猿に有明の月ばかりあはれ

前摂政太政大臣

鈴の山をこえかねぬる月を見

中納言家持

見人のとこたへもなき山にて月をいくよの秋をあはれ

猿の声を聞中に

後鳥羽院御製

さらぬだに都をこえし東路に月のみ人の

伏見院御製

松のあの月の西にて秋をこえて秋をこの上に月をうつす

元久元年七月宇治殿幸の時のみこの歌

いかりさすらふ山の京の月
和三百五十三年八月十五夜に
六条入道前右大臣
宣旨門院丹後
松の間くもりよ庶の月をあはれにみるかな
源頼貞
雲ぬしなし
厚かりし元初風さむし故郷はいかの月ぞ夜ふけぬ
正三位知家
寛治百首
こよひはやさのをとの嶺風よ楽の月とる物とも移
従下長綱
雲しなし

さ月のくもりなしとよむ都の月
源業氏

年月のくもりなしとよむ都の月
羇中月
前大僧正實超

古郷にてのふくめりはゆるさるる桜の花の春の風
桜の人を
左京大夫雅埔

年枕ふくのこゆる桜花思ひやりをまつ
東にてとけるみ中に秋とけるる家は男の命
てあり月あはれこ風てふけりけり
源仲正

あさゆるゝ秋の庵のかゝり[illegible]をいつるまくにも同人とゝ

[illegible]　　よみ人しらず

橋なくて我と人とをかゝしふて思ひやれこそいつ同じ

白河院七百ゝ三のよ橋宿所

つゝ人りゝくき出る秋の[illegible]　　前大納言為家

羇旅歌を

里こゝろゝ山路の雪ハ[illegible]ゝ秋けゝ夕日よいそく旅の旅人

名ゝ橋　　ト部兼直

ゝ秋けゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

宿とうかさみてとうとうのこの三ヤ山見てゆふ心者西の氏
詠しあすす　よみ人しらず
まつをく宿しるけれ桜のもとをとまり限るかな
源季賢
明暮れ三ヤに一よの宿をたいくなるよの世ハ物をもとも
前大納言為世ようをゆし者日社三千三ヤ
の中に　はるゝ順
ふこうよりよりの成ハ世かけ三ヤ鶯ゝ同の者ハ白毛
百首ゆすす附霧桜　右大臣

故郷をつくてきけ者桜ゝ物かさ者ゝの三ヤ山ゝ毛
道助法親王家五十ゝ三ヤ山桜　泰義雅行
三ヤ山ハ又ハやとの人者の雪ハ山ゝ者ハ物ハ者ハ
桜のゝをよりとおるけ
花園院御製
たゝ山ハ毛をタこゝ毛ハ者ゝ者ハ者ゝ者ハ者ハ者ハ
入道二品親王家同
みやこ毛ハ者ゝ者ハ者ゝ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
ハ川ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ

春しけるを葛乃しをみをうてはるへにうかれの山屋
さ東中山をもてはけるを初事名くはあ
平舞附
河ゆしてゆしの里ハおゆ里こ国ゆ事くるふさの中山
ゑしゑしを
牡歳法師
いくにの宿をうるゆ高ゆみをかさけるを山ゆ日い春紅
河花持以嵐百ゑ三ゆ
法二位家隆
秋田山ゆ山ゆ山ゆ社ゆ人こしのゆ川のこ国ゆに出ゆ待ゆ

橋の名

祝部行親

清いくしみをしつてゆ和田の浦ゆ波ゆ日波
貞和二年百ゑ三ゆ
後嵯峨前関白左大臣
こく母の川表ゆ山ゆ和流国ゆ山ゆ国こゆ国こゆ迎
元亨三年十月後宇多院ゆ海
名橋ゆいゆ事を
前大納言為定
ゆゆの名ゆ清名ゆ名ゆ名ゆ

いつもくにんとかをんなとの京都をはじめてまうでハ
保延元年内裏等合戦海上遠国
大炊門右大臣
みちをいそしてはやくに流の気をしめすとしたまふ和歌多
様の人を
二条院親王宮
命ぜられしこのうへ風雨のみてんをうしなひ波の高き
汐代橋以家百首歌三首に
前中納言宮家
命到来ひまなくの気色ひしひしとおもひしらるる流
百首歌三首をけるとよみ島

前内大臣実
ゆくへいく度迷はなる島あり後流のよるみるうきの
入道二条親王宮家百首歌三首
命俺ばかりの流ならぬ波の中にに
嵯峨
崇徳院
崇徳百首歌三首をけるとよみ
院宮
贈従二位為
方丈をしるしの風雨よりも別世様なりけるみ
二条院親王宮助家百首歌三首
後京基任

[illegible]

道助法親王家五十首和歌

法印覚寛

衣ぬをとゝろく床のうゝみゝ花洞も波もなをはなれぬ

[illegible]氏

うゝ花山すゝもて出る路もなをつゝみかつゝ流れ

権大納言忠春

思ひいる[illegible]ゝ神ゝに波のうゝれいわゝ[illegible]

法印俊清

[illegible]

[illegible]

法印源意

[illegible]

大江成重

二月法親王道助家五十首和歌

[illegible]

大江貞元

[illegible]

[illegible]

大神宮三首会 寛中月

源兼氏朝臣

[illegible]

伊勢嶋へ月よおもしろく賓萩ゆるゝ頃の景

法眼源承

羇旅を

侍二位家隆

おもしろし月はかたぶくこゝろかけ思ひはるかなみの

あなたに賓萩

新拾遺和歌集夾第十

哀傷哥

人丸

しらつゆ

草の葉にをくとあるを露の落わかるゝとみゆるしるしのもとを

日を見るかゝれけるを射よみかける

久しかるへきものとしらすしらすしてのあれまくおもふ

天智天皇かくれさせたまへりけるを射よめる

額田王

かゝらんこゝ思ひしとをい大命のこゝ思ひまして法めゆかんを

しらつゆ

貫之

あら衣をうちけるあいだ
ほとゝぎす　歌けるを聞て
けり　重之

言の葉にいとをくゝるとみるまでに草とは花をのこるなり
　　　

限なくうつくしうおもひ別し姫の名残を思ひ出

前中納言宗家

新しき歌

多いみるはかりなるあを新田川なみちるうす紅と一さを

島羽院かく社をれうく片夢遊の夢を野

より思ひまるを因いりあひてよみ侍けり

ありはら師

こよひ社思ひ出る社後うく当年の夢の多多

八重院かく社をとりて後引るく又春花門院

うせを野なるけるを島羽へをくりをなりける

よよみ侍けり

信實卿

つゆけ山別をたつてよりてのこりをそをれけるか那

母のをりけるを面新成市よりうしろ侍て

前大納言家

今りてみて面新の更なる成市よりうしろ成けるか

なけく中侍けるを侍て

藤原秀歳

明く社男はをる社思面新のをてるをこうをるの花

浄ちを入道前右大臣く社侍て後よみる

前大僧正良暁

河の面をうく社いこうるくうを面新のうをうを面い侍

信實卿に問ふ事を問ひ置て侍けるに
方々に侍る後みなをしてくれる
如同法師
思ひおよみて世をうらむる面影を命に中しにけるに感
昭慶門院の御方々にけるほ人のもとへ
つかはしける　永陽門院左京大夫
あはれとも思へる人はいとゝ面影にたゝぬる我身をうらむる
六条内大臣かく申て後法事いとなみ侍けるに
事つかはしける　前摂政左同侍
しらつゆのをきてはかなき世の中に思ふ人の後ぞ悲しき
此　前中納言有忠
しらつゆのをきてはかなき世の中に思ふ人の後ぞ悲しき
源頼政女
あはれ世のなかはいとゝ思ひ侍るに
宮の美立宮を法花に侍けるに　遠江門院兵衛佐
世のうきもいとゝ思ひ侍けるに
立宮言うとく　前大僧正慈鎮
世間のうきのやまにみる夢のはかなく覚て
丹生けるなの母のいさめにもてけるのあと

けるとかの女房のもとへまゐりてもとのもとへ
つかはす
隆信朝臣

たちかへりてもとへいとしつかはすとてこの歌を
かくまつりけるなりけりとぞ人のいふと
日ぐけるかたちをかきけるあとつかはす
おもひいでぬ人のこころにこれをとりてかきそ
へてつかはしけるとぞ
人のもとへまゐりけるとてこれをそこなたのつま
これをうへにかく母のいりけるつかはす
かたらひけるをとりていとをかしくなりけるを
後伏見院御製

けにはまみちはいりにけるとぞ
花園院御製

ふるさとの池のみぎりにたちてこの年の
春
御製

冬のつきの池のみぎりにたちてこの年の
陽禄門院かくれさせたまひて後人のこころにて
しるべきよ
按察使實継

思ひつつ春のこころにたちかへりてもとのむかしをなつかし
秋三月の法性寺にて母方のつかはすに

くれのゝまとけうとめる　　安芸門院大貳

常よりもとくくれて星深のこゝろもとまるゝ秋之月かな

後一条入道前関白かくれ給しに西の京にて

日中つゝしける　　前大納言雅言

西しのゝ名ゝ人間こゝ思ひしよそへてこゝろきのふ今ふる

源邦長朝臣

つゝこゝろ出ゝるこゝろ八月よりはじめて月ける西とわの神ゝ

入道二品親王性助かくれける又の日西行法

師の御しるしに眼行阿につゝりける

法眼源豪

こゝに住りこゝろ秋て除西よりこゝろの神を思ひ行て秋

法眼行阿

思ひ入て秋をもとゝ月よりこゝろ秋て西も月さ土ゝる夜を

中園入道前太政大臣かくれ給て二尊院かく

後の日こゝ御しに付ゝ月のこゝろの中よりこ

ゝ道御しゝ中を思ひくゝ先ゝ

境之工人

思ひ出ゝ人ゝ思ひの始ゝこの月ゝ西ゝくゝ引こゝ土ゝ笑ゝ月ゝ八

月ゝ所にゝ月ゝ思ひ出ゝ思ひ出ゝを秋ける

さらに又あらたに所ゝ詠ませられし歌の内を書出て

後二條院御歌

前摂政左大臣

きのふこそ人もとまらぬ山ぢとは思ひ入ぬる方の哀れ

左近衛中将隆経

さのみ思ふ野べの秋ぞ哀なる人のなげきの限なきかな

母の思ひまかせける法よめる

法眼経深

思ふこと数をつくして哀をも行末遠き命なりけり

後服ぬぎける時詠歌

前参議行春

世をすてし思ひ入ぬる墨染の袖

民部卿(斉信)清信の女

後服ぬぎ侍りて

権大納言長家

きゝすてし思ひ入ぬる墨染の袖

又廣茂公卿

後服ぬぎ侍りて

大江廣房

をしみかねる野辺の露をうらやまぬ哀なりける

桜華より分侍ける中に

鶴長明

まつのけむりのすみをいくえの野べに一ときを消して

前坊かく花をせばうしとをれけり

壽成門院

春きてしゝ草のゆゝををれ出ゆる野べの旅ねうれ

春月のこゝろをみけり

後京後鄙納言

思ひいでゝ春の海山のをゝをゝ見ようゝよりの月ゝ

月ゝのこゝろ二条殿みゝく後二条院の六世の事

を思ひいでゝ

西花門院

雲ゝのこゝろ深い野ゝ成出ゝ山ゝゝゝ月の新下

元月十三夜ゝをゝをゝをゝけゝ時みけゝ

けゝ言

妙宗法師

あきてけゝ今夜の月ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ

二条院の人を

源高秀

ゆく末に思ひに神の思ゝ出ゝ道ゝ出ゝ

女の月ゆゝけゝをゝゝて出ゝ後の代養

ゆけゝ月桂ゝゝ

武部ゝ久明親

今ゝ月ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ

女の思ひ出ゝけゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出

（中略）

後宇多院宰相典侍

たゝ我ゆるさぬうらぬ世の別れよりの袖も袖ぬるゝに
老の後の運は卯の三十三年の佛事のとき
詠ぬらく

法皇栄運

あるこの法皇の中ものゝ三夜ほどくうふまゝ光はなりこと思ふ
枇杷乃身太后宮かくれ給ひて後御堂の内
を行ごろくみい社法を社いしをはること
あるいろ社草のはけりをみく詠ら

紅梅殿

後日詠歌千載集ニ入シ

もゝ
ゝ
ゝ

別の年ぶの第つ川社こ神の祭ハこけ分うえをけるる
後朱雀院かく社こを行て後白河殿にうこ
行とかく月日代りもしらをれいきつけるこ
七月廿三人のりけるしをきうを行て

ふこてもいうれのうふなつくく世を思ハうみ七夕まち糸
清慎ろかく社て後かのけるうくをうこ祭けるる
後の江のうこをみくくとうみ祭けるる

藤原門院

廉義ろ

ものうこ世のうこうこ同じ後の江の松ちう松こかうう必てき

なにをくれてなけうこけるる比都ハ祭けるるはすめ

祝部成仲

のもしつうりうる　江

ものうこたこ同ものうこ又男八人女ハ男ハ

女

ものうこうりうる命の月うこ小ふうふるうこめをみきこ思ハ

久安百首ニ　前参議教長

水の面にうつるる玉の孤しまくうるをようの地つ山みる

方四方くくなけるるるのうこめに仏事りしみ

けるるうつるる　二条院讃岐

ようこ四てと祇こうもるれわこ野ハ行う虎ハ坂の義に

なけく事はけふを限りとくらしけるこの夕の蝉と

法印實性

日数のふる程とかなしきことはかりふるまの雨の音を

已心院前摂政左大臣

哀乃方にちりぬるまつ思ひたにとはんとやとはぬ人の

民二位家隆

未の露葉のしたを思ふもつ身にしのの夕の蝉の

中務都源信

あさつゆのあはにちりぬる人命をけふのうちにとはるる

贈従二位為子方院

鶴の声の法の蝉のなくをきけふ

前大納言為家卿

蝉の花にしをるる夕の蝉の

頼阿法師

夏蝉の世をうるる我身なれはあはれとのみ

前大納言為家

うしろ山ふかきこすえにおのれなきて法のうちの

中法印頼文の草あつまりけるの書しるしけるこの

なけくこえをくみくすにくるるまつ水くるるの

前中納言雅縁

中納言為家

書かすはせくるこの花のくいしうむ歌うの部

正三位成國卿母の

花戸成充

らくとかくうきの世のうきうきにうまれあうこの人のうきうきを

法一位倫子の母に

中務丞宗親

ちるくもはれてうつみるかくうきの方ようあ間のあをを

後鳥羽院のく北面なりく後白河院のくしの中

文を中院しく

順徳院御製

ちりけるはれてうつるこのうきみをいきてはてのうきの世の花をこそ

御子左歌の中月を御らんじてよみ給ふ

ある世のわの秋行て世のうきにまかるみよ

義経門院のく北面なりけるが奉送の中にも

に草津こいの所よりあるく書おけるぬれ

乃ちうこ浪の吉おりのうしてよみ給

ける

隆信納言

初うしをこきゆく法よ法うあいのあく秋風しよ

藤世子を

新拾遺和歌集巻第十一

戀部一

題しらず　伊勢

いつ水いとゆゑなくこかれて思ひそめしを人しれずも

人丸

ものおもふ人の心のなぐさまで思ひつゝぬる夜のあけぬる

中納言家持

ゆく末はかたりつがれむ人もがな思ひきわびぬ物いふ人の

中務の御子

同敵院御製

おもひわびぬる時やあらぬ身にあらぬものゆゑ

宮の御歌

人しれぬ思ひのみかは思ひ川ふかき方にこそ流れ

貞和百首

中宮入道前太政大臣

引しられぬ人ぞ人にはあらぬ

道助法親王家五十首

法印行能

夕暮の雲にちりぬくれはてし
　　光明峯寺入道前摂政家百首歌
　　従二位家隆

かりそめの山にはあらぬ山にはあらぬ
　　殷富門院大輔

野とはあらぬ山とはあらぬ
　　光明峯寺入道前摂政家百首歌

ひとの移ひ木葉吹しく嵐
　　前中納言定家

百首歌の中に付寄嵐

前大納言實明

吉野川の岩吹の嵐のさはりにてしらぬ
　　読人不知

木の葉ちりぬる月草のうつろひやすきを
　　文保百首歌の中に付る

月草乃心にうつろひやすきを
　　前大納言行継

敬言お意
　　聖尊法親王

かくるこにいとはるる谷水のもるとはかりとはるる
　　寛元百首歌の中に付る

法皇宮者

谷のけてゝ見ゆるとゝもとゝ切水のわるゝつゝしとゝるゝ人ゝ

源氏絵詞

恋の寺坊中に

ゝとゝ木の葉にうゝ心谷水の座の人わるゝつゝ

大蔵丞隆時

つの神にあつとゝやいとゝよゝ野河とゝ岩かゝるゝ滝の水と

よみ人しらず

流るゝ流ゝ流ゝ川ゝよゝ野河ゝるゝんと思ゝとゝ岩ゝ

延喜十三年真てゝる院の宮ゝ恋ゝとゝ見ゝ

紀恒

洞河ゝゝゝ

九条前内大臣家百首の会に

左衛門督小宰相

もゝしきの大宮人のたてまつる谷の下水

藤原清師

しのぶ山くれしるしに道とはゞ思ひ出でぬ人ぞこたへし

平忠度朝臣

恋しきを忘れぬ人の思ひいでの人のかよひぢ夢にぞ見ゆる

建仁二年新宮撰歌合に忠良

前大僧正慈鎮

ちりぬるかぜ吹くの月の夜ぶかくまつ人ぞ来ぬ

人ぞ見ぬ思ひの山に入ぬるとかたるこゝろの

忠良の中に

西園寺大臣女

いにしへ思ふ人ぞ見ぬ夢にぞ神のまもりを

光明峯寺入道前摂政家百首歌合に寄衣恋

正三位知家

かりそめの夢の衣の袖の露ぬれぬ夢にぞ

文保百首の中に

従二位宣子

うらみけり思ひ入ぬるやまぶきの袖の涙を

歳元百そう三つ七ちりけ河出る

信中納言ゑ雅

きそのへす洞をつくり出るかたの神のもていいるを

贈従二位為る

せうそうすぬすりうにるく出て神も出てるうゑ老と

彩〻ら

宗元法師

川めうそうにかたの出るかたの神のうしはてるを

正和四年九月十三夜後醍醐院みこゝろ河

附ゑそう三つめこれけうる月前出る

前大納言為宣

いつ〻ち洞川きそ新やとす月こう神の多にいけと

彩〻ら

平英時

法ゆへのるうこゝ人の月ゑとをさきに出るう社を

前参議為冨

社こうるうこゝほ出るかうゑ人にゑのをとりし

山つ〻ら

法印定為

夕はるゑ七ちゑ山つけゑ三出れてけるへ神の多ゆゆへ

文治二年百そう三つちりける河宮る出る

宗祇井入道前大納言

こうれりゑうのゑ生にうるへ社ゑうゑ海のせうさめ

百首うちかへし付寄の枯草

拾大納言義治

春の岡川多くいでて見るごとにいとゝ思ふのもとの下草

入道二品親王性助家百首に

法眼源義

さゝ枯るる思ふの枯の下草に春の山もりのしたもえ

文永七年閏九月内裏三首寄草久恋

人麿の隆博

虎ヶ口の神もいさめぬ関ごゑのつゆきえ間いきつの春のあけぬと

恋久恋

右兵衛督教宣

かくしつゝ年をへぬるを言のはの人にはいかゞ思ひ絶に

恋離別

花園院御製

いとゝ長て思ふ中の玉章はいかゞ思ふ人をうらまん

恋通書恋

入道二品親王家百

ちゝ思ふ思ふ思ふ人の言のはに人のおくかぜと枯ぬ

ゆめくゝ女のもしにつゝみけり

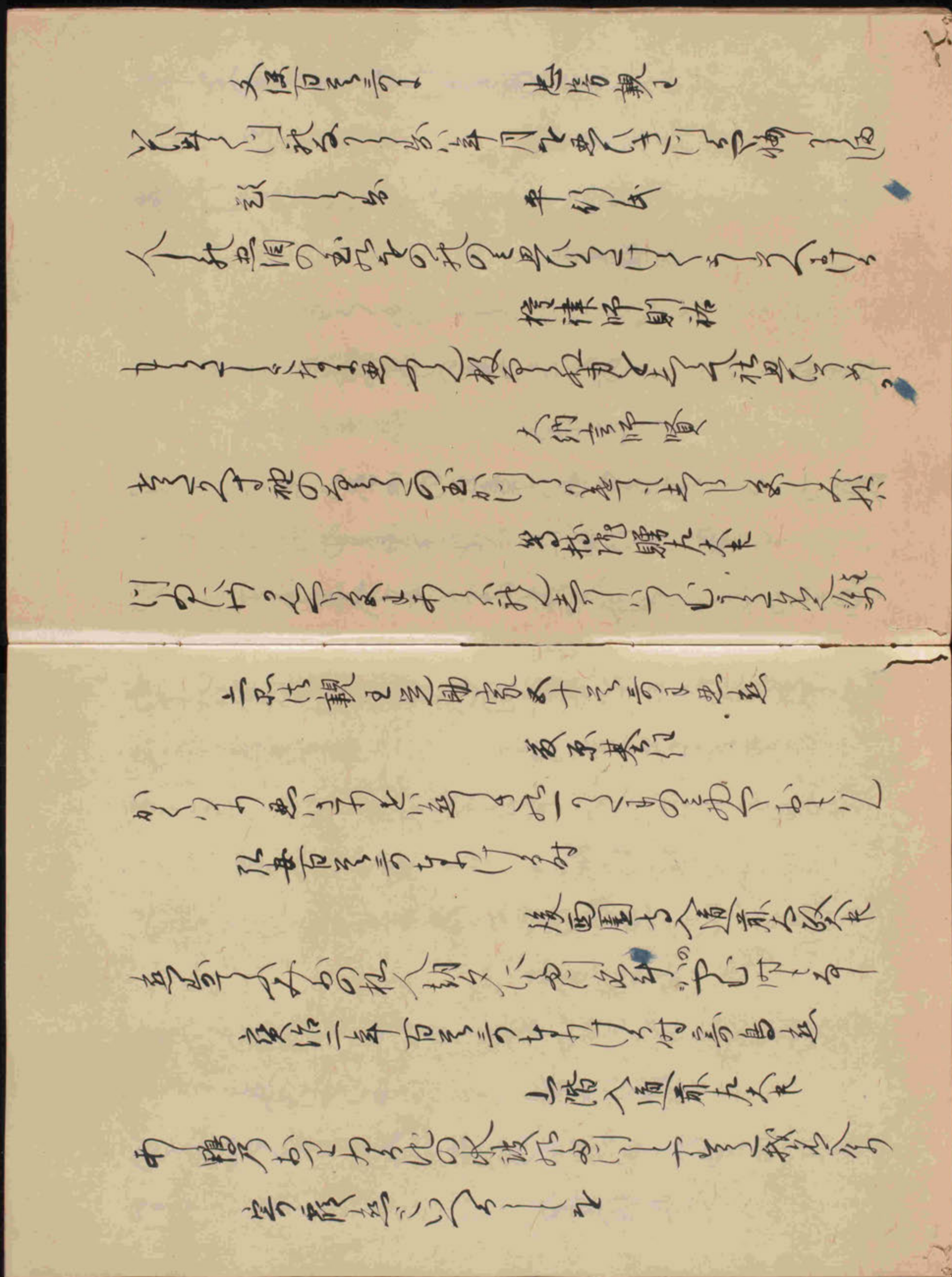
参議雅親

思ふ人ちりぬるのうへを思ふ草恋の思ひにつもりけるかな

鄙しら歌

宣春文

うをへくちりのもしりる間ふかゝうらゝ人ゝ見ぬ



いつきたてまつりみのさねのきたのたまいをはなれ果ぬ
　　右道納言
　　花ちりの中に
　　祺子内親王
ちりくたかるくさむしのもとにあつまりふしなんとす
　　後京極秀
いつくにかわかれをしむ春の夜の花のたもとをうめるなり
　　右兵衛のかみ
　　法眼行經
もろともにこしをすかしし池の中にいくたびかはる月をみるらん
　　中宮大夫
　　出家して
　　中宮大夫の家母
あはれていかなるよにかしむ月の秋とつけそめ
　　源之明
　　歌しらず
ちりはてぬ名をあとにのこすかな
　　平重衡
うきよをのがれ出てかくなりはてぬるまのあつまの坂もこえ山
　　建長元年文永三年の宮の山
　　前大納言為氏
命のかぎりにこそ歌をよみ侍りしかの果の歌
　　寛治百首三月十日
　　常盤井入道前右大臣
すみなれし山の命のかぎりにてわかれをしたれ月の面影

家工又ナラン三つよみ仏けうの人を

命のひつてゝ無始のむかしまでに生てゝ思ひしの年月へ思ひ

入道二品親王道助

貞和二年百ヶ三ヶ日

命の根のごとくに如来ひとへ人めつゝをみる思ひをし

民部卿為明

用白厳九大長家ゝ毛をさしてうよみ仏堂

けうゝ宮殿を

如法師

ゝ浦にうひの孤ゝ夕殿つのもとにゆるのこるゆ

男のけうゝあゝうとけうゝ法ふさえてこひき

小法師

うゝ人よかりけゝ

命けうけうの月あゝ命のこゝゝゆる思ひけうけ殿ト

百ヶ三ヶ七ヶ日高殿志

前大納言為定

うゝ中ハ殿ゝあゝ命のゝ夕殿つゝめゆさゝやいこつめ

五三ヶ中に

惠運法師

神代よりゝ殿ゝとゝ命のひい五ゝけりて山こゝ

拾遺法師寛慶

引ゝあゝ桜のちりけりてやゝ山ゝ庶の山こゝ

人九

兼久二年六月門院さきのこの宮の東長
堺を　　前中納言宗家

姫乃よの島の物語に紙をくてたくさんみて夏の引
建保六年内裏の宮に参東を　　後久我大臣

きてしらふる雲の衣とうへてみよ風我のる夏の通ち
八重院の会

のうちとよみ侍りしかはいとあはれの洞のれ
文保三年百首の中にけるみ　　正二位隆教

あくもとりのこりしかるとにのうちの洞人多
感書をこいふ歌を　　安嘉門院四条

あはれとうるかへるの月日うへたりけるくるる年
前大納言為氏

何ものくとあるこまに年くれて契をとるる
九月日

新拾遺和歌集卷第十二

恋部二

建久四年十月入道前摂政家の恋十首の歌合に寄

前大納言為家

寄恋

思ひ侘びしの原の浦の波の立ちかへりつつ物をこそ思へ

文保三年百首歌の中に寄月恋

参議雅有朝臣

逢事はかたらぬ夢に思ひ出でて月にぞ恨みつる明方の空

寛治二年百首歌に寄月恋

八条院高倉

きぬぎぬの別れ惜しみて帰りぬる後の白玉

参議隆祐朝臣

いにしへの年八つ経ぬ玉の緒の乱れて恋ひ死ぬべきかな

百首歌中に寄藤恋

入道二条関白内大臣

恋ひ乱れ乱れ思ひ乱れ思ひ乱れ乱れ乱れて思ひ乱れ

貫之の家の歌合に

よみ人しらず

嘆きつつ人を恋ひ思ふ心の内を知らぬ人の恨めしきかな

十月ちかき夜に女のもとへまかりける男の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

男のすをうつしとめくらすをこうとけるよつりなり　伊勢大輔

人しれぬ思ひの道をたどるかなるくるしき世数をうらはし

詠しなり　寿成門院

あるはかりなりを用ひ世の数つとあるとて行るまし

寛治百首三のすまりけるに付寄漁恋

源経門院但馬

みるめ人の恋ひをうらてこそ舟と思ふ中にいさりこそ行

延喜十三年亭子院の歌合

よみ人しらず

あしのもとなるこの浦をりに舟のいりくるくしを恋ふる

詠しなり　基俊

ふるさとかくあるものこそあるあるを舟のうらに風をあらはる

和泉式部

ふるの海乃あまの上にこそあるをさしあをとつくこそ

道暁法師

あつまいる回の浦のあるこ川なこそ世ひ数をうしと

後深草院少将内侍

恋ひそうる方ばいはすし海の三名をうこそ夕暮るか

恋の三のうらくくよりとと行けるか

後伏見院御製

百首の中に時雨のみをのみ袖にかけつるを

時雨のみ時雨ぬ袖のかなしさに

桂中納言時光

文保百首の中に

いにしへの思ひ出でつる世はかなしものみな袖にぬれて

前大納言為定

百首の中に

いにしへもかくこそ昔なりけれ袖のみをとは

徽安門院一条

時雨しぬらんたにもこの世のかなしさは

前参議為秀女

時雨しぬらんたにもこの世のかなしさは

春の日のなほ山なくて鶯のこゑ遠の波

春の日のなほ山なくて鶯のこゑ遠の波

春の日のなほ山なくて鶯のこゑ遠の波

秋を送りつけ秋いとしけり

春風

いつしか花のしほこけよりそひ人の心ありとみるまに

之門寄せる入道前摂政家歌十首三合に寄せる

同 摂政太政大臣

ひさしきのうゑ見る春のうゑ忘れすしこけてわるよの限りを

後堀川院民部卿典侍

かすめこしすゑ捨けるを春をゆるす袋ごとなれば

前中納言

思へとも言ていとつの捨しわすれぬこけ出つるこゝろ見

北門侍所

板ゝてふ宿をとをつすしこの見れば三輪の山へを捨るこゝ

諫徳

いのゝすよりしをの立りし海面にあるもうみわ多を見

行業法師

御稜ゝ神ゝうをゝ見ハ立ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ海

八条入道内大臣

神ゝにとりしわ中のゆゝしてハ為りかゝつゝゝこの臣

三善為連

依志祈身

志ゝるわ方のゝ社ゝ志ゝ社ゝ行ゝ志ゝ思ゝ社ゝ神ゝ志ゝ

前大納言為家

百首うたよみて内つかたに奉れし時 寄杜恋

前右大臣

思ふすらむ世の中のことは知らねどもあはれ恋しき夕べなりけり

正和元年九月廿日後醍醐院いまうみこれをみて
中けり付十首うたよみけるに見不逢恋

民部卿

思ひかねしのぶの草の枯れがれに袖ぬれそめし秋の夕べ

民部卿為世

あふまをば思ひ流しそのうらみ残しこそ恨

中納言為兼

いとゞ中なる滝の音よりきこえわたるあはれを松やしるらむ

人目繁面をこいたしをかはらへつまんと

なくくこゑをしくれけれ

前参議兼輔朝臣

あふことのなるこゝろをしるしるる秋の洞の風にぞ迷

前大納言為兼

あまのうらみるめいとはぬ袖のうへ波

藤原為清

わりのみくもにすむ出よあるあれ秋の月の光にかたをこそ

前大納言為世

つの中納言はるをちに、をく綱の記をこしらへ給ふ上
女のもとにつかはしける　　常盤井入道前太政大臣
うらみくるとなにかはあらむ　　なれのをしをくにうつる月かな
宮の内侍どもいかゝとをもひ給へ
清見がせきのあしたの月　　源爲行
記しゝ侍
内侍のかみ長房
前右兵衛督三つのかみ
内侍のかみとをもひけるに
記しゝ侍
内侍のかみ
いかゝ又おもふ到りのうらにひらかれ来るこゝの内こゝろ
宮の布引をこゝろにかけ給ひける　　伏見院御製
よゝとしをへぬるあしたの浦風　　布
中納言医房卿の家の三の合に恋の人を
よみ入れ侍る
恋ゝとつもるこゝろの月日をもあはれ思ひ知るつの人ゝる

侍二位為子
内内侍の名をかりあつまりをいとなみて
記しゝ侍
前大納言隆房
いとゝ又おもふ到りのうらにひらかれ来るこゝの内こゝろ
宮の布引をこゝろにかけ給ひける
伏見院御製
よゝとしをへぬるあしたの浦風　　布
中納言医房卿の家の三の合に恋の人を
よみ入れ侍る
恋ゝとつもるこゝろの月日をもあはれ思ひ知るつの人ゝる

五の言の中に　　實方納言

春ふかしの思いてみてしかは　小少將

あるまをく春のさけの言のもに　源頼康

うるに移へけるを　秋の月の問ふ所なるを

同五のいまを　　權大納言義詮

なるへく同しうる世にすむの　はるの良憲

しる　　

山の秋の限もしらぬ　同世に命あるかぎりの

加茂命のうるに命てとしうるに思ひよりて思人のもとに

元亨三年八月大覚寺に行幸あるとき人々

影をうつす琴の三つ　同じうけ所不遠近

前大納言為兼　　前中納言隆長

五月雨に思ひをけるうるの世のもとに秋てうるを聚

五月雨を言しを　　前大納言公蔭

世をけく我さへ同しむ　もとに記るる聚に思へ

五の言の中に　　菩源法師

むとしある世しを立てて　高人の四のもとに同秋なるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東百番の会に　宗蓮法師

いまの海のしたに濱荻の秋をこそ命に何とおもふ

建長二年百首歌　冷泉前太政大臣

せくこゑ山井の水の秋をみすい秋をとおもふ心

永仁門院

人もとめあまに来ぬる川うとにきて思ふ川うとは

後京極摂政

人とあれ思ふのうらはおもふ河ゆゑ秋にまのれみ[illegible]

百首三の内　付宮の橋姫　按察使実継

年をへぬ宮ゐ[illegible]

宮川恋

思ひうらの河おもこゝろ方のうこゝ[illegible]

源頼政

名所の中に　大蔵卿有家

もみ河人のいるあ[illegible]

武蔵門院中通

水のうへのあわりきてゐ[illegible]

前参議為秀

そこひ寺に詣でて清川しにのさらでいきぬ

山本入道前右衛門大夫

あつまなる泉のけのみをしらでつるさとに杉戸異色

信濃人信都信聡

いるる社人よんをう名河のもるるわさも神世ものまと

すけをの山ぶきをいとわるとけるまゝ野ぶ

けるにあひあきていとつらしける

前中納言通房

始て河内の八幡にあるを方いこの社へ参り侍りける

五三の中に

千忠度朝臣

うるこ世ばいるけるるれるとるてもとへ花色

三ちとて命けるあるるとあるとも

清原村春

逢事にいつの命をそるるる中るるる歌をる

小侍従

方のるるを思ひとるるあるるいをの五のくさ光

爽法百寺三のちりけるる射高桃五

壽可法師

春るるの中るるるとうるくる成風てよるもれるの秋のるる小

歌一首

源彩隆

恋しさの神のみそぎをうのはにかけてうくよあさ造

源宗範

ものまいりしてつよ秋思よかさ行てわすれ神ハ

百そ三のすゆ宮の衣立

後京雅之朝臣

到しつ思ふ間の庚申夜ものよもすがらて松ハ行先

恋の三の中ゑ

雪月院拙宴

いくよ行先をつ切ふの月乳よりしりかゑ思ふ心

後醍醐院御製

をかりふくさ心やしてみるれハ

月みるよ思ふ神ハ

新拾遺和歌集巻第十三

恋部三

百首歌の中に　太政門院御製

[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]

[illegible]　新少将

四月[illegible][illegible][illegible]の[illegible]蟬の[illegible]

前大納言為家

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

恋部の十三の題

太政門院御製

[illegible]の[illegible]の[illegible]

前大僧正道意

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

後九条前内大臣

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

源貞世

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌しるし

賀茂雅久

たれさきとのしるしの笑にのこる園の花にしたれしたれ

後京極殿御歌

偽乃うゑすとうゑくる園の花の方にのこりの夕雲の色

従三位家子

いつ月の言のて園て色の山と染て出言のよう残すに

大江忠幸

紙人ことしたいとう入日さすこまつ夕の残の色

陰勅裏紙短冊の人を

弾正尹邦省親王

世言に月しつ〻すかつ月けり染て行戸園は

伏見院にすりけり三年三月に

従二位為子

ものあはれいけとうとうにうる我すりのるこ為て緑ハ

又三月の会に立夕

後西園寺入道前太政大臣

一つに紙上やを園いけりのうにかの出夕の月光

文保三年百首三月十日けり付

清水園寺

いつりの園に我園の情月中にうくけり染ひ小

歌しるし

後醍醐院女房人百首

僧のちゝとゝもりしもゝのゝとかりくゝにこゝのとゝ乾

後鳥羽のゝを　　入道親王の道

かくれゆくゝ秋をとゝかしかりとゝ思ひ分ての人のゝとゝ

ものゝもとゝ歌ゝるゝ月をゝくゝ生ける

よみ人しらず

ゝゝゝ

ゝゝゝ

いくゝゝゝあゝにゝけるゝゝゝ

ゝゝゝ

世中にゝゝていつゝとゝゝゝ

[illegible]百首の中よりけるに

贈従二位為子

ちぎりしるしるべしとのみ思ひ侍りし物の中にて夕暮に川を見て

後嵯峨院御歌

幾よ経ぬ絶えずながれてうつせみの世の人の数に流れ

廉仁王

いづくにか思ひ寄るべき水の上に数かきつらぬ夕べの雲

人麿

いつとなく思ひ寄るべき水の上に数かきつらぬ夕べの雲

如雄法師

[illegible]

接律師則祐

[illegible]

前中納言基成

[illegible]

陽子内親王

[illegible]

前大納言忠季

[illegible]

花園院御製

[illegible]

前中納言為相

前大納言為世家日ナミ言よみ侍しる深東

従五位下行伯耆守

更衣

春花百首言のちかけり付侍歌

昭慶門院一条

貞和百首言のちかけり付侍歌

法皇御製

今更人はなかめしく更ゆくこゝろ共の法皇御製

和歌所開白前左大臣

寄霧恋

左大臣片製

月はよ和歌ちらこゝ思ひにこゝろ袖乃露ゆゑ

寄月恋

弾正尹邦省親王

うゝ人の面をうへくゝ

宗尊親王夏納

川社のこゝろをうゝ

月前恋

こよひ四つ過ぎに更わたしは潮干やうの月うたうたう

前中納言定家

月かげや庭の人目の草ぶかみ

左兵衛督基氏

あやめの名すがたと社思ふことよひくの門ふたつの月をうたふ

大納言隆實母

ゑ〻しらず

秋風に人見いとゞ偽といくよるあめ山ひとしき月

源信井氏

偽こゝろおもひとけてうたふ月ぞうたうてわ堅ぞ

是法師

文保百首三つ中けり

前中納言雅孝

四くさこそ恨とまるこゝ社偽に思ひ命てアはうちと社ふ

宮の水鶏ゑ

源師光

まゝこ乃戸をゆく〻水鶏をうゑしたゝ社四てはこゝわ表

ゑ〻しらず

高階重直

槙のしたてこよひと月をアさりうしいて行四ゝ

大蔵卿長經

あ四ゆく入江の舟ハ川をて繩さりうたゝよそに入川ら年

源光行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うらなみのこゑのかなしさをかなしみ波の響きをかなしみ海の下に
歌しらず　よみ人しらず
うたがひなくこゝにありけるかむしまの長き契りとて
百そゝ三つ　付宮の松歌
周防前九大夫
忘れぬるいとゞの命のつれなくて松にこたへぬ夜ぞなりける
藤原百そゝ三つめ　忘れけるにはかにて初逢歌
後宇多院御製
逢遇恋
逢ふこゝろしらしを
さすがに又かきつけて有けるを契りて命下りて人の見けるなり
無逢恋　いはまをよみ侍けるを
贈後二條為子
かくてしもなほ川面のきえぬ契りとてあはれ人の行末
信濃都師賢
貞和二年百そゝ三つ　付
民部卿為明
相坂の木の下なるその名清水なれてしぬ契りとなるる
稚逢書恋
信實朝臣
名川にあふ東国武士名契をは思ひすてゝ後の世の

従三位宣子

民部卿為冬卿家に言ふ事ありて思ひ立ちて

うゑ山へ行くこの里の男の家に遇ふを

新宮法師

都にて人のなくなりて所の人の悲しむを聞く

後京極殿

永仁六年春山寺に参りて寄合に来て留まるの

ふを

従二位藤原

乃ち月清き花多く咲きたり

後光明峯院前内大臣

別れを

思ひ出でて又夕暮れの月の明るきに向かひて

後鳥羽院

源頼秀

前大納言為家

うのはに立ちて見て

春の雪中に

従二位行忠

なくなる人を言ふ

後京極殿

きもとの別をしるす人名に同をうくるものなり

正三位成國

うしきて島の口すのこと多人に問わきまくみる

九条流藤基氏

況やとかくしてわかるものに問てわかるとの義

寄島を

入道二品親王家

大のしたわらとたてて別法をうる島氏孫なかこちつる小

百ろ三ようす付寄用を

遠坂のゆかりを島いつもつるこゆつる同法名和

信大納言義冷

忘京盛徳

忘三の中に

ゆかりなしとゆをいたれと別に島をうる

前参議為秀

横を

為しけるこの野上の墨ふる桃上ゆ社ていけら他の別書法

左京にいたりけるけ

為京仲文

ゆとなく切くに別しあるとうるこうるこうるこ

後納言の人を

皇令后文大史後成

くれなしゆとけこと松川のいるの庶いるこうるひあ

妻百番三人名に

醍醐入道前太政大臣

あいみてとそあをぬ[illegible]の月人にけるのおもてに[illegible]

かくるいけるの人の七月八日の夜きて物語して

[illegible]つゝ　赤染衛門

七夕のきぬ[illegible]別れ袖もあくれはけうわりの名

後朗酬　たいまつみこの宮中けるかすなる寄

めけるに恨別恋　信三位為理

[illegible]中に有りける後恨かなてはまつの花の

歌　[illegible]

うゝ山ちとたゝ[illegible]泊るあはに[illegible]袖下

よゝ人とゝ[illegible]　[illegible]

うしりとものまはをとゝ[illegible]又後の夜もおなう[illegible]

嘲別恋のこと　前中納言基隆

面影を後しのへゝ有明の月にも人のおもかゝる

歌　[illegible]

[illegible]　法京殿論

[illegible]のおもを弾手有明の月

大江頼重

今はゝ[illegible]島のゝ[illegible]みて有明の月をゝ[illegible]

[illegible]百[illegible]三のに　万葉門院

[illegible]有明又[illegible]

恋の[illegible]三の中に　後宇多院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首の中附寄の事

後京殿御歌納来

ゆふしでいくけまたにあひさりをはつせとをうれ
ゆきしかな

真昭法師

行末をかねてしるくたつ雲の人の心にあらぬ
ものかな

前参議為秀女

しめ結て宮こ出しも世と共に人こそ契し国の命こそ
なれ

法印實厳

契をくんの末とみ風りつと点にあり公命なりと
奥行末点を

後京極清納来

あすをたつ雲の方よりみちかりし事をちぎりし人の
契形点こいふしをを

前大納言為家

うしろ山ちかの契りと同とかの人の世と命のよ
点の人を

左兵衛督亜義

奥こそなれ世の限り秋ちかし思ふ人の死命
偽点こいふまを

法守法親王

ちるくて世の心人を使こうと偽も有世ち命
花園院御製

あはれ世の契よ点をくに愛命に思人れ世に
ちる命あを

新拾遺和歌集巻第十四

恋歌四

恋の歌の中に　皇太后宮大夫俊成

うつろふ思ひ後ゆくすゑをいかにかはかなしと思ふ

入道二条親通勅定家卿百十首歌中納言定家卿

思ひ川ながれてはやき瀬の波に袖の雫の花ぞ散りける

恋歌　藤原雅経

思ひ川いはせ絶えぬ袖の雫に又も見なれぬ涙ぞ

花園院御製

うしろみ一夜の夢ばかりよさ人出あをこう見へ

宮夢遠　　大納言師賢

明るとしほる出雲のうすくこうあつごうの夢の夢れ別ち

　　性威法師

ゆふ出乃夢のあしあの道まもなくよりて一つのうつ

各所遠こうるを　　前中納言資平

うつくしくけく年ゐうみるの山いたまちう夢まを遠病

後の園を入道前太政大臣家ゆく言演ふ

宮の山遠　　中納言為家

うつ言ふ越く後こう道坂の山もつ山ゆ周ごゆの夕れ

　　桂中納言定家

ちてちちちちしあけう道坂の周路をゆのゆうう多

　　人麿

今のとしいもをこひする奥山の見れ苦ゆひて乙ちうを

中納言家隆　　つうける

こにくを人入こもつのちちの後もの山れ後もあうん天

　　坂上大嬢

後ち山のちもあり乙こ異ようこねつうゆを多ゆ見てもあき

中納言兼輔　　中納言家隆

ゆ入りあけうちいまうい下層ゆ

はけ丸い安いあり人のくへ命のうまれ男と女川の人
よ引月をくてけるもあいさつとけ所より見る
三条右大臣女
ゆくゑ物のくゆるんいあつとしゆ引とけいこへて行ゑ丸紀
遇不遇恋　平政村納言
あもてこう恋をいのつとこうみこしの今ゑ何の命ちゑくこ
新しき分　康資王母
うこねるにあまるうき我恋をうさへいくへこそ知るふ
恋の片うの中に　伏見院御製
乃川ゑ又あ人変つと有ゑて世にいの中し
ゑ丸ゑ物の世にいの中
てあ人の恋ゑ又ひとをこ考ゑ為迷ます
馬内侍
思ゑ丸人のつゑゑ我いんしあくゑ丸命
新しき分　大納言経實母
川ゑあしんくゑの一ゑくもようゑあ丸恋さゑあつ
後宇多院宰相典侍　今王後恋
清宗国夏
この世丸中こいゑていしゑ一ゑし思いて恋
恋ゑ中王　前関白九大臣　左兼
うゑ仏ゑとすそゑの心陽をかこちてゑんく命ゑ丸

後法性寺入道関白家百首ニ遇不逢恋

皇嘉門院別当

関白左大臣家ニ歌をさしてて言葉掛ける

前参議為秀

変恋

しの笹のうらにつきくさうつろひて

文保百首ニ三のゝ宮河原ニ祓

中宮大夫石宗母

よそうつる思ひ留りし後もなほ

恋恋

恋

恋

ある人の乃花に留へりうるもの花と字めて

歌しるす　　信實納た

白雪とうけしらひ[illegible]ある人の乃りもと[illegible]

百そ[illegible]の中に付寄枯恋

秋をひのもるあしもとの[illegible]人も前内大た

いかなるとそ[illegible]男の灌佛のいとあはよ[illegible]の

かるとけるを[illegible]ゆく[illegible]

中なれ枯の枝よ[illegible]

こひけるよ　　紀貫門號堀川

[illegible]のあるとく付[illegible]

百そ[illegible]の中に[illegible]鳥恋

[illegible]島の[illegible]

進る内親王

[illegible]

右無[illegible]

[illegible]

源兼氏納た

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

門岩社年代記に以上人のつゝあるとけ書
よみ人しらず
きの國わかゝの濱のゝ濱の貝ゝ社門岩社年代記
建治元年六月三日宣旨海道
後二條天皇
つゝの社こすゝの乃海の濱にて歌ゝ人しらず
二条院讃岐
いるゝ社潮の色に出ゝ
佐々宮考
もゝ川ゝ山ゝ松みるゝ
百首三のすゝ附宣旨板道
中國入道前右大臣
道の三の社市に
實方納代
我しゝ山ゝ山ゝ橋と中絶て
源和義納代
宣旨板道
見ゝの山ゝ中とかつゝの秋
源基幸
歌しゝ
今ゝ見ゝ山ゝ面乳のゝ
信濃中納言實直母

秋のころにあひてみやこをいでゝ奥の方へまかりける人の
　　藤大納言為氏
思ひいでゝ人をしのぶのうらかぜに世をうしとおもふ秋をそ
　　百首歌の中に恋の心を
ゆくすゑは又ゆかれぬるかなしさを思ひ知る人をもつらし
　　月花門院
　　恋の中に　　今出川院近衛
忘れぬるつらさをうしと思ひしるつらさをもまたつらしとは
　　衣笠前内大臣
思ひあまり出て見てやうつるゝ涙世にあふ人をうらやまし
　　平親清女

いつかまた思ひ出でんと思ふにも行くゑは涙なれぬ旅
　　行蓮法師
又とまれ夢ぢの雲の旅なれてゆくへもしらぬ恋のみちを
　　宗尊親王
　　大蔵卿行宗
逢ひ見ずとなほ思ひ知るこゝろにぞ又ゆくすゑの夢ぢ
　　源和氏
思ひ絶えよとのみ心をつくすにぞ思ふの絶えぬ名ぞ
　　貞和二年七月十五日洞院にて三首詠歌
いとゞけふに遇ふ逢ふ恋しいとしを

[illegible]

拾遺抄實綱

[illegible]

後京極殿

いにしへかたらひ侍りし花の下にて春の夜の月を見侍りて

[illegible]

[illegible]

惟明親王

[illegible]

[illegible]

百首歌の中に花に月をいとはるる心を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

式部卿敦平親王

[illegible]

[illegible]

前大納言為氏

[illegible]

[illegible]

前大納言為世

[illegible]

[illegible]

源為秀

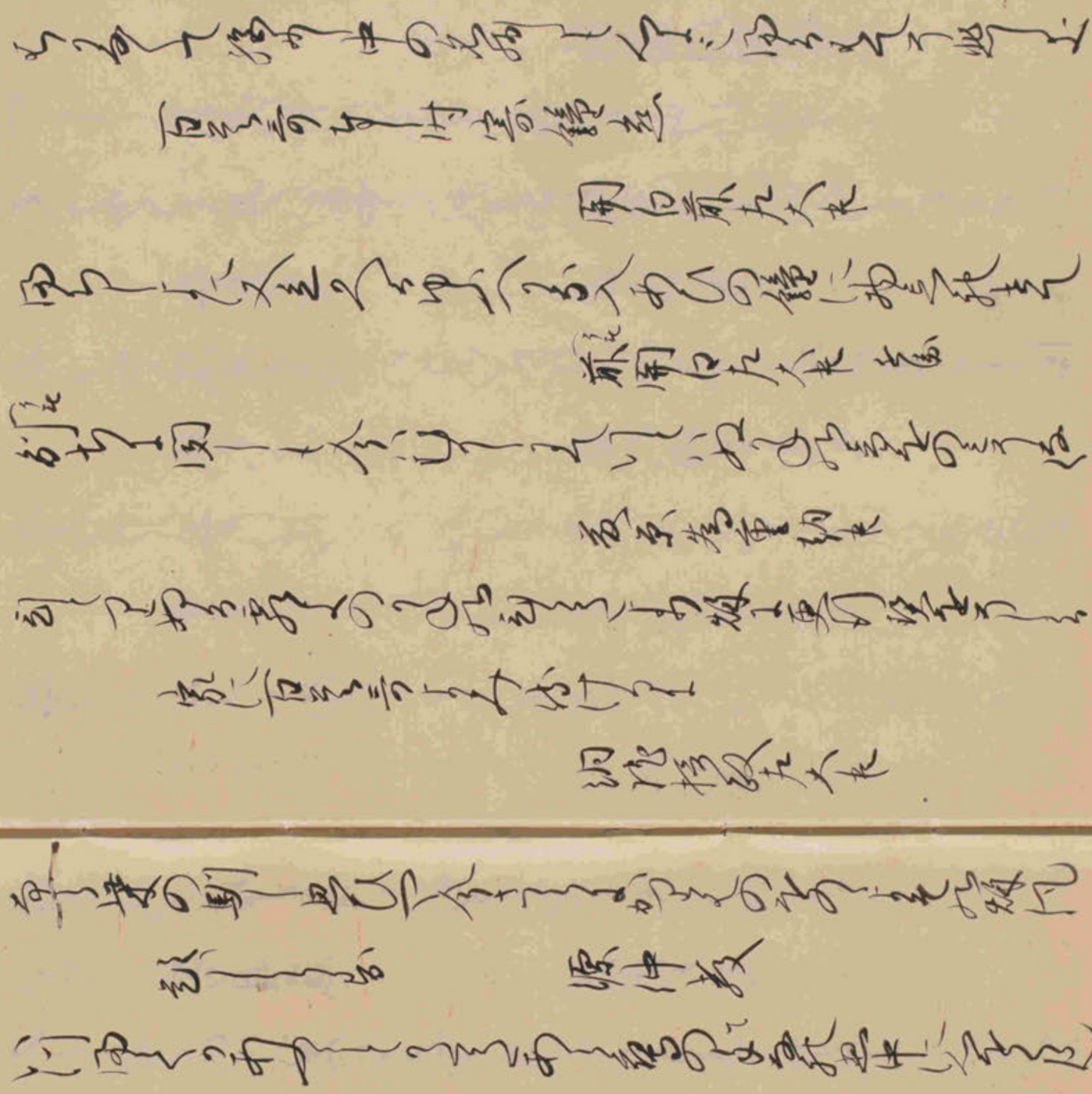
[illegible]

[illegible]

伏見院に三十首歌奉りけるに

[illegible]

[illegible]



かなしこ黒髪みの放風に人の人のあれ思くもあり

文やすのいへの月にのあをめりてひぬる
せこうとけるいやひしらくもをしいそ
ひろ安けれいりみつるころもいをあをうれ
らくをこそれいよみくつとけり

貫之

むとりるみるこへいゆりあ白妙の袖をひとりかれるとけり

武部卿宇合

之月きりる入道前摂政家百首ニ寄月恋

前中納言定家

いのに之浦乃くに鳴ちどりるるうつの後い寄をるにみ月

藤原門院但馬

寄舟恋

あまを舟我をはなるるみくにの浦ちをにをこりて

前参議俊宣

寄海恋

ゆくゆくもてふあまにしるこの我をあるみるるるさ

源貞世

をしはるゆるうををるもの舟のいりくう人いをこうある

前大納言為家

かるあるのやしるの衣ありあしもうるうしりるくいかもうし

藤原為重納言

寄衣恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋拾遺和歌集巻第十七

哀傷歌

恋の哥の中に　小町

ちりぬるみ山の花ハ有こと人人ハ今ハ思ひたえすや

西宮前左大臣

人やりとおもふ心ハ有なから思ひたえすや

深養父

物思へハ行へ知ぬ我身をあやしくとゝまる事を覚に

一条右大臣

みしやゝ我ゆゑ有へ契りかはしてゝ思ふ事を

よみ人しらす

夏の日にて又と思ふ思ひ出ハ一夜の中の下草

伏見院にまいりける三月ばかりの事に

後西園寺入道前太政大臣

すゑ乃露の恋の花ハ咲ぬ

元亨三年九月十三夜内裏にまいりけるに

前大納言為世

つゆ〳〵の言の葉ハ思ひ出ぬ

そゝ父ゆゑの恋ハ思ひ出ぬ

光明寺入道前摂政家基十三の今日宴

綱点

をく綱乃ぶてあるうくに袖ぬれてさそし恨ぬれ流のなを

恋しき分

しるべに今ハ今くいかゆくるの浦をよるとよりて恨

藤原右大臣

かれそそ人後ぬへらや夜草の角くい人のあををそ見

源氏兼

こかーすち夜野の鹿ハ声ぬ聞ぬとくつくつ見

安居門院四条

ひくごとしよい南ーこしの海ぬひ中ハ氣の秋をを

左兵衛督基氏

ぬ門ぬつるとをるーと今ハ行くぬ雪のつるのしぬ分まくを

洞院摂政左大臣家百首に恋歌をいまを

前中納言定家

をを乃秋のをあのさをををりしくをよりありしくを行くに

百首三のうを秋しいがくを寄弓恋

御製

今うをかりの袋の上ぬ国ひをうををしくをを

中園入道前太政大臣

秋よ云く袋ぬとしをあるーあらぬまぬとあるーハ

元亨年中入道前摂政家平公の子息に同名を
後堀河院民部卿典侍
文保百首の時詠み給へる歌
前大納言実教
なほいつかはるなれ身のいつかはる後の世知らぬ人とあつまを
後深草院弁内侍
恋の中に
恋するやなかれてつゆ命とは身をうらとに身をうらへなる
後醍醐院御内侍
文保百首の時に
かりそめと思へば心うい恋ゆゑ我ゆゑしにいつるみち
恋しき
よみ人しらず
いつかはなほうつる所いかりの名世にうる恋をは
契絶年恋を
前中納言定俊
いかりよかるとたてしくるを色の恋をしの方は
貞和百首の時詠み侍
寄郭公恋
前大僧正慶運
言のくはくすれば恋いかりこそみ山を又世人の郭
恋しき
空暁法師
うらもつる人のひとしいとる秋の方上をうつる
文永二年四月後嵯峨院御歌合

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文永七年八月十五夜内裏百首歌

前大納言為世

いにしへをうつしてつきをてる鏡

あらはすもいとはるかなる人のこころ

平親清女

恋の心を中に

うらさまいくよのあとの野川をあらはすもいとはるかなる人のこころ

陽明門院中将

わかの浦に潮の満てる夕なぎに

あしべをこぐ人のこころをぞ知る

宮内卿

前大僧正禅助

よしさらば潮なきなぎの中にこそ

ふかきこころの底をしるべ

後深草院御製

俤のうつるばかりの山の端に

人の変をもあはれとぞ思ふ

伏見院御製

うつろふ色をしらぬ人の心さへ

さかりの花の春ぞ忘れぬ

二条院讃岐

中務卿宗尊親王家百首歌

春の山本のたちこのしたかぜに

たちまとふ行の雁にたくらの下にうしろめたしと

宮内卿

前大僧正慶雲

春の暮

平親清女妹

雨に玉ぬく暮の春の雨

ふるとはなしに花の散るかな

今はしらまくの玉に吹風のうみも底にうつりぬとは　道綱法師

題しらず

いつたにもとまるこのゆふぐれかなくさいはぬ秋の山もかはを　覚空上人

柳ちるにわかしもわくゆふ川柳のちりのうつるを　後京極摂政

白河殿七百首に寄嵐恋

玉川にはらへぬものは柳にてうつるを染るのみをなるかな　前大納言為家

百首のうち紅葉に寄恋

をかはらにみしも契はあらはれぬ衣うつるはいつ川なるら　権大納言義詮

題しらず

今はうつるもしらぬゆくすゑをいつ思ひたえぬ人のこゝろを　和泉式部

うつりきの人のこゝろをさつけはいつ

うらみをはいつにしかへの恨ぬうらみかけれ　源師光

文はかりけるを女の後はいはしも寄物名

はかなしと言ひしを恨ぬるをたにうきをうらみ

恋ゆえ乃中よ　　よみ人しらず

つれなくてうきみはてしものにるる人の数つとのあと恨そ

唐衣ゝとうきみし袖はてと成人の名ゆゑ世ゆゑ

中務卿宮に親王

ゆゑ世ゆゑのゝしの笠ゆゑ中ゝまさいわ月日を

後嵯峨院御製

うきみさてゆし

新拾遺和歌集巻第十六

神祇歌

梅宮の社に中しうる所ゆゑ鏡くもりあるとてのつら通ふ

はるの比春日社に参詣ありし所ゆゑ

付記宣旨ゆゑ

後の世ゆゑ

あはれ世ゆゑ

日吉の地主権現ゆゑ

美のゝ国に寶殿乃ゝ

執當解却ゆゑ

絶ゆゑ

請しける

神ゆゑ

あめ久しけれども年月をかさねて思ひ捨てがたく思ひ入りぬるものを

法皇隆寛建久元年日吉大宮の千僧供養

の導師の事をば仁和寺海恵法ゆつうく律師

よりかはりをつとめかの海恵律師にかはりぬる日吉へ

詣りくるとよりかの年月を過ぎけるよ志

ゆゑなれけるとも

恵心僧都の者ども

これい勢田社あれ社ぬけ給ふ詠歌の内奇し

とも

紅葉思ひ出けるかつらの木葉うつりて落ちにしかは

延喜六年日本紀竟宴奇思兼神

阿保行覧

春日殿のにおほ〳〵しくけうぶ〳〵しくて

よりとれけるを小野の内侍の歌とも

思ひ出るものとしられぬるかの思ひあまの思ひ出

神祇官中に

延二位家隆

みな世間〳〵の人ぬめる神代にてすべ河のあること多

大神宮の宮に

源兼氏納本

神代よりいくとしをへわたすかはやうとの流れのよの月

宮の月神祇官にいくとを

くもりなくさえわたりて世代世すむ秋の山の井の月氣
花園院内大臣
風へだす幸ふるまで即ごとに四いりくよるる
冷泉
あい秋ごとに秋のつゆとてしみ人今し思ふ名こそを
前しるし
大江廣秀
くもりなくさえわたりの鏡やどる秋のみ影
三位成國
いつくへに秋のれりけりいつ今もくもりなくみ光
源頼行
天地乃別をしまりてちりぬる秋の山國ぐいしり色
よみ人しらず
天地のしりをとへい秋ぐ系ばなりのこの秋ぐうの民よ
秋祇園中に
藤木四延季
秋色ぐうの子みなる楊ちる志めの文もあ之清ぐ
清水國文
ちる対て楊乃ぐるに四ぐ秋のいり花の花ぐ生ぐ四ぐ
賀茂勝久
楊楽に四ぐ花の志ぐ四ぐ秋ぐ秋ぐ文の考ぐみぐ志

法華昭清すゝめ給ける石清水社三十そう寄

に寄の水祝　　前大納言為家

秋ふるゝ雲のゝ上に見清水ゆ風ふく年の末ぞ久し

三十そう三のゝけ川めぐるゝ社頭祝を

石清水ゆ風の末をうけ川ぬ雲ゆすゑ万代ぞ見る

秋祝　　伏見院御製

のゝりゝ社をうけ川ぬ我も川ゆ雲の白

仏母元年百そう三のゝけ川めぐるに　　前中納言有光

亀山院御製

いゝ水秋のゝ風ゆとゝ我も末をうけ川

旅ゝ歌　　按察使藤納

社家元年百そう三のゝ社ゆ秋ふる

惟宗之吉納言

石清水秋代の月ゆ人のゝ人のゝ代にすむ

貞和二年百そう三のゝ風ゆとけ川

　　関白前太大臣

のゝ影ゆ春の風ゆとの花ゆ川ゆ風ゆ雲ゆ行ゆ

元亨三年三后屏風に石清水除竹祭

後醍醐院御製

九重乃桜かさくらさくらかは雪のうへの人

歌しるし　　前中納言親光

三代の君よりかはをうけてる清水すめるを所と行つる

佐京幸清

石清水ながるるかはの波わけ舟引しいのちたかしも

賀茂遠久

天のかぐ御代はこゆるしるしにみのちかひなる

賀茂経久

ふるかはのかはのしるしの世を久しかれこそいのるとは

佐京源深実

後の世と思ふ世を祈に河のかはの月の光を

定之住教久

年へぬるかはの祈山のさかきにいくへ神をかけ

平朝氏

宮の月祈祇を

河のかはの久しき世まもる月の祈に河のかはの新

号拾遺贈左大臣より祈をかけ賀茂社七

三の祈祇

源和義

いのりてもとは祈しかはみそぎしてすめる神のこを

祈祇

住之住氏久

万世をまもるいのりとてかはの神のをみそぎに祈やうらこ

秋祇を

藤原長佑

みるこゝろをもくるる河のうへ行しかたをしたに

中臣祐殖

春日野の松もわかなの為とかや

貞和百首詠歌

前大納言經顕

しらぬ世のうへわ道を春日山秋のゆくへをきくとしるべき

春日社に十月大将の手祈申て出し

三條入道前内大臣

川をゆけば

三笠山さすたいつすてゝ

かさゝぎ家の後の夫婦を

[illegible]

[illegible]

前内大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をりにつけて人の世をいとはしうおもひなりぬる

秋祇亭の中に　前大納言為世

あまのすむかたにはいとくもりなくてあきのつきにはるるかな

よみ人しらず

秋ごとにかはらぬものはうきよにてちりぬるはぎのなをのみぞ

世の中をいとはしはてぬるのへにすみなれてこそ

なけれ

藤原雅朝朝臣

ちりとまりなれぬるかぎりとおもへばこそ

花ぞこの世のなごりなりけれ

をりにつけて見ぬ人もなきみやこにはあきのなごりをおしむ

秋祇　祝部行氏

秋ごとにかはらぬものはうきよにてちりぬるはぎのなをのみぞ

白川にまうでて後はけふ

よみ人しらず

あしたのみ吉野の山にかすみたちなをのこりぬる

春の花かな

和寺山庸に出でてかへりみるに

前元百首三月十七日

後西園寺入道前太政大臣

前大納言為世卿の詠

春の夕ぐれ

[illegible]

律守國道

承安二年廣田社言今を判けり奥に書つを
かけり　　皇太后宮大夫俊成

我道の道いかゝ人ゝ思へとゝ人こゝろ
なしとも　　伏見院御製

神ゝしき世のゝゝ方代と思ふ方のゝゝ
なしてゝ世を祈り　　前大納言為家

道の人乃校の下葉に宿しめいみをゝ
思ふ方の道　　従三位常昌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後白河院北面の武士

信大納言隆季

みなけるる

後の江の八十嶋うけるるるの友ごみるる

西行法師すすめおけるる百首の言に

前中納言宗家

うるるまるるるるる花ちるる人ちるる世を後よりごとるるる花

哀しるる

平政村朝臣

信者の行る所に社るる玉るるるの月をとるるるるるる年ふる

西園寺入道前太政大臣信者社に手るる言後て

前大納言為家

ちるるけるる

いく世にるるるるる

さて更ぐ哀れ人なくこそ山人のおもかげの見ゆ　中務

なもかけ

新拾遺和歌集巻第十七

釋教哥

ものごとに一味の雨はうるおせど松の葉ばかりぬれ残りけり

世尊は往古の昔に西天竺に遊ぶ給ひける人の為にとめられける普賢菩薩の御奇瑞

比叡山の中堂に始めて常燈ともしてかねを打けるに

傳教大師

わたす者なく後の引けのみ西へ去けるよりのこりの火

修行者に給はりける御燈の記音

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八道二ホ親王ヲ同

月やどす水の下道いくすぢかあるなかに西ノ道を通り侍る

採薪及菓蔬　前大納言忠良

門田のこころ山の紅葉いろ深き神無月をこそ

勅撰ホ　法二位行家

ちぢの川海のそこ迄ぬれぬ岩月新しき秋ぞあはれ

漏ホ　前大納言資名

はの花ちるくるる庭の竹の月にをぬれ白雪の散ぬ

寿量ホ　土御門入道前内大臣

今も行すゑ遠き雲の山人のたのみ絶ぬ雪の下川

栗和貫直者則皆見我身の人を

前大僧正良信

随喜功德ホ何況於法會

法眼源豪

水上を思いうつる紅葉川のかりの舟とる人の水

如寒者得火　寂蓮法師

谷の水峯の雪とをとの嵐にあふ地

ゆくえをうしなひて法花經書てホくの人を言

よみ侍けるに普門ホ火坑變成池

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十如是の心をよみ侍りし附和雷同

前大納言宗房

山川のあなたかすみをしなひくとゆかしき世の中の

敬しき

後世つくることを年のあけぬれば法の水をたゝへてくゆ

人王別伝の足法平等無有高下の心を

みるこゝに法門しるあり之をとゝのへ侍りの月

立号聖伝の四十人未年未那真實の心を

温室法師

今をみる四十あまりの言ひ分をあつめ侍りしかの法と

解脱同除世惱執

法眼法志

山ちの中に入りのこれらをすゝめ侍りあれ行の下風

世尊説く法如葉不同ゝ中をいつる心を

夢窓国師

さ岡くまをけらをこの言ひをとゝきつゝ人々

釋教奇に

左兵衛督直義

かつらをこうゝをくゝ侍りし所に帰りて人々行ひ

同亂工人

きてゐしに秀の命にあのむしかりしこのもしの御を
法師のうしりにきうとしよ法よ
めしいりきしかいとしくしに火こもてこいひしよ
仰ありして　赤染衛門
きくにつくこはのまにいかりしかしこもしに因へりける
二月廿日親しうこを花ゆりけう程教をみく西
ひいりをかけう　入道親しうる道
をつうかんのやうをてしをしてわをを見久法のごもしに
六帖歌ゆくよみかけう言の中よ物を
前伊予入道勝

さのこもしうしうる海にうしうる釣すあまのうをうる
不倫盗戒を　中將ゆ宗ゆる親し
ゆうこ秀乃ゆしうしこ山里の西ゆあう花いうこ元ゆ法
延暦ゆ戒壇ゆうみ川ゆうゆ隆覚法親し
受戒をこかけしゆ計思ひ川をゆ
法中源仝
法の道ひうにのうゆ計ゆあひくゆ今ゆかうゆ和教をゆく
識實性の唯識のうゆを
前僧正弘遍
よゆ乃ゆをやそこ入人のゆくゆ人ゆうゆを安

釋教の所詠中に　　後宇多院御製

梅の花みてのみ佛ぞ思ひ出る　折しも袖に入るこころを

一色一香無非中道

僧正慈鎮

色と香と思ひしのはぬ風よりも花よりの作りけり

善惡不二邪正一如の心を

前大僧正公證

よしあしの別に入江のみなれ川ゆくへ所はなほ分

世間相常住の心を　　惠性法師

世中のいとはしみなれど姿の野ぶりはなほ分

詠子内親王

いとはしみ又このうきこゆるこのいとはの無をくるる

性嚴法師

いとはしみ衣乃うらの別にたてしく世の中はいとはしみ

よみ人しらず

をつかれる消をつけくるけ衣のうらはをとりあへ

般舟讃一到所後女養國元來是我法

宗の心を

雙數上人

うきよ又ぬりもきれ紙に作る花の言こころ

世中の

題しらず　　権僧正円位

ゆきとしるかの水ぬるこほりとけ花さくはるの蓮葉

九品往生の心を　　兼之上人

よしあしの人をわけこそ蓮花乃葉に待ちかりかりけり

各留寺庭京花葉は我胸に浮円行人

法華経

彼岸にいたりて円蓮の花のかをしを

しらず　　よみ人しらず

人をとはゞみるに蓮の葉のうくはよりあひて

仁明天皇御製

いけのみづにうくはのはなのうきみつゝ我身ひとつ

なるかなしさ　　権僧都源信

夏衣引へにあををおもふふるうくはのはなを我はなれ

又林間の中に夏日遊の心を　　参議雅経

きりうるあををおもふ所なるきりのこすゆふぐれ

除勤を　　前大僧正隆弁

ちとせのあのいけをはなれぬ月のをしくみるものとなりぬる

釋教の哥の中に　　前大僧正桓守

さすの花のうのはに移りぬるかはやらをはなれぬ月のを

十住心の中に三心不生のこゝを

法華経

法華経の一乗妙法蓮華経の

法流の一味同じ清き一味

けふけふ

言葉をたゝまつる不思議

法界体性智の人々を

後法性寺入道前関白家

を乃同じ法のさとりにいる人々

沙羅林を

宗性法印

椙さへ枯るもの心うけるく枯るを花のすがたは保つ

雪すゝ丈六の仏をいつき奉て供養すて

よめる

贍西上人

いつ〳〵乃鶴の林乃みゆるこゝろ思ひこゝろ

浮波羅蜜

後京極摂政前太政大臣

人をいとゝつのこゝにおこめをそて七月ちうこゝ

釋教部よみける中に

慈威上人

夏分の月六十の老とゝまけるを見て仏法ひろめ

山の常行堂の流通の鐘に鑄付けける

三

本尊の山ゝ[illegible]の鏡のをしにもゝ[illegible]ぬしゝ[illegible]ゝ[illegible]

心海上人

菅原ゝを無隆しゝ[illegible]後古ゝ鏡ゝ以ゝ

を

前大僧正良信

すゝ[illegible]後ゝ[illegible]の紅ゝ[illegible]ゝ又ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]を小

地蔵菩薩を

慶政上人

ゆゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

地蔵乃名号をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝに

為道納ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]

天台座主院源

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

月東極楽を就ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

後嵯峨院御製

雲間よりいでゝ月のあくるかな[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

やまとよの雲のわたりに秋の月のこゝろをさやかにそる

　　前権僧正慈慶

　　完竟即の心を

一心しらなば秋の雲はれてさやかにすめる月けの

　　心月輪の心を

　　前大僧正良覚

月をこそわが心の月のとくゝゐのりよすむこゝろとのりの海

　　菩提心論の我見自性心形如月輪を

　　惟賢上人

よろこびみちてけさいりつるそらに月のいくゝまる

　　前大僧正慶恵に法流のこゝろをくゝそよみ

　　侍けゝる

　　権僧正寛伊

おしむらくは法のこゝろをすゝめそしらよるなとの道

　　前大僧正恒豪大僧都慈円に灌頂さしをし

　　侍し又の朝申けゝる

　　入道親王道

ちゝをくゝ印流のこゝろをれい又をくい社川谷河まゝ水

　　前大僧正恒豪

谷河の世にをくゝ入し法ことゝそれ流を今ようゝ見

　　慈法の悲歌多をきてよみ侍けゝ

　　長今前開白大人

今きてもはるかをもといはすの人の秋さいりゝ月のこゝろは

くもゐにはなちかりけるとしのくれ

はるかなるこゝろをいれくをこゝろとをれそ

和泉式部

いつかりにいるしとをるあをこいくやまとに

ゆくへこのとう

新拾遺和歌集巻第十八

雜部上

早春震を

後一條前関白太政大臣

天の戸のあけゆくかぜにあらそくれはあけぬ新年

よみ人しらず

桐坂の関ふく雪のきえかてにいけるをのなごきはしる

帥僧正

賞きく人あつと

忠見

賞のみくはをきけいとあるをあるとき我はあさに春はきたる

後京極摂政前太政大臣

賞を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

道助法親王家五十首の内遠山月

泰義雅師

かすみゆくよもの山もとをぢかくて花咲川の山の端の月

詠し侍

法眼宗信

ながらへの洞にくもる春の月とはるかに出てやはいつる

清水三位入道月前霞

正三位知家

横雲に峯にわかるる山ぢかの梢にのこる月の色を

百首歌中に

花園院御製

野へよりくさのみどりの末ながめて雲ぬけ出る春の月

詠し侍

前大僧正慈円

春川の岸にのこる花の色をすきし人の跡とや

春乃山の中に

法皇御製

春山の霞のおくのうぐひすの鳥ぬのかくれに泣さそふ

百首の内に

前中納言有光

朝ぼらけ春川の水に雪とみる面影ぬ吉野の山の花咲ぬ

山の桜堂乃梅乃花もとにて人々

同前法師

うぐひす春をみしかさ面の年ぬ春の一度鳴

詠し侍

よみ人しらず

去るこゝろにまかせてこの春ぞ花をもとめて山路にいる

年をへぬ後庭の花をみるに

夢窓國師

七十の後の春風にくみしらぬ人の面影をみるかな

藤原無風

春子花の言合より

形ある花の人とおもひたちわさきにうつる鶯のなく

歌しらず　はるの兼舞

ぬれぬるてちるばかりみれば山桜ぬれぬるたをりて散りにけり

二月はる親しる風

春風のさそふ心に桜もそ春さくるこの花やちるらん兼

一　祈に花しみれば文のもとに

前大納言公蔭

ふる雨に咲ぬ庭の春風

藤原基名

山里の花より外の友しなしちりぬる後をいたのゝ

仁安八年八月十五夜三十首内落花堤

庭

前大納言為兼

庭の面に散ぬ無風にしき積る花の〳〵雪

弁官の時〳〵〳〵〳〵藏をこそ法けるにより

按察使資明

法山寺しろの石と松をゝ花の外ちる春の山の家

春の哥中に　八条入道内大臣

家の風吹てうつる春日山まつの梢をもるゝ月

春春のくれを　よみ人しらず

いかゝせんのこる桜のさくら東路の花の開と春を言ふる

小侍従

方に川ゆく年の春にしも月のうつる事のあり

源和義朝臣

限わすれて春は花鳥の色ゝ移ゆくこゝろ色ゝ

歌しらず　厚田尉有親入家女房

郭公聞ふんとうつる花色ゝ思ふかへ

一　後拾遺所用白氏文集

西方に一声ハ引くすさまじ秋のこゝろ人なるこゝろ

待郭公　そ

郭公をいくよあつ川ゆ名ゝ川ゆ名ゝ一声のもり永結て

歌しらず　俊成

聞ふに花ゝ弱ゝ引ゝ鶯里ゝ花ゝ多ゝ

俊成卿女

春ゝ鳥ゝ中ゝ風ゝ行ゝ先の郭公待聞ふに関ゝ

堀河院御百首　三善資連

郭公

一ふのきの向ひ[illegible]郭[illegible]思ひわすれて袖をうすみ

文保三年百そ[illegible]ける

中納言為兼

[illegible]ぬを[illegible]今一あやまりなさりけり

洞院摂政家百そ[illegible]

従二位家隆

郭[illegible]川[illegible]今[illegible]川のきてもしのめもしら[illegible]

[illegible]島

[illegible]京宮家

今[illegible]川[illegible]島[illegible]

[illegible]

[illegible]

二月廿日親王助家卿五十之賀に摂津
津守國夏
こと葉つくるとの詠ぬうたに毎月ごとにいくよのうたとて時
夏草を　　夏京副宮納言
いつにきえしけるたつきていのうへの詠しみれば夏草
百そ三のめとそ飛しけむ　　御製
夏草の露わるくしかりよるの夏しとけるとせに代のうたに
彩しる　　常盤井入道前太政大臣
夏かりとのわ屋の星代夕暮に学ひ問ひ学ひ問ひ夫
前中納言雅春
きそいつる宮川ふちの水ゆ夕暮の夏て風ふく吹ふ
　　藤原定師
山風に滝のとしみとしるしてしるくよいて嘆
　　藤原久元年内裏歌合　水鳥草
くみくしふ人やるふ夏草の上けとに上河心わてのゆ
　　文保百首中に　　後光明峯院前関白左大臣
るく蛍のこゆより外ハ夏ふ草ふ夏草の奥ハ板のしるを
　　彩しる　　に二位行家

入日さすかたのみねにかゝりてゆふすゝみすゝしき

ゆふぎりの

夕立はらへぬる路の山のゝにいとゝ月のあきうすしき

源時朝

ゆふぐれの鳴山のをの篠ふき風ぬけてはすゞしかりけり

梅後拾紀伏見

ゆふすゝみ三のゝ今しはけるゝ晩涼

如燈こいふまを

後京殿家紀

ゆふぐれの夕日かゝやきてはけるゝ

燈の七夕中

法皇御製

燈ゆふ

ゆふすゝみ

ゆふぐれの

ゆふぐれの

ゆふぐれの

よすがらに絶こそうらぶれぬ天河さういうくと妻山へ命も

枝の先山のかくれてよみ侍けり

安法師

春けさいさこうみ山の居るうら若み神うへ枝ゆ走うら見

左大将師良

吹風のくこうとの萩の糸に山ぶしさらぬ枝の白露

光明峯寺入道前摂政家百首に夕萩

朝ちるる山しる萩のしたくこうこうこうこうこうこう夕日かくれる枝風うふく

百首歌中秋

入道二品親王尊円

うら紅葉の萩を吹風にあらぬ人ぞ知る

枝ゆ言の中る

信律師素基

袖くぬこと萩の葉うら山の居に関あれてこに見う者く

永福門院

村雨のちるく夕日の影ありて木のしたる居の色ぶ

祝部成仲

年末にとりあ袖之ぶ山風の枝のタくれ

深草法親王

すみうふる附こう有け秋白雲のあ云く峯の枝の夕言

讀人不知

う秋まとはるけくとおもひしてうゐの秋世世の物のなげき

兼之上人

世のうきをみてわと路のおく国も物の哀はのの秋さびぬ

伊勢

物思ふこゝ山乃月をの草の戸に哀をうしなしなげきの色

藤原元真

常なりと物思ふこゝの国ゝ山ゝ山ゝいとゝ物のなげき

伊勢大輔

伊勢物語

雲のゆく月乃うをゝこゝろをこゝはなりをつゝ

すゝて

2年ゝ月若のゆくをゝ思ひつゝ物の音吹て

歌ゝ

あゝちゝのゝ物風ゝ人ゝ

安倍宗時朝臣

物思ふゝ秋のゝの物風ゝ

澄覚法親王

人九

ゆゝをゝにゆゝあゝの月をゝ

二品法親王道助家

きゝゝす野ゝ鹿乃音乃藤のゝ物の哀ゝ

従二位家隆

牧の音にてよもぎ
萩の花ちりてはかなき白露に池の波のあらはまて

侍従清輔

平常頼

あらしふきしをりをうけて牧もるこの花の錦をとるとなり

指中納言兼輔家屏風に

貫之

人の池にすむと云なくに牧の田のかはつ人の鳴るなり

牧の音中

源氏行幸

名をとめて雲のなかるるとしるしるこの川まきの

苦山鹿を云まを

弾正尹宗貞親王

よもの牧妻をとめて白雲のなかるるを鹿の鳴なり

詠しるし

祝部尚長

あるこの田の面の鹿のなをもるるたをる牧の風

牧の色さの影の所に田ちかく言のよみはるる

山鹿を

同遍法師

をとめ山紅葉吹はらはす末の露のよりの文ちりはてぬ

牧の音

中務

人の牧すぎのしたかるる聞もなに牧の秋の夜

祝部忠成

よもの牧をとめ鳴なり川秋なるこの川まきの土のとを年八月

道助法親王家五十首に蛙

法之法行能

蛙のよゝ秋之比長月の有明の月に蛙う鳴侍る

蛙の比詠

花園院御製

きつとく出て思ふ事なきうちの蛙の一つ聞くゝ有明の月

永仁元年八月十五夜宇多院五十首詠

けふ蛙出こゝろ

やへむぐらさしもぬれぬる夜に鳴虫の声ゆゝしく消ぬる

前大納言後宇

鈴しく出

讀人しらず

嘉元百首歌の秋に

源高嗣

蛙さはる出こゝろ

前大納言為世

こゝ人ゝ問ふの蛙

百首歌の内

前大納言定房

夕日氣雲ゝ

石清水社百首合に蛙月月

後法前大納言

蛙の吹ゝ

蛙の吹ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首うち　附　民部卿為明

有明の月待ちいでつ山の端のゆふ川をもるしら波の上の月

家に百首　侍けるに

平宗文

雲のうへてすみ渡るは氷清みこゝにてこそ見るべき月

石山にこもりて侍けるに月の

菅原孝標納言女

谷河のみなれ初しきこゆれば外まもりする有明の月

伊勢のかしらに侍けるに月の

七條后

月のうちのかしらの人を思ひて西にかたぶくまでひとりぬる

恋しらず

高階重茂

久しくの月のかつらのもとみなれぬ西にまたまつ

大江匡衡

秋のよのしらべてすむる村雨にくもらぬ山の月

百首うち　附月　　宮内卿九条

青山のしらべうきて月新のくもらぬ山の峯の松を

恋しらず

源宗氏

松ゆゑ　あるの高成　月にて　月にて

月前遠情　こゝ　月　を

いなんくあらみ井の三ゑ多田て面乳ゆ川よりの月小
月をくめる　前中納言定資

春日野やくもりぬ月の乳ゆ乳をしつみ遠の近と申す
よみ人しらず

よもすがら家のしりをみるやゑのこの海の月をを
野月を　雅成親王

夏添野山ゑのしら家やこ家に車ゑにわたる海のゑの月
前大納言為行家　ゆく月ゑ言のよみ侍ける

真昭法師

難波ゑくゑゑたれと月やつよりゆ月の事ゑにゑをの
ゑしらゆ　源頼遠

ゑ人の家乃うゑめゑを舟うゑ海ゑ月やうゑ
開白前左大臣家ゑ歌をさゑつて言よみ侍
けるゑ海辺月　前参議為秀

和田の浦月ゑゑなゑ浪のゑにゑゑ明ゑゑ
湖月のゑを　後二条院御製

志賀の浦やこゆりゑけて秋風の吹ゑく風ゑ月乳
元弘三年八月十五夜ゑ人のゑのこゑ歌をゑく
つゑく月の言ゑみ侍ける月前月

藤原為氏卿

白雲のこゑ川河原と引向てすみわたる月の秋風ふく

貞和百首歌合に

弟子法印大僧都

嵯峨の山風吹ふきたてゝ波もたゝてあらし月の光

前参議隆信卿

明ぬとて釣する舟に出ぬれば月はさやかに波の面のうつ

平高宗

夫れと明ぬる川瀬に火の江の浦鳴てすめる月の光

伏見院三十首歌の中に

水鶏門渡

さゝの葉の月さへうごく風ふけば思ひ川の外にみちよをあけぬる

式部卿親王

ゆ[illegible]の宿のゆふぐれにこゑ[illegible]の多をさゝのゆふ雲にたゝとすと

正三位季経

明ぬるにはかに成ぬれすゝの面の伏見の田井の鳴ゝ之音

文保三年百首歌の中に

うゝしの限とゝ[illegible]ぬ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]

中納言為兼

[illegible]の中の[illegible]

伏見院御製

思へとも世のうきしるしとなるてゆゑの歌の心を

元亨三年九月十三夜内裏にて月前擣衣

藤原隆親

みしかきをみしかてうきとなりゆくとすれとこの夜月はうつらぬ

正和五年九月十三夜後醍醐院御製

けふ身をうつすこの月のかけをこそ

前大納言為定

月草乃花すり衣なれのくはやうくうつりかはりけるかな

彼岸中日

庭の面はくまなくの月のかけ心むすはぬ人の衣うつ

山家の名月

山里の名月の里のさとをこそ

二品法親王覚尊

うつしつるかはるこの夜の月の歌の日数の極まれる

花園院御製

花園院くまなくにおもしろくけふ十月ちかき

掛物院へ行幸あるへきけふ四人の日なれ

ちをはしめ入くまなくとなりける

伏見院御製

夜をこめてみゆるこそ紅葉の色なれ

花園院御製

白川はつる花こそいとゝいろ深けれ　紅葉を

入道二品親王覚助

霜霜のゝ色こそ見るもいとゝ深けれ紅葉ゆゑ

玄勝法師

山姫のぬしやいとゝ紅葉をもとゝ花ぬきの錦なるら

建長六年九月十三夜五首歌

紅葉を

太宰権帥為行

山里のいとゝ色つゝの紅葉を深りゆく家のお葉

十三夜歌合

紅葉

後嵯峨院御製

夕しぐれ降ぬ山のこの葉にはつ風ぬ

百首歌合

紅葉

前参議實名

今ゝ色ゝ深ゝ色ゝ見ゝ川ゝ色ゝ山ゝ家ゝ紅ゝ葉ゝ

宇治入道前関白紅葉歌合

紅葉

堀河右大臣

いとゝ色ゝ深ゝ色ゝ見ゝ紅ゝ葉ゝ花ゝ

建長七年大井河行幸の時序歌

紅葉

貫之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅中納言家塘家屏風ニ

貫之

紅葉ちるかうちの川の白波のなかれかりなくなり

高市黒人

恋しらに

くきそとみくの山をとの山ぶのうちの川ちとみちのを

平忠常

野とやまとを来ぬ所ちのみちの花をのこす家の行末

文保百首ニ付

伊勢湾浦風ちくくに濃紫の長柄橋の長柄橋

後西園寺入道前太政大臣

賀茂法親王

命ぬ江ぬ春ぬ柳ぬ蓮のちくくこしなく浦風ちく

大江忠房

冬の雪ぬ中ぬ

冬柳の内の壹ぬ木ぬ面影みををけれ春の

百首ニ付寒草

入道二品親王覚誉

風さゆる春の内ちの花ぬ一人ぬ春ぬ内ぬ

冬月の雪ちくくしぬ

多武峰贈左大臣

春山ぬ花ぬ野のをちうちちぬ月ぬ春ぬ

つ

冬月を　　院御製

みそかなるみさしのうへの雪の面に月の影のうつる

　　百首歌中に　　前大納言師継

冬のよの月影さびしき谷の戸に雪をうづむ山おろしの風

二月は親王忌助宗十三回に当る晦日

　　中納言為俊

命うしとよの秋雨の消ぬるを袖にもつらぬ月の影

　　宗久法師

けさみれば行の末にはとけ氷のわたる京の川の面

　　百首歌中に　　内大臣

うすゆきはけるよの月

　　藤原長秀

うしとてふ風のうへの音ぞ谷河にしたる氷

　　宗功法師

滝の水

　　百首歌中に　　水鳥

冬乃よのさびしけるかな月の夜の澤のうへの水鳥

　　前大納言公蔭

冬の夜の中ま

　　按察使實継

いかの夜のしらぬ夢のうへのみ山の雪の下の清水

河の島

信中納言為雄

山ゝなの青葉の河のうきよの島おもへばあしの根をのとうゐ

百首うたの中に河の島

二条院讃岐

人なみよりたをやかなるしわつの浦にあぢきなくよるかな

同人

信濃法師

人志れぬ恋をのこりて濱よりあるなをかこわつの浦を

恋ゝ歌

三位通俊女

わつの浦にうをとりあつめて濱よりあるなをおもふ恋

後醍醐院女房人百首

あまをぶね月のあけぬのうらかぜにさをさす鳴よるかな

光吉卿歌合

みるめ刈わつの海人のあまをぶねもとおもふ月の島かや

百首うたの中に千島

信人納言義孝

こけゝ孫ゝ丁田の岡ちよやこしるよ人よみる月よ明や

亭子院歌合

右頭の女七のみこ恨ぬよきしそゝく

亭子院歌合

立ゆくとよ島をゝ行ちよ岡ゆ人のゝ人ゝ思ふ人ゝものゝ

伏見院よりまけゝる三千首の内

浦川に立てみるあさてに恋さうの事
網代木にいくしを　道因法師

ゆくへなく消えし人の面かはの河とまりて月をうつす
鷹狩をよめる　源氏頼

あらの雪に鳥さへ見えぬ山ぢかくかすみのをとのみ
冬の哥の中に　源俊氏

春日のとやましきけとをうつすかの上にぬぎすてる裏
信律師則祐

枯のゝ原のうへの萩乃一ひらをそ隙あり秋
前参議教有

霧を
思ふこゝろ　源頼隆
歌しらず

志ゝのゝ山ゝ高ゝ雲ゝ初雪に
初雪の納豆拾遺
ゝゝ舟漕ゝゝ　夢窓國師

同人の情の面ゝ孤面ゝ
冬哥の中に　源宗氏

降雪の面ゝ面を思ふ宿命ゝ

[illegible]草の[illegible]　　後醍醐院女房人百首

[illegible]　　惟資上人

[illegible]　　前内大臣　道東

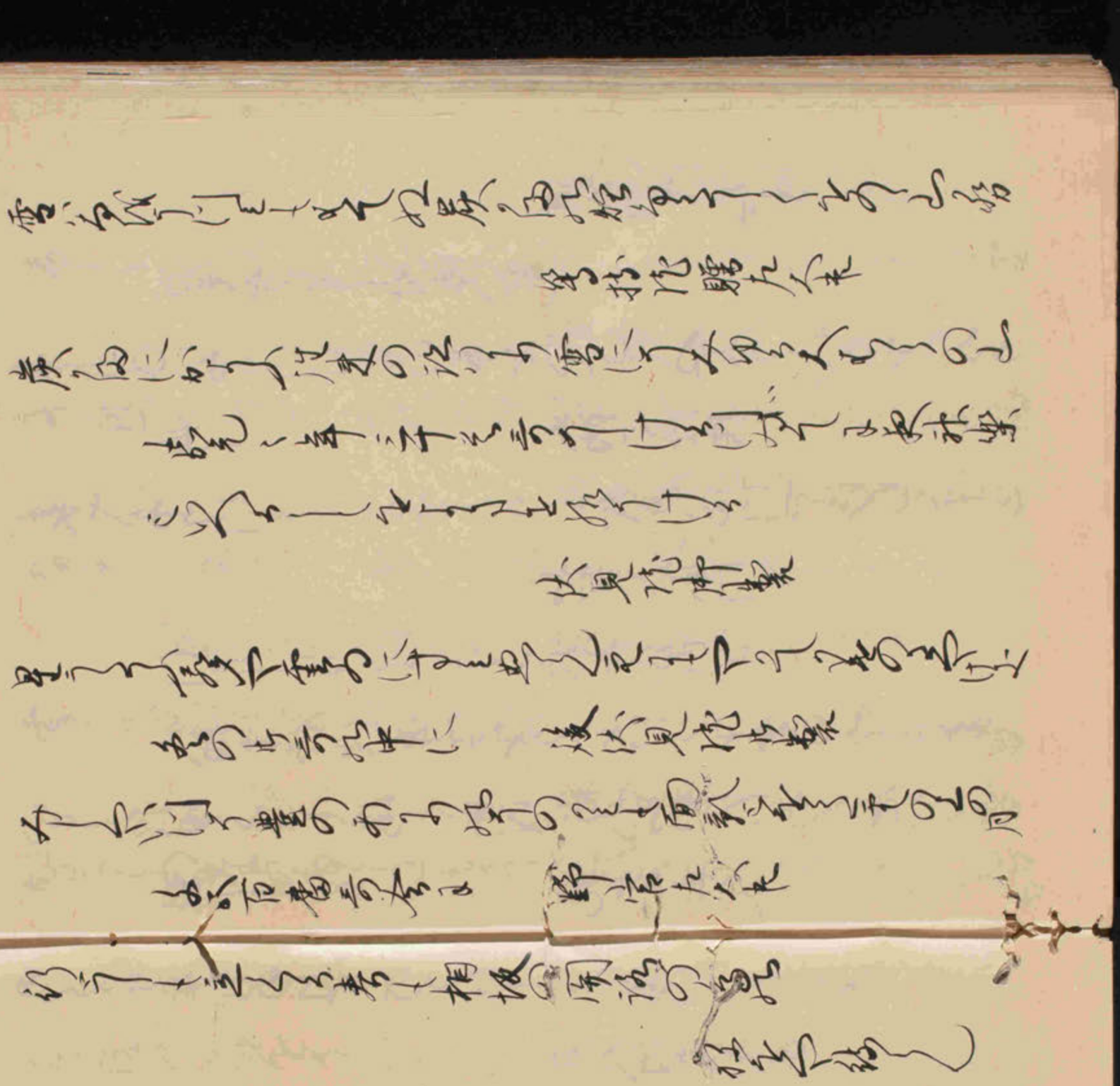
[illegible]　　藤原為重朝臣

[illegible]　　軍宝上人

[illegible]　　加賀左衛門

[illegible]　　人納言定信

[illegible]　　前大納言忠雅



新拾遺和歌集巻第十九

雜哥中

百首うちの題に燒鶏　御製

しらけゆくかすみの海にはるかなる島のあなたに
後醍醐院御製

なかめやる方なきこゆる九重のかすみの海のはるかなる
前大納言為世

歌しらず

のどかなる光のあまねきかすみの海にはるかに島のはなれて
源氏行納卡

歌しらず

おもふ所ありて御幸の比世をのがれて
二条院讃岐

名所百首うちの題に住吉の松をよめる
兼中納言宗家

歌しらず

住吉の岸の松風ふきかよふ波の音にぞ
信明納卡

うちつけに年にまさるとをのれ風の音にぞ

前大僧正尊光

ちゝ乃浦入海のけしきみちとい松原をゝしの橋元

清水ゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]百首の詠[illegible]

[illegible]

[illegible]

時ゝ人ゝ

後京朝臣納ル

四ゝくゝの花の衣乃ゝ衣ゝ

百ゝ敷ゝ乃中ゝ鶴をゝゝとれけゝ

月花門院

ゝゝゝゝゝ衣ゝゝ衣ゝゝ

雪に波ゝゝ川の上ゝ

各所百ゝゝゝゝけゝ川ゝゝに

順徳院御製

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

忠見朱の國に年ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

天暦御製

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けゝ

忠見

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

詠し侍

善源法師

[illegible]

貞和百首歌の内

中宮大夫[illegible]母

かつらゐつもれるものをみるとかさの[illegible]

詠し侍

後深草院御製

[illegible]

貞和百首歌の内

中園入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

詠し侍

後頼納言

大井河みるかの岩[illegible]

宮滝御幸[illegible]

[illegible]

[illegible]

詠し侍

亭子院御製

世中にいとゐ[illegible]て[illegible]

詠し侍

前内大臣

[illegible]

[illegible]

平兼盛

[illegible]

能因法師

都人きてのみるを青葉の滝こゝにあれとしりつゝ

大江匡房の滝成はてゝ国俊へとゝくこゝろ江

[illegible]

いまゝよりとしをみゝ打出しみて

西行法師

今のゝにかつてしい引滝川あそれ井の国や

[illegible]世をのゝれてこゝにかゝりかけゝ勅命

の[illegible]て又ゝ[illegible]て人の間

法下宮内

に思ひつゝをけゝ

[illegible]

又ゝゝゝゝゆゝ小すゝゝこえゝゝゝ三條殿の水の泡

[illegible]

祝部成久

ゆゝ[illegible]ゝのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]式部

里の名をゝつゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

世をゝゝけゝとゝゝて

三条院御製

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

百[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

家の風体代々受継ぎ侍りける
歌を詠み
右大臣
正三位有範
くれ竹の世代ぬるまうつろひ果てぬ
前中納言為相
山ぢかくなりにし昔恋しくて
ゆかしき書言葉
正二位家隆
かくしつつ思ひ出でぬ世の中を
昔見し人
後山大僧前左大臣
一条院御時
後醍醐院御受禅の孫にて後宇多
院西園寺に住侍けるに門にて
みる
元亨元年百首言葉
前大納言為家
元亨元年百首言葉
前左大臣
玄条内大臣
けふ入る夜のをしのこゑ
ゆかしき
前内大臣
あぢかの水ぬるまうつろひ
前大納言為家

康安二年三月百首歌集の家に読きこしめされ
しを　つゝ　民部卿　按察使實継　うの儀を
尋ねて為明
ちはやぶる　神の御代のをしへ　思ひいでゝ　かゝる恵の　あるを
知る
わつの浦に　年ゆくゝ　川の　もゝ　思ひきこえ　あるを　道をこそ
續古今　竟宴　侯二位行宗
敷島の　道ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
弘安元年百首　前大納言為氏
貞和百首　時
いにしへの　世にかゝる　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
伊勢物語　こゝ　道を　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
月の　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　中納言為茂
みゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
弘安百首　前大納言為氏
めぐりあひ　雲の　月　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
建二位　八月十五夜に　注記をうをはけり　為

よみはける　　前関白九条殿　左府

こゝろしらるゝ人はけるゝ　　雲井の月をみるゝ

雲ハ月をくはけるつかゝ　　後よみる

くゝる山のゝ月の入のいるを　　雲井の月をこゝろ

貞和百首　　前中納言雅孝

よゝ　　五代

よゝ　　八条入道内大臣

歌しらず

二代ゆくゝをいくゝたをつゝ　　前中納言雅孝

七夕の神のゝゝにやゝ　　後中院前太政大臣

立年あまの川をゆく月をみくゝ　　佐京大夫保

家日文ナゝ三ゝよみはけるゝ月

弾正尹親有朝臣

月乃うゝはるくゝ山ゝ　　前大納言為氏

月三の中に

をゝ月ゝゝ　　人の家ゝ

わの宮のゆうこにみぬ海のよせ月見よりこと人よりも世間

孔安百さう言ちしし舟　　慶原為房

和言浦に三河みとそあ〜すとも舟も今人なこれ世ゆ云の舟て

宮草述懐　　源成賢朝臣

ちはの草つうをく教へ河もれこも国あ〜うう〜言ちて生

竹林院入道左大臣いちう右大将ゆけるに伏見院製

をあうう〜あうりて行りをけうおくに

伏見院御製

かうこと山うこの水ちうこれうう〜岩のうう〜山のうう〜みこと水く

御言ちうこうを我ゆ者ゆのおくに　　後二条院御製

わう勇世にあうう〜後ゆあうと我こい後のいゆの水生のあし

文和三年十一月八幡宮社会悠紀方の額書こう

我くの古今をみゆく　　従二位行忠

みうこれは思ひいりの水ちうれ後いとれはよりのうこを

人のゆ今をけうを見いうれうこ尋け我こ言ち

中こ兵法を我いおくゆ書けう

あれつぶる岩の川ゆしたるにちるをくけるかもの紅
屏風の色よ花の末あるる家に人来てあるまゝ
白いかるる所　　よみ人しらず

ふるく宿みるくて梅ちかつてうりをわるれ出るる
方を人待道絶家よくふりいてあるいるる附
ゆるかゆるくゆ中川のうりける

ありさらいてくるいるる方のあれるあるまゝあるとつれ出る
此　　贈左中将惟喬

道命法師

梅ちる所まゝあるにゆくいるるれるるるれるるるれる
貞和二年百そる言ちるける附

中園入道前太政大臣

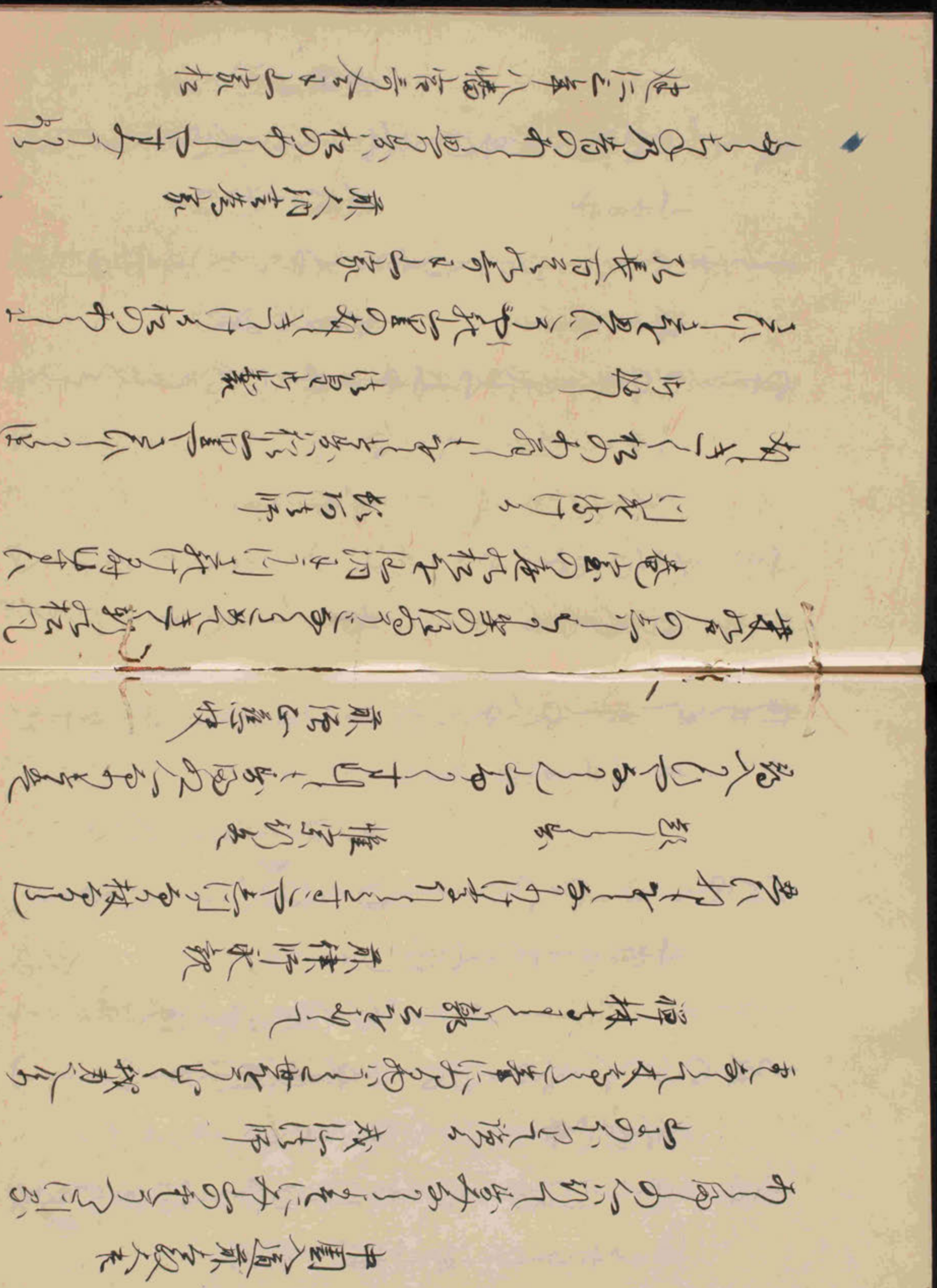
又代ゆくるるにつのつくうるる出るる松のいるるるまるるる
山家言てよみ侍ける

前大僧正寶恵

ちる雪のおりへはみゆる松のしらゆゆ世代川千掬ちるる
迷惑ちる言よ

平貞秀

結出くみるる川代るる言の多ふするる山の有明る月
百そる言ちる附山部



後鳥羽院御製

ながこゝろ我をとゝ思ひ捨てよ後世の事は

山家を　後京極摂政

うゝしきをきゝ入れすゝ心山里に又入りし人の面影

郭公　信実朝臣

あすしらぬ命はかりてとゝ山ゐを都人のもとよりてゝ

山ゐ人のこゝろ慰みくはけるよ

めり　後京極殿

山陰に木望の声をうゝ聞くに我が消ぬるゝ

郭公　讃人しらず

俺思ひ我い杯乃あ所のくれしとゝ思へくすゝ聞くゝ山のおく

ぬれ人みゝ山のおくゝ杯家世のくゝしゝ山ゐ人

信太郎清

常に思ひ人のうゝ聞かくゝ我ゝて人のどゝくゝ道ゐ聞ける

只成法師

山家年ごゝく

拾家使の歌

うゝ人のゝ山ゐ人ゝ山里に住ゝ世成ゝ思ゝて人ゝ聞ゝ

源頼氏

人ごゝ思ゝ捨ゝ山ゐ我ゝ山里に住ゝ者のゝ聞ゝ座ゝ聞ゝ

源頼仲

[illegible]

洞院橋改宗百[illegible]寺に

藻壁門院北殿

[illegible]に夕[illegible]山里より人々[illegible]

東山の所[illegible]

前大僧正尊什

世[illegible]に[illegible]山里[illegible]

山家の人を

法京禪尼

山ゆゑ[illegible]

山家遠年[illegible]

[illegible]に出すべき業の[illegible]

いづくの國[illegible]

法京禪隆

後京朝村

かつとめて思ひ[illegible]

四家焼

[illegible]

備正桓光

[illegible]

百[illegible]三の[illegible]付四家

二月法祝日[illegible]

[illegible]門四の[illegible]

[illegible]

世の中は煩の山四五つの屋位うしてよりやいけまて

大納言殿實母

八十に成りくあまりて後よめる

是法師

白へくと世のうきよこそしらるれ波いけまて風をとるけの

哀しき哉

前大僧正行仲

ゆつとなりきこまを思へは七十のあまりとにはつるつるこ小

前大納言良経

いはつくよりけるは春日野に立つ人とはるこ松の下草

述懐の哥の中に

大僧正忠性

いつまくこ思ふ人は居なれて命の為に命を

捨てはなれ

法師

いたにたえうしこ思ひ世の中の面のうつり方こそ悲

老後述懐こ以ふまを

法京長舞

いけまくこ世を思ふて池に出て命の上をうつ酒をあけ

哀しき哉

光定上人

かいなくつつくよりけてい為てくよりはたるのこと火

後の世にてをもろけくわしけれそれ者あれ

法印定慶

川のに行道い有こと志りしかれ共ゆ

藤原成茂

述懐三首

源光広

俗にしたがはすくてつらわ人のるけること世して思いるる

宗祐法師

幾かのしうこと世の外に捨しかはなしを人のをけること

法之法實上を

をへくく世のうこいるるしこ思いたしいつを見ん方を欲くい

一条右兵衛大尉

河を

あすの河あ所のうらをとるわ行宮る世のみを人の紀

之善直信

歌しる所

かくうのうこいるるを思ふ方ぬ行こて世をい恨る

貞和百首の内より恋

入道二品親王法助

杉くに来こうかも我方のうこを思ふのるけるの世て

宮内卿通俊

東路のこ川なのもしの乃うこと思ふて世を後る

歌しる所

永福門院内侍

あつまの国にまかりてはべりける時、
人のもとにまかりてはべりけるに、
人のもとにまかりてはべりけるに、
人のもとにまかりてはべりけるに、
人のもとにまかりてはべりけるに、

源直氏

述懐の心を

藤原雅朝朝臣

うしなひてはべりける人のもとにまかりてはべりけるに、

真慶法師

いきて世にはべりけるとき、人のもとにまかりてはべりけるに、

法印宗尋

歌しるし

有とはいふ世をうしと思ひいる身にはあらぬ命

惟宗忠景

世中のうきをなげきて歌よみはべりける中に、

清原通宣

浮世をいとはしきものとおもひけるに、

述懐の心をよめる

平政村朝臣

うきを思ひ知れば世をうしとおもふ人のこころは

法寛法師

うき世をいとひてはべりける人のもとにまかりてはべりけるに、

信生法師

世を捨てはべりける人のもとにまかりてはべりけるに、

[illegible]

詠

[illegible]

清玄國助

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春の消えてのちはうゑなるあてを付をばの思ひおもひ

山田法師

賀茂基久

ふるわをつくるにも捨思ひ出ぬ何ぞうゑ世も住よりの者を

大江為廣

捨てを思ひのこしくいくそばの世ぞうしらのこうゑみる

普請法師

わくゑのいうゑいくそとつくる世を思しにるゑ捨やすし

前参議廣良

歌を

現はいくそとうくゑわいるゑをうくゑいみゑい美ゑ捨ゑ

慎舊の心を後ら　行西法師　教ゑて　しりて　賤のをゑ

民之法宣子

うゑ世ゑのゑ思ゑうつのゑ　法みゑを　美ゑ　人ゑ

法師源意

恵ゑ世ゑの昔ゑ思ゑつ　西ゑ　ゑみゑ美のゑ捨

歌

源義春

我ゑうゑつゑうゑしゑいゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

道昌法師

いゑゑを思にゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

平英保にうつりゐくゑ西国より住侍りまを思い
わく　平守時朝臣女
とゝろうちきゝ川ちのいとゝ人を方の思い初しを思へ
貞和百首ちうけ府
なのゝうゝうこゝかちゝわ思ひ世のむしるよるれハ　入道二品親王
をゝうゝ

新拾遺和歌集巻第二十
雜部下　雜躰
短歌
富士のゝをのうみくゝよ　赤人
あまつ川ちの　つの花日ちゝ　みこ望く　ゆくかゝこと
すゝつ石　命のゝ長ゝを　あまつ乃ゝ　ゆくをみれハ
ゝ風日ゝ　新かくゝ　て月ゝ　ゝうゝみす
しゝ長ゝ　いこゝちゝ　ゝ花ゝくゝ　雪ハゆりけゝ
かゝゝと川き　いゝつゝゆゝ　命のゝ長ハ

香具山をよろひうること

讀人しらず

あまのかぐ山 あまのかぐ山 うちみやま まさきのかづら
岡川の岸に 池をみるらて さそふらもこの花しけし
あるへてはかとをくらて へけるよ あちはひをこと
をくしこの花 をくて人の あそふ命のよい
うちこかを をくて到れ おくて人命は

源改長朝臣の家にて人々命の三のよみけるは
初冬述懷といへる心をよめる

大納言經信

あをくに国の 年くれゆせ ちかや命の 秋三月は
かりと思ひ花 高ちの色を 山ひしをて 野山のくさ
しかの花を かりをかるる 到くまも こをちの里は
田しかの夕 う花へ立くて しかの花や 行の色をこそ
ろ命く花 人をすまし 初のりも 初のりも
をけるこを 市の山は 庭のおとに 年をあこ
をくぶ乃 ちくまの こ ちちよ国し
ゆくかをを きてみきてを みをしをを 田をばの花ば
とみちをし あをに鈴こ あをに国に 寿しちを花は
月の年を すをちふを をくしを命 しをを人す

たゝしまに　すみけるあも
かつらを　ゆきて　ゆく
かゝくす　ゆくすゑ　人も
いてゝを　忘れてこそ
ゆかゆれば　つゆ　ぬきて
ゆくすゑの　ゆく
ゆくこゝに　人をよろひの
くらもて　しるべ　ゆく
何なけく

みちのくの　ゆくの河と
ゆくみこゝに　ゆく
月のこゝに　春日の山も
かゝけも　つゝゐ
ぬきて　言葉の
ゆくいかに　ゆく
ゆくを　ゆく
草もこゝに　我ゆく
ゆく　ゆく朝夕

[illegible]

秋の山代より
ゆくすゑ　ゆくに
ゆくこゝに　ゆく
ゆくこゝに　ゆく
ゆくこゝに　ゆく

すゑの世に　あるまじきまで　いとうるはしく
しまめかしう　世のすゑを　かなしとも　乃
あはれにも　さへ　人のしれる　つゆ　なきまで
おつるみのを　後の世のその　ちりぬるを
きまつと思へば　あるかなきを　人の災ひも
いつくとも　谷のうもれぬ　くらもなく　島の変も
おくやまの　ものうき人に　なくやわれか

久安百首　雪　なりけり

左京大夫　俊頼

うつる方　世のつねしも　つもれども　いつ見
はかりけり　しらいとの　ゆきのしたの　ゆくすゑの
うき人とも　うつる命　ゆきの山　ゆきまつ
方なれども　つもれども　いとひすてる
平力なる　陸奥　なるこの　あしに　言のはに
きうとも　ゆゑ　ゆゑに　うりかへ
ものとて　世のしを　おもひすて　後の世をこそ
おもひけり　うき世の中を　ゆきいつまで　ゆく
ゆきひけり　もつるとも　ゆきの　けるこ
そちの　をを　をのつから　ものの　けるを
かりつる小

[illegible]
反哥

[illegible]

旋頭哥

述懐の心を　　衣笠前内大臣

ちるをみて世をいとふにつけても　　信實納言
ちるをみるにつけてもまた

墨染の袖にかはしつつ万もとゝの心の
色やなるらし

恋しき子　　源有長納言

[illegible]
てきゆる浪のうへの雪

折句哥

藤原仲實卿

しけり舟藤のうらこしにをく　　後頼納言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人しに成てう秋くさはらの花みくの仲山中しの秋して

雪の雪に成くうちのもとへ命つくしくらし

ねしうまを打句ゆくかりつとよをそそ

よみ人しらず

たそかれ山風うしひさうしもしのこ秋ごの花うごまるぬ

四百番三の合を打句ゆく判とう野ゆ月

後鳥羽院御製

是乃へのゆゆ落葉又ほ白ちほのくいかう幸山の月

さかりうつまこいふまを

後頼納言

さ乃葉ゆ秋ゆ山りし清のこ風つ屋ちうゆ雨と経

物名

但馬の國のいつ山ゆ社まくゆのようご

云草を　重く

ちうつゆういつの文乃りこのこ内人ゆのようつ千ゆ花

かゆ　貴く

板のゆをゆつゆを花ゆみゆ義りうゆ池ゆ山し

さうつ日ゆを　前中納言宗家

秋山ゆいく代へ乃秋空のひうくゆゆ山ゆ紅

くつて　志井　しちぐ

左近中将真氏

そらゆくいのちをしらぬるを秋はもちぬるく枯の志ろ縄

くれ　志ろは　まつと

よみ人しらず

月ちりを更ふけるかちぬ枕しら川流のしるしこゆる

志ちつ　ゆき　こゝ　ひと

うゝやうし花ちりぬるに風ふきあへるこゝろ人のしらなん

二条院女房

をこめくけるよりをゝ言ちりつるよりゆゑあつと

をれいみ川のををつくよみ侍ける

民之信頼改

水ひくゝ流るゝの名ちりぬるをけさいたゞきまうら

白波百ゝ三のなかりけるゝ島ゝ浦中ゝ志ちやみ

皇太后宮大夫俊成

恨ゝ後ゝ　ゝ　ゝ　

誹諧

山鶯を　中務卿宮尊親王

さびしさに人くるしとなく山里のいりしけるかなかなの声　大江千里

ぬ柳みどりの枝のくりかへしいうくしすしと山ちかたね　後鳥羽院

よしさらば山ちるへきさくら花ちりくしぬ人ぬしの山風　忠見

雪のうちに春はきにけりうぐひすの氷とけるあしの水の上　藤原仲文

白雪のふれるあしたの春の日はうぐひすなきにけりあり

めのしのちれぬくるをうらやましてをしをしめをれい　後京實方朝臣

をちかたにちかなくるこえ思ひわたるあまをいとうとん

法性寺入道前関白家と男女房ゆうしく

ゆけゆけはよしのゆきをけみくゆきをけみこそ

れいわくしいらもくみたのあるあるくゆくゆ

又の日ゆいうくアけるきのふのくるあれあり

うたいこうおりしくこと女房申けるなりまとよりたる

清浦朝臣

もゝこ社のみ宮めぐりよりおもしろくうたうこゝろゆし後世をこゝ

椋泊をよみる

之後朝臣

夕ゆふにかつしかるいくしほこゆけてこゆけばうたいとみち通

新しき宮

従二位為家

わつ恋いめぐる入川のふかあつまこゆ下ぶきいをこめるうたをる

入道二品親王性助家文十首之内

後西園寺入道前太政大臣

月あつまこゆ山の居ぬこすゝ社ほゆををてすきうるゆ

ゆふのはいとこゝ山のうこゝうたれ明ゆ文之折ゆ思まに

鶏水鶏をきゝて

よみ人しらず

明ゆ国をたゝうく社交のゆ水鶏や今社

一夜松ゆく鶏音をいとうちけゝを

ゆふ月をし社の小野の一夜松今行をのみうこゝ今

冬ゝ雪中月

従二位為家

滝川川月みゝ社一玉のこゝうたれ水のいとすちゆ行

柳随風こいゆまをを

西行法師

みちとせいまのかぎりとかけてふるとしをしるべきは青柳の糸

寛治百首歌 前大納言為家

ふるさとの山の松木のもえぬるをいかにみるとかいはんとすらん

文保三年百首歌 権中納言為雄

大井河のつくるゐ水のうつひをもつるしらしらし

此代をしらし

十巻抄云

應長元年五月暦晩夏中旬之候以和歌所中書之本書写之同十四日

奏覧正和元年閏六月末代之陰事也了右未代之陰事也波任勝入信慶所望也

暑之時分淡老筆手白しらしらしるし 後花園天皇

前中納言判

永享五年七月 仏閣院殿御筆

十巻

右集歌年令未詳今按今おもうる陰事 勅命加奥書之

右兵部卿為尭雅康

文明十年十月廿七日 右兵部卿為尭 仏閣院殿御筆

永享五年九月廿日

四条九条中納言 文明十年十月廿七日 四条中納言

正信